

373-582



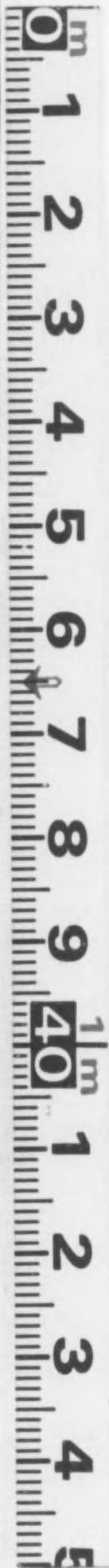
1200501450481

73

582

3

2



始



外504

別

け



まごころ
まごころ

中柴末純著

財團法人
借
行
社



正
人
命
書
本

Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including characters like 正 and 命.

天正神至
與義息成

本
人
印
書
五

873-582

序

來る昭和七年の一月四日が長くも 明治聖帝の我大日本帝國陸海軍人に對しいとも有り難き勅諭を下し賜ひし滿五十年に相當することは、一昨年來的確に氣附いて居りました。のみならず、勅諭の神髓たる「まこと」に就いては、永き陸軍生活間特に此十數年來私の中心を爲せるものであり、凡ての研究の核心であり、而て又實に日常生活の唯一なる目標にして其の糧でもあつたのであります。そこで、明春勅諭御下賜の記念日迄には、是非、如上の「まこと」に就き幾分でも平素研究せる結果を取纏め、之に就きて、江湖の諸彦殊に我親愛なる軍部方面僚友各位の御批判を乞ひ度き熱願を懷抱しましたが。着手後、宇宙古今を籠蓋する尊嚴にして雄大なる「まこと」の眞髓を徹底的に鮮明ならしむ可く、私の研鑽が未だ不充分にして、加ふるに時日も亦餘りに切逼せるを痛感しましたので。如上の企圖は暫く之を後日に譲り、取敢へず、先づ、現下の狀勢に鑑みて必須不可缺と思料する事項のみを集録することに致しました。所

々不備なる點多きは固より期する所であります。尙翻て惟ふに、私自身「まこと」の實現と云ふ點に就いては、未だ一向に進歩せず、觀れば觀る程不足勝の事のみにして之を顧みる時如何にも冷汗肌を濕すを覺えます。然し、せめて、此絶好の意義深き好記念日に際し、聊かにても平素より懷抱する所を述べて、明治聖帝御盛徳の萬一を顯彰し奉る一端とも致し度く、且は、本述作により、極めて拙劣なる私自身も、聖帝の洪大無邊なる天徳によりて、少しでも心身を洗練し、清淨ならしめ、尠くも、幾分かでも日本帝國の臣民として恥しからぬ境地に迄進み度いと念願する所から、兎も角も取急ぎて完成し敢て公刊することに致しました。此點、切に皆様の御諒恕を希ふ所でありまして、何卒御一讀の上忌憚なき御叱正御教示を賜る様幾重にも切望致します。

昭和六年十一月三日

於東都假寓

中柴末純識

執筆の來歴及趣旨

本書に對する私の態度は序文に於て盡せりと雖、尙左に執筆の來歴及趣旨に就き一言したい。

一、抑々も私が本書の述作を思ひ立ちしは由來久しきことにして、大正十五年東京帝國大學文學部に在學せる時なりとす。即ち某日感ずる所あり、學窓の歸途明治神宮に詣で、「誠の哲學」述作に關し默禱せる後社殿に於て目次の大綱を記述せしが、是れ本書の濫觴である。而も着手せんとするに及び其事業容易ならず、加ふるに一面世局益々混亂し國民の多くは確乎たる目標を有せず、唯日々の儉安を是れ貪るの狀勢にして、之が匡救は一日の猶豫を許さざるものありき。則ち該序述は暫く之を他日に譲り、先づ「帝王學及帝王道」並に「其實現の方法」に關し説述することとし、昭和二年より同三年に互り「昭和の新理想と世界美化」及び「戰爭哲學 戦より平和へ」の二書を公刊せり。後、引續き、時勢の逼迫と世界轉換の機運流行せんとするに觀、

青少年及び國民の嚮ふ可き所を研究せんと欲し、本昭和六年初春迄に「青少年及び指導者の爲に」及「日本國民に告ぐ」の二書を刊行した。其間「まこと」に關する私の思想も略々纏り來れるを以て、更に初志を達成せんと欲して述作に着手し、其基礎篇を完成せしも、爾後事業又意の如く進捗せず、既にして滿洲事變の突發するあり、加之ならず、他面勅諭御下賜五十周年記念の日も亦切逼せるを以て、不取敢前記基礎篇の一部に時局上尤も緊要なりと思はるる須知事項を附加し、「まこととまごゝろ」と題して取急ぎ刊行することとし、本年十月十六日を以て其全部を完成した。則ち翌十月十七日神嘗祭の當日成る所の稿本を明治神宮社前に捧呈し、一切を完了せるものである。

二、本書は其完成を急ぎ爲め前諸述作中より取り來れるものも尠からず、斯くて前書を讀まれし各位には或は重複の箇所も尠少なからざるべきを以て、茲に記述して御諒知を乞い度いと思ふ。但し本書に於ける凡ての記述が悉く「まこと」と「まごゝろ」との鏡に照して見直されあることは其特徴とする所である。

三、本書の刊行に際し、東郷元帥閣下より特に崇嚴なる題字を賜るの光榮を荷ひ、又曾て長官として深厚なる御教示と御指導とを蒙りたる大庭陸軍大將閣下より序文を拜受するの恩寵を擔ひしは、私の感激措く能ざる所である。

尙又本書の刊行に際し、時局多忙の折柄特に教育總監武藤信義閣下、同本部長荒木貞夫閣下の深甚なる御同情と御援助とを辱し、及び教育總監部當局各位並に偕行社編纂部の特に熱誠なる斡旋を蒙りたるは、亦私の感激に堪へざる所であり、茲に特筆して謝恩の念を表したい。

四、私が本書の完成に就き躬ら感謝措く能はざるものあるは、全く前諸著作に於て述べし通りである。斯くて私は一切に向ひ、未熟なる私が兎も角も本書を説述し得たることに付、衷心眞摯なる謝恩の念禁じ能はざるものである。

五、本書は、元來、爲し得る限り、勅諭御下賜五十年を記念する爲め、全部の帝國將校各位に贈呈し度き希望の許に謹述せしものである。此希願は其全部を達成する能はざりしも、當局の好意により其一部を實現し、此の拙き序述が幾分でも、新鋭な

る青年將校各位の伴侶たる光榮を得たる事は、私の衷心より喜悅し感謝措く能はざる所である。茲に特記して謝恩の微衷を披瀝すと云爾。

昭和六年十二月十五日

著 者 識

表紙の文字は心友後藤道明氏が今回公刊に際し特に本書の爲め揮毫せられし所のものなり

序

畏友中柴少將其近著まこととまごころを示し、予に序を求めらる。予の君を知りしは其工兵第三大隊長時代なり、君至誠を以て下に臨む、故に下感激して之に答へ、上下一致衆心城を成し、隊運隆々として興れり。君職を退くの後報國の念益々熾にして、帝國大學文學部に學ぶの後、筆を執て世道人心を導き、著書亦多し此書は君が勅諭御下賜五十年記念の爲め、特に青年將校各位の一讀を期待せる者なり。惟ふに誠は天の道にして、治國平天下用兵統率の大より修身齊家日常起居の微に至るまで、皆之に由らざる

可らざるは、苟も勅諭を奉讀せし者の夙に諒知すべき所なるも、其廣大無邊なる、古來人其把握に苦しむの憾なしとせず。君多年の蘊蓄を傾注して詳に其妙用を説述す、特に吾人軍人の爲め益する所多し。西洋の倫理來て東洋道德動搖せるの今日、此著我邦の精華を發揚するに効あるべきは論なき所にして、其之を公にする正に其時を得たるものと言ふべし。聊か所見を記して序文とし、亦戰友諸君に其精讀を勧誘す。

昭和六年十二月十一日

陸軍大將 大庭 二郎

まことやまごころ

目次

序

第一編 まことの要諦……………	一
第一章 緒 説……………	一
第二章 まことの本義……………	九
第三章 まことの本體……………	一三
第四章 まことと宇宙と人……………	一九
第五章 まこととまごころ……………	三〇
第二編 まことの實現……………	三五
第一章 國 是……………	三五

二

第二章	國是の實現と武道	四一
第三章	文武二道の關係	四七
第四章	武 德	六三
第五章	我國の所謂「文武」の思想に對する歴史的考察	七四
第六章	戦争論	九四
第一款	序 說	九四
第二款	戦争の一般的倫理的價值に就いて	九六
第三款	戦争の人類歴史上に於る位置	一〇三
第四款	結 言	一〇九
第七章	武力、軍紀及統御	一一一
第八章	統 帥	一二九
第九章	機 論	一四三
第一款	序 言	一四三

第二款	活動的人生觀	一四五
第三款	辛苦觀	一五二
第四款	機論本論	一五九
第十章	戦争藝術觀	一六七
第十一章	帝王の武德	一七〇
第十二章	武將の所期と其修養	一八四
第三編	結 論	一九二
第一章	將來の戦争	一九二
第二章	戦争の勝敗	二〇〇
第三章	吾人の覺悟	二一〇
結 言		二一五

まこととまごころ

第一編 「まこと」の要諦

第一章 緒 説

中柴末純謹述



「まこと」の大観

「まこと」てふ語程、吾人の日常に多く使用せらるゝ辭はないが、而も其の眞意義に到つては、充分に闡明せられざる場合が尠くない。世人或は「まこと」を以て平凡なる正直てふ意味に解する者もある。這は勿論其一方面には相違なきも、然しそは「まこと」の極めて小なる一面に過ぎぬ。余は「まこと」を以て宇宙の大精神であり、大眞理であり、大靈力であり、大事實であり、而て又人間生命の眞髓にして其本體であり、而も同時に又、人間精神の眞態なりと爲すものである。斯くて「まこと」は眞事であり、信であり、誠であり、眞であり、眞言であり。意義にして、又思考でもある。別言せば、そは眞理であり、眞實であり、眞情であり、而て又「まごころ」をも意味

して居る。更に換言せば、それは實に、大は宇宙の全體より小は單一なる極微分子に到る迄宇宙一切萬有の眞體であり、精髓であり、而て又眞の事實そのものに外ならぬ。去れば余は、宇宙人生の萬般を解説し得るものは斯の「まこと」を措いて、外には存せざるものと惟ふ。

「まこと」は云ふ迄もなく、偽らざる眞事實であり。それは實に、開闢以來吾人の前に開かれたる宇宙の全般により、有りの儘に説明せられ、解讀に便ならしめられて居る、而てそれを讀破し、それを理解し、了得するものや、人の「まごころ」である。則ち、宇宙内の萬有は、一事一物たりとも「まこと」の範圍を脱す可きものならず、脱せるものありとせば、それは「まこと」ではない。其の眞諦や、本來、口之を説く能はず、耳之を聽く能はず、單に惟ふのみに依りて得らる可くもない。唯、能く信じ、克く惟ひ、能く探り、克く究め、良く味ひ、孜々として倦まず、克く宇宙と偕に起臥し、天地と物語り、良く自と他とを了得し、而てそこに眞我を把握せる時、始めて「我」により體得せられ、其の眞味が味はるゝに到るものである。斯くて余は實に、「まこと」

將來科學と哲
學とは「まこ
と」により歸
一されん

を以て絶對なる宇宙の靈力となし、神の姿の顯れとなし人間の靈性となし、人間に宿れる神の分け魂となし、而て此點で「まこと」即ち神なりと斷言するに躊躇せぬ。此の故に又、將來に於ける哲學と科學とは、斯の「まこと」によりて合一せられ、融會せられ、早晚歸一せらるゝに至る可きものと惟はれる。

惟ふに、現代は所謂「スピード」時代にして、文化の進展は既往に比し幾倍の進歩を有し、現代の十年は正しく從來の百年以上にも相當する。斯くて、近者、世界神祕の謎に對する要點の研究は、概ね六七分通り遂行せられ、剩す所は三四分の追求と全成果の綜合とに過ぎぬ。而も今や、時正に立體的の時代に到達し、彼の莊子の逍遙遊ならなく、爆音轟然、一度び飛機に乗じて天空に遊ばんか、從來不充分なりし處女山岳の全景も、臺灣蕃地の密林も、一瞬時にして双眸に收められ、從來、見方によりまち／＼なりし之等に對する實寫圖の全部は須臾にして綜合せられ、其眞全豹を窺知し得るに到つたではないか。斯くて宇宙と人生とに對する全般的考察とその實現との如き、又如上の機運に到達せること察知に難からぬ。

遠からざる將
來に於て宇宙
と人生の全般
に關する根本
的解釋を得る
の日に來せん

看よ、最近に於て是等に對する人類の科學的諸研究は益々進展し、宇宙間の秘奥は日を追ふて漸次其の解説が試みられ、人事の萬般に應用せらるゝに至れる一面、心靈的諸研究も亦勃興し、今や物心の關係は、宗教、倫理、哲學其他諸般の研究に伴ひて漸く闡明せられんとするの曙光を認めて居る。加之ならず東西文化の接觸は、交通機關の進捗により、益々頻繁となり、互に其長を採り其短を補ひ、斯くて、往時、海により山により隔絶せられた是等二種の世界は、近時漸く、それが各自の立場を了解し、いつか、相率ひて世界人類の開發に戮力せんとするの氣運が暗黙の裡に動きつゝあるのを認め得るではないか。そこで余は、今や人類が、遠からざる將來に於て、地球上に於ける今迄の全研究を綜合し、統制し、其結果として、總て、宇宙と人生の全般に關し、如實なる解釋を試み更に進んでそれを實現するの狀勢に到達し得べきものと確信する。是即ち余の所謂「まこと」の研鑽と考究と體得と而て又其の實行とによりて達成せらる可きものではないか、否か。

余は確信す、將來物心兩方面に於ける研究の完成せらるゝに隨ひ、科學と哲學とは

總て人生は眞
の黎明期に到
達せん

「まこと」を通じて、日を追ふて相協調し、互に相補足して總ては宇宙人生萬般の解決に向ひ邁進するに到り。其結果、窮極に於て從來人間の疑問とせし諸事項が根本的に判明せられ、茲に人生は眞の黎明期に到達し、それが徹底せる研究の應用により凡百の事皆合理的に處理せらるゝに到る可く、斯くて、神の世界、所謂天國は如實に地上に現前せらるべしと。而も吾人は不知不識の裡、既に已にその秘奥の門戸に到達しつゝある、否な、已にその玄關内に進入しつゝあるのではないか。而も堂に入る前には、尙未だ、尤も峻峻なる幾多の難關や障壁を突破せねばならず、そこに尙吾人の試練として最後の眞努力の要求が残されあること言を待たぬ。是れ抑も、主として、余の所謂「まこと」そのものゝ武的發現に俟つ可きものではないか、否か。

翻つて惟ふに、世界が今將に一大轉換機に際會せるは、余が前四拙著に於て縷述し斷定せる通りであり、機は既に動きつゝあるのである。是即ち、余の所謂「まこと」そのものゝ進展にして、それが豫定の進行に外ならぬ。而てそこに無上の轉回が生ぜられ、世界の萬般が整理せられ、未曾有の革新と眞の幸福とを招來すべきこと、想察に

世界は今將に
一大轉換機に
際會しつゝあ
る

難くない。否な、是非とも斯くあらしめねばならぬ。斯くて此時期に際會せる吾人や、極めて幸福なるものと云はねばならぬが、而も又、之に伴ひ、其の職責の重大なる固より論を待たぬ。

光陰矢の如し、斯かる中にも、時の進行に小休み無く、世界の歩みは鋭々としてその唯一なる大目標に向ひ、動きつゝあるのである。此時此際、逡巡遲疑して世界の矢面に乗り出すの勇氣を缺かんか、我國と御互大和民族とは世界の舞臺より退かねばならず、聽て衰滅を免るゝことは出来ぬ。而もそは世界と宇宙と自己自身とに對し大なる罪惡たるものではないか。而て又御互は、拱手して此境遇に墮落し覆没するに甘んず可きや、否や。

余は確信す、這次轉換期に於ける世界整理の進行に際し、眞に世界を指導す可き由緒と素質と潜勢力とを有するものは、我國を以て其の主位と爲さねばならず、少くも我國は地球半面の主導者たらねばならぬ地位に在りと。而も現時我國人の大部は未だ眞の自己自身を知らず、其の國を知らず、世界を識らず、斯くて地球を知り、宇宙を

我國に世界を
指導す可き由
緒と素質と潜
勢力あり

我國民の現状

知り、時勢の進運に察し、此の大事な時に善處するが如き、思もよらぬ處である。去れど、天と宇宙と世界とは、遠慮なく、我國と我國民とに課するに、轉換期の指導者たる可き大任務を以てして居るではないか。惟ふて茲に至れば、我國人たるもの覺えず切齒扼腕慷慨悲憤せざるを得ぬ。そこで余は、吾々御互が、先づ速に、斯の重大時期に際し我國上下の嚮ふ可き眞の覺悟と之に應ずる透徹せる大方針と方策とを研究決定し、克く慮り能く圖り、そを洽ねく國民全部に了得せしめ、萬民各々其の所に依り其力に應じ、偕に俱に相携へて一致協力し否な融合して眞の一團となり、畏くも我聖天子の 大御心を以て其の心となし、我國に固有なる正義の大旗を振り翳して、敢然、世界の眞只中に推し出し、其善化と淨化と美化とに向ひ慕進せねばならぬものと切思する。而もそが唯一の基礎たらしめ本源たらしむ可きものや、實に「まこと」研究の大成と其の發顯とに待たねばならぬこと、多言を費すの餘地もない。

吾人の所期

謹で惟みるに、叡聖文武英明無比に互らせ給ひし我 明治聖帝夙に宇内平和の確立に付御軫念あらせられ、「まこと」の實現に關し、明治十五年一月四日の佳辰を卜し、大

勅諭には絶大なる威徳と澁潮たる妙機と不斷の實現力とを包蔵す

日本帝國陸海軍人に對し、未曾有の崇嚴なる聖勅を下賜せられ、「忠節、禮儀、武勇、信義、質素の五箇條が我軍人の精神にして、之が實行に際し一誠以て貫く可き」を宣諭せらる。聖旨優渥吾人感泣の外、言を知らぬ。而もそは實に、古今東西に遍通して悖らざるものたるに於て、獨り陸海軍人のみの専ら奉戴す可きものならず、御互七千萬同胞は勿論、汎く世界萬邦の全民人が、平和の保障、文化の擁護、正義實現の規箴として、造次顛沛にも忘却することなく、不斷に深く服膺せねばならぬ無二の信條であり。茲に本勅諭の絶大なる威徳と澁潮たる妙機と而て又不斷の實現力とを包蔵すること言を待たぬ。

爾來烏兔匆匆早く已に五十年の星霜を閲し、其間累次の征戰を経、東洋の平和漸く確立せられ、國運益々隆盛なるに到りしと雖、「治に居て亂を忘れざる」は古來の戒にして、降雨時に對する準備は晴天白日に爲されねばならず、何人も「禍亂が太平の裡に兆し病苦が健康の中に胚胎せられ、戰機亦平和の間に包蔵せられ」ざるを保證し得ざるは、昭々乎たる宇宙の事象である。斯くて、心を「まこと」にし、眼を放つて熟

吾人の覺悟

らく世界大勢の動靜に察し、顧みて現時我國上下の狀勢に鑑み、茲に本記念日を迎ふるに際し、謹で聖諭を拜讀し、感慨無量一層の禁じ能はざるものがある。是抑も余が現下の逼迫し而も混沌たる世態に鑑み、不敏を顧みず鴛鴦に鞭ち、敢て取急ぎ本書の謹述を企圖せる所以に外ならぬ。

以下如上の見地に基き、先づ「まこと」の大綱に就き考察し、爾後、主として「まこと」實現（余の所謂武的方面）の要諦に付研究しようと思ふ。

第二章 「まこと」の本義

我國字中「まこと」を尤も能く顯はすものは「眞」の字である。以下眞字を第一とし、「まこと」を表はす主要なる文字に就き、一通り考究しやう。「眞」字は「まこと」を表はす文字中尤も強き意義を有して居る。元來、漢字は象形文字で、之を分解すると、一字でも、色々の深遠な意義を包含して居る事が分かる。「眞」は分解すると「日」と「レ」と及び「ハ」になるが、其中で、「ヒ」は「能」くの意味を有し、「レ」は

「眞」字の意義

「正」の意義を持し^天地に象れるものにして、即ち天より正しく示されしものを地に敷くてふ意を寓して居り、「ハ」は形の如く開展を意味して居る。斯くて、之等を綜合せる全體としての「眞」は「日を能く正しく地上に開く」てふ深意を藏し、別言せば、そは「宇宙の中心たる「日」の精神を良く正しく我地上に開展すること」に外ならず。更に換言せば、這は、宇宙の「正」或は眞理の地上に顯現せるものにして、善、美、愛を包有するものに他ならぬ。次で尤も汎く使用せらるゝものに「誠」なる字があるが、這は、「言を成す」ことを意味して居り、而も此場合の言は音聲に發する言語のみならず思想をも意味するが故に、「誠」は畢竟人間思惟の完成を意味し、その結果は亦「眞」の顯現に外ならざることゝもなるのである。「信」も亦「まこと」なるが、そは「人の言」を意味し、而て本來、人言の伴なく違背あるまじきを想定せるものである。

又日本語「まこと」は、漢字に宛て嵌て説明すると「眞事」にして、此の「眞」は如上の「眞」、「こと」は事物である。尙、此の「こと」を近代の學問的に見ると、紀平文學博士も其著「日本精神」に於て述べられある如く、獨逸語の *Wahrheit* に相當し、主

「まこと」の意義

客兩觀の融合せる状態に命名せるものにして、這は各自、自己自身の精神的内容を分析したり綜合したりして見れば、克く分かる。而て筭博士も「古神道」中に謂はれある如く、「こと」の眞なるもの、善なるもの、美なるもの、有り難く懐かしきものを「まこと」と云ふのである。即ち此場合の「眞」は單に普通の眞の意味に解することなく善、美、愛等一切の人格的價值を含めるものに外ならぬ。

本邦に於ては、古來、皇國を以て「言靈のさきほふ國」となして居るが、這は、言語を以て、單に音聲的のみものとせず、人間の内的なる眞髓を表はすものとなし、我國に於ける「言語そのもの」あらねばならぬ眞價值」の發揮に對し、讃稱せるものなりと惟はれる。斯かる見地より云ふときは、言語即ち「ことば」、略して「こと」は筋道、理法、又は事實の云ひ表はしでなくてはならぬ。去れば我國に於ては、筋道や理法も亦「こと」にして、又之を「ことわり」等とも云ふ。「ことわり」は、漢字では判斷にして正しき價值の認識を意味し、之が爲め先づ正しき分析を必要とし、之に次ぎて綜合の作用を要するが、右に相當する獨逸語の *Urteil* が亦本來分割てふ意味を有

することは、誠に面白き對照と言はねばならぬ。之を支那流に言へば、道にもなり、法にもなるが、此法は印度に所謂「ダルマ」であり、彼の新約全書中の「ロゴス」Logos の如きも、畢竟之に別ならぬ。同書第一章の初に曰く、「太初に「ロゴス」あり、「ロゴス」は即神なり、此「ロゴス」は太初に神と偕に在りき、萬物之に由て造らる、造られたる者一に之に由らで造られしは無し、之に生あり、此生は人の光なり、光は暗に照り、暗は之を曉らざりき」と。是、實に、萬物の一切と吾人人間としての命と光とが全く「ロゴス」に基くものなりとする思想である。斯くて、所謂「ロゴス」は人の人たる所以の眞髓にして、余の所謂「まこと」であり、そは即ち道であり、法であり、理であり、眞事であり、眞言であり、誠であり、意義にして又思考でもあるのである。そは實に、觀念的のものでなく、實顯力を包藏せる宇宙萬物の根源であり、而て又、吾人人間の力と行との精髓に別ならぬ。隨て、そが如何に力強く、至美至高至善至眞至仁にして、絶對的のものなるかゞ克く分り、斯くて、前述せる「眞」字の意義とも、全く其軌を一にすることが能く解かるが、此邊は「まこと」の解釋上尤も

留意す可き事柄なりと思考する。西洋には如上の「まこと」に匹敵す可き語字を有せず、之に近似せる各種の語字は、概ね單に「僞らざる信實」てふ意味を寓するに過ぎざるが故に、茲には其一切を掲記せざることにした。而て以上の如き、又、偶まゝ、東西文化の特質を表現するものとして、頗る趣味深き事項の一なりと惟はれる。

第三章 「まこと」の本體

既に前述せる如く、「まこと」は宇宙の凡てを包容し、その全部に瀰蔓し、行互らざる所がない。夫れ丈け之を言語に説明し、筆舌により解釋す可く餘りに大ぼさい。斯くて、如上の意義よりせば「まこと」は宇宙間に於ける唯一絶對のものなるも、而もその中には、あらゆる相對をも包含して残す所がないのである。西洋には、此の「まこと」に匹敵す可き文字を有せざること前述の通りなるも、漢字に於ては、古來之を表はす爲め種々の語字が用ゐられて居り、所謂「無」、「中」、「眞」、「神」、「玄」、「一」等の諸語は、之を表顯するものとして、まづ尤も夫に近きものである。以下、之等に就

「まこと」の表
現

き一言しよう。

「無」に「中」

老子は、其の唯一の經典たる「老子」に於て「無」を高調して居るが、それは勿論、「有」に對する「無」に非ず、有、無を超越する絶對の境界に對し、假に名けたる名稱である。中庸に於ては、之を「中」と唱道して居るが、それは、云ふ迄もなく、兩端の折半に非ずして、嚴正なる本然の中道を意味し、而も其中兩端を包容せる底のものにして、是亦、超絶的のものである。「眞」は前述の通りにして、「神」は、本來、靈妙不可思議にして超絶的なる宇宙に對し自然の人間類に湧起せる宗教的の信念の表現に外ならぬ。此他、老子の序述せるものに「玄」の字があるが、這も、固より、單に、光明に對するものならず、明暗を超越する境界にして、之を表はすに適切なる文字なき爲め、老子は「無」及「玄」の如き否定の文字を用ひ、之により有らゆる相對をその中に包容せんとせしものに外ならぬ。「一」は萬物發展の根源にして、萬流之より發出す、故に、それは絶對を表現するものとして適當なる言ひ表はしの一つであり。這は、有名なる伊國近代の哲人「クロッチェー」Croce。氏も其の哲學に於て屢々用ゆる所に

「玄」と「一」

して、彼の表現せんと欲せし所も、略ぼ如上と同一であり、彼の所述を讀むと、亦、雜多の全包容として「一」を使用せることが分かる。

「まこと」の本體とは

故に余は、「まこと」の本體に對し、云ひ得可くんば、之を「宇宙の萬有と所謂眞、善、美、愛の凡て（物心の全部）を包容し、而も相對的のものでなく、絶對なる宇宙そのものを如實に表現するものなり」と稱道したい。斯くて、前述せる如く「まこと」は宇宙の大精神であり、大眞理であり、大靈力であり、大事實であり、而て又、人間生命の眞髓にして其本體でもあると謂はなければならぬ。而もそれは實に、細を捨てず、微を餘さず、宇宙内のあらゆる事物に遍滿することを以て其の特色と爲し得よう。

茲に一例を取り。余の所謂「まこと」の本體に就き、其一端を説明せん。之を自動車に看よう。自動車は近世科學の所産にして、世を益すること甚大なるも、而も觀る者によりては之に對する考が種々になる。譬へば、臺灣の生蕃が始めてそを見たる時、這は一種の怪物にして、前部の燈火は爛々たる其眼目なりとも想像す可く、我國に於ても曾て余が明治四十一年始めて軍用の研究車二臺を運行して東京青森間を往復せし

「まこと」の例解

時、岩手縣某山地に於ては、岡蒸氣が山より飛び出し來れりとして大騒ぎせしこともある。又到底一生涯之に乗車し得られぬ如き極貧者ありとせば（現時は殆んど無かる可きも）、其の傍若無人なる運轉と捲き起す砂塵の濛々たるに遭ふ毎に、時としては一種の嫉視若くは怨恨の情を起す可く。偶々晴れ衣にあたら泥土を見舞はれたる子女の爲にも、それは實に怨めしく呪はしきものゝ一たらん。而も其中に收まりて得々たる當世紳士貴女にとりそは一種の誇を感ぜしむるものゝ一たる可く。事業家や醫士等にとりては一種の重要な資本にして、飛行家より見れば誠にのろ臭き馬鹿氣たものにもなるし、工業家よりせば近世學術進歩の賜物とも感ず可く。尙又達觀せる新人は、それを以て、最早盛時を過ぎ凋落の時代に向へるものと、觀るかも知れぬ。而も靜觀するに、之等は皆其立場々々より觀察せるものゝ一面にして、其全豹を盡せるものならざるを知り得よう。そこで、之を仔細に考究せんか。そは人世發達の道程に於て、人間の要求上案出せられたる產物にして、その中には開闢以來集積せられたる人智の凡てを包容し、又其原動力の根源をなす燃料は太古時代に於ける地球の變動期に埋藏せら

一自動車にも
宇宙が含まれ

れたる靜的「エネルギー」が時と所とを得て其力を發揮せるものであり、至極便利ではあるが、段々其數が増大すると、目下米國に於て見る如く、之を近距離に用ゆることが却て苦痛の種になる如き狀勢に立ち到らざるを保し難かるべく。又よく考ふると一自動車の運行も是宇宙に於ける事物運動の一種にして、直接間接に宇宙の進展に對し、參與するものたりとの結論にも到達す可く。斯く見ると、單に一自動車の運行にしても、之を究め極むるときそは實に宇宙的に運行せられ宇宙と關聯しあることが發見せられ、之等大小種々雜多の見方を盡く包容し綜合する所に自動車の眞諦が存す可く、然る時そは實に絶對的のものとなるわけにして、是即ちその場合そのものに對する「まこと」に外ならぬ。尙之を他の例に求めんか。惡に對する善は相對的のものであり、惡を拒斥するものにして、未だ絶對的のものとな稱するを得ぬ。斯かる善、元より良しと雖も、そが一層進展し向上せば、そは最早惡を拒否するものならず、之を包容し、淨化し美化し得るに到る可く、斯くて、この場合の善は最早相對的の小なるものに非ずして、宇宙の心を以て其心とする絶對善に到達す可く。彼の大學に所謂「至善」

「至善」と「一貫の仁」

の如き、孔子の祖述せる一貫の仁の如きも亦斯かる境地を道破せるものと見ることが出来るが、是即ち宇宙人生の到達せねばならぬ、否な到達し得可き極地であり、余の所謂「まこと」そのもの、境域に別ならぬ。

老子曰く、「道可道非常道、名可名非常名、無名天地之始、有名萬物之母、故常無欲以觀其妙、常有欲以觀其微、此兩者同出而異名、同謂之玄、玄之又玄、衆妙之門」と。是れ老子全篇に通ずる大思想であり、言簡明にして、克く宇宙の眞と「まこと」の眞諦とを道破せるものである。そは實に常道に非ず、常名に非ず、一舉直に宇宙の幽玄に突入し、そを把握せる概がある。而も常道と常名とも、亦元より盡くその中に包容す、是即ち所謂玄之又玄、衆妙之門であり、余の所謂「まこと」そのもの、眞體に別ならぬ。夫れ非常の眞理を探求せんと欲せば、之を尋常の研究に委す可からず、克く虚心坦懐、深く大自然の歸趨を洞察し、審に其端緒を討尋し、之を手繰りて、其本源に還歸せねばならぬ。斯くて、宇宙の何ものたるかを體得する時、是れ全く「我」を了得せる時であり、そこに始めて眞の人生を會得し得可く、是即ち余の所謂「まこと」

そのものの眞の體得に外ならぬ。

第四章 「まこと」と宇宙と人

之を要するに「まこと」は宇宙の大精神、大眞理にして大靈力、大至情であり、而てそは直に人間生命の本體であり、斯くて、その發現せるものが人類道德の至愛、至上、最高なるものである。去れば、人苟も「我」を論じ、「我」を知り、眞に自己自身の何物たるかを究めんとせば、先づ宇宙に就き知る所がなければならぬ。そこで、抑も宇宙とは何か。這は勿論一朝一夕にして説き能はずと雖、兎も角、そが無より有に發展し、「世に絶對の無なるものなきも、假りに斯く名く、即ち有は集合の形にして、そが分散（茲に所謂集合、分散が通俗的以上の意義を有すること論を待たぬ）する時之を無と稱す」、爾後不斷に其進展を繼續しつゝあるものなるは、争ふ可からざる事實であり、そは又今後に於ても、永久に繼紹せられ不斷の發展を遂ぐべきこと、想察に難くない。そこで吾人は又、斯く無窮に繼續發展しつゝある大精神、大靈力、大事實の嚴

宇宙と人生の
進展は「まこと」
との開展に
對しならぬ

存とそこに一貫する大真理の活躍とを否定し能はぬが、是即ち所謂「まこと」そのものであり。斯くて、宇宙と人生との進展は「まこと」そのもの、開展に外ならぬ。

抑も宇宙には幽玄靈妙なる這般大精神大真理大靈力大至情大事實が無限無窮に遍在し、上は幾多の太陽系より下は日月、星辰、山岳、河海、動植物等ありとあらゆる萬物の總てを包容し、而も之等をして相互に依存し、連續し、統制し、調和せしめ、逐次各物各個各集團の進展を圖り、之により宇宙そのもの、進展を圖つて居る。之を譬へんにそは尙活動映畫にも比し得やう。假りに現代人中活動映畫の仕組に付毫末の智識をも有せざるものありとせんか、若し彼等を拉し來り俄に畫面を視せしめたりとせよ、彼等や管にそを以て不可思議奇妙なりとする外なけん。然れども安んぞ知らん、そこには、斯くなる可き原理と機械とが、映畫幕に蔽はれて其後方に存在し、必要な活動を續けつゝあるものなるを。而もそは、具眼者より見れば何等怪む可き謂はれもなく、其内部に所要の原理が内在し、樂屋場裡に於ける機械の運轉に伴ひ、斯かる場面が逐次に映出せらるゝによるものなるを、知り得やうが、這は採て以て、宇宙と

世界を例せば
活動映畫の如し

人生との見解に例ふる事が出来る。只、此場合、映畫が外部の機械により映寫せらるゝに對し、宇宙の萬象が、宇宙夫れ自身に内在する真理と靈力とにより運營せらるゝものたるの差あるのみである。彼の既成宗教に於て崇拜の對象たらしむる神佛の如きも、亦、窮極に於て斯かる大宇宙の靈妙なる大精神、大靈力、大真理、大至情、大事實に冠せる宗教的尊稱に外ならぬ。而て此大精神乃至大事實は、是即ち所謂「まこと」そのものであり、所謂物心兩界に通ずる精髓であり、本質であり、而て常住に其活動と進展とを續けて居るのである。彼の科學者の稱する「エネルギー」の如き、亦、そが顯はれの一面に別ならぬ。而て這は、又實に、「まこと」を以て其本體とする我、天皇道の眞髓であり、往古以來「まこと」の實現に邁進し來れる我日本の眞精神にして、三種の神寶により具體的に顯示せらるゝものなること後述の通りである。

之を要するに、「まこと」は宇宙の大精神、大真理、大靈力にして大至情、大事實であり、而てそは直に人間生命の本體にして、その發現せるものは、至眞至善至美であり、人類生活の最高至上なる窮極に外ならぬ。去れば吾人は、何を措いても、先づ如

先づ自己の本
心を探求せよ

上の至理と至情と大義とに覺醒し、躬ら斯かる自己の本心を探求し、之を培養し、力附け確立し、萬事之に基きて行動し、運爲し、規律附けねばならぬが、斯くてこそ、そは意義ある生活、を營むものであり、そこに無上の安心立命と無窮の活動力が體得せられ、徹底せる世界觀と人生觀とが確立せらるゝに到る可きこと、疑なき所である。

近來は反宗教運動が勃興し、神佛を否定して居る。其可否は別とし、之等の所謂新人や淺薄なる科學者は云はう。宇宙は本來星雲状態のものにして、天體も畢竟偶生せる物質に外ならず、斯くて、宇宙の靈力を認むるが如きは、太古蠻人の陋見に過ぎず、之を近代文明の光明に照して考察せんか、そは素朴にして、幼稚蒙昧なる謬習なりと。

淺薄なる科學
者の反駁

而も余を以て之を見れば、這是寧ろ彼等の偏僻にして固陋なるを示すものであり、その眼光の狭少にして淺薄なるを笑はざるを得ぬ。何となれば、吾人にして克く自己の本心に立ち返りて、宇宙と人生とを徹底的に靜觀しその眞義を了得せんか、そこにどうしても、深遠なる大原理の存在する事象を否定し得ざる可く、斯くて又這般の大原理に對し、尊崇畏敬の念禁じ能はざる可きを以てある。彼の敬虔なる大哲「カント」

が此思念に燃えありしは、有名なる周知の事實である。

斯くて、大宇宙は、大は天體より小は「アミーバー」、「バチルス」等に到る迄、一切の森羅萬象を以て組織せられたる無限無邊無窮の靈妙體である。而て蒼爾たる我等も亦世界人類の一人として、精神を保持する一個の靈妙なる宇宙人であり、宇宙構成の極めて有力なる一要素として古來より天地に配せられ居るが、同時に又他面本來宇宙により發生せられ且つ其養護により生存を續けて居るのである。斯て、「我」其者や、是即ち大宇宙の「我」であり、而て其限り、又大宇宙は實に「我」の大宇宙ではないか。然らば則ち大宇宙を研究し大宇宙の眞理を探明することは、正に人間としての當然なる責務でなければならず、而もそは又世渡りに關し、最も鞏固なる底力を體得するの捷徑であり、而て又成功に關する秘術の獲得でもある。而も是即ち余の所謂「まこと」其ものゝ了得に別ならぬ。若し然らずして、自己の住み家であり、恩人であり、否な自己そのものに外ならざる大宇宙の眞髓にすら、透徹する所なく、空々寂々、漫然、其日を送らんか、そは宇宙に住む可き資格を有せざるべきこと、論を待たず、

世渡りの秘訣

あり、否な自己そのものに外ならざる大宇宙の眞髓にすら、透徹する所なく、空々寂々、漫然、其日を送らんか、そは宇宙に住む可き資格を有せざるべきこと、論を待たず、

斯ては徹底せる世界觀に基く、牢固たる人生觀の確立し得可き譯がなく、人生にとり、眞に意義ある處世と奉公と而て又成功とが遂行し得可らざること、多言を要せぬ。

吾々は今、吾人が太陽系と稱して居る宇宙内に生存して居るのであるが、斯かる宇宙は尙此外にも數多存在す可きが故に、全宇宙の廣大なる、眞に吾人の想像を超越し、只々無限と稱するの外はない。而て吾人の生存する太陽系てふ宇宙内では、地球を始め、其他の諸遊星が遠心力と求心力との調和により、秩序整然、些少の「くるい」も遅速も、脱線もなく、黙黙として、夫れ〴〵の軌道を辿り、太陽の周圍を廻轉して居る。而て此宇宙内で絶強にして至大なる無限無窮の靈力を有せるものは太陽にして、常に靈光の源泉となり、我地球の進展も活動も變化も溫熱も、尙又その上に發生せる夥多の海陸生物の生育も、凡百の美的顯現も盡く本來太陽の發生する如上陽光の妙力に負ふもの絶大なるは、争ふ可からざる事實である。而て斯かる靈光が如何にして發源せられ、如何なる方法により我地球や爾餘の天體に到達せらるゝか、尙又其の地球に對する眞の影響が如何なるかに就いては、現時尙未だ學者の考究や推臆の悉し得る

宇宙の妙美

所ならず、加之ならず、太陽が何時の時代から存在して、如上の靈妙にして極美なる靈光を發せりや、尙又地球の現狀に進展する迄の經歷如何等の問題に關しては、是迄内外の學者其他により多少の研究が試みられて居るのみで、未だ到底的確なる見當の附きかぬ話である。則ち是等のことを想像した時、太陽そのものが、偉大なる一個の靈妙不可思議なる活動體であると云ふ事が考へ得らるゝのである。此他美麗にして雄大なる雲霧の状態や、星の世界、月の世界を觀察し、或は眞夏の涼夜に蒼空を眺むるとき一條の銀河が流れて居り、それが無數の星群なるを思ふとき、吾等は、一塊團たる地球の小なるに比し、渺茫として際涯なき天空の如何に廣大無邊にして美の極地を現前しつゝあるかに想到し、而もそれが、常に序次整然として規定の運行を繰返すに到つては、今更ら乍ら、其仕組の靈妙にして、吾人の思惟を超絶するもの、遙に大なるを惟はしめる。

更に眼を地球に轉じ、それが、幾多の進展を経て現況に到達せることや、現時に於ても水陸の二者が適當の比例に分布され、そこに無數の生物が育くまれて居ることや、

生物は各々其
土地に生ずる
物資により生
存す

一見極めて安靜なりと見ゆる地球が、我等を始め、あらゆる物體を載せたまゝ、二十四時間一回と云ふ高速度で自轉動を爲すことや、又一分時間に一千哩以上の大速度を以て、太陽の周圍を運行し、三百六十五日五時四十八分六秒を以て、常住に、五億八千萬哩の旅程を運行しつゝあることや、其他地球上には種々氣候風土の相違を有するも、そこには夫れ相應の生物が繁殖し、而て是等は各々其土地に生ずる物資により、其生存を續け得ること等に想到し。加之ならず、地球上に於ける有機無機一切の萬物が、不生不滅永遠無窮の存在たる原子より成り、更に近代の發見によれば、此原子は電子の組合せにより構成せられ、而て此電子に陰陽の二種を有し、陰電子は常に陽電子を中心として、高速度もて廻轉しあること、並に學者の研究によると、電子が極めて微細であり、長さ一寸間に之を排列するとき、其數七兆に達し、又人間の細胞一個は、驚く勿れ、二十兆の電子により組立てられ、而も之等細胞が不斷に新陳代謝せらるゝこと等に想像するとき、何人も宇宙の靈妙なる仕組みと、其が絶へざる活動とに喫驚せざるを得ぬであらう。此他、之を小宇宙 (Microcosmos) の稱ある吾人の身體に

長さ一寸間の
電子數七兆に
達す

宇宙と地球と
人體とに極め
て密接なる共
通點あり

就き、査察せんか、其構造の複雑にして其機能と統制との極めて巧妙なる、茲に多言を要せざる所であり、而もそが一朝疾病に犯さるゝや、極めて微妙なる夫れ自身の作用により、自然の裡、原狀に恢復せらるゝ等 (人體の病氣を治するものは人體夫れ自身の作用にして、醫藥と手當とは、之を助長するものに過ぎぬ) に鑑みんか、誰しも、そこに、不可思議感の湧起するを否定し得ざる可く。尙、之を達觀し熟考すると、宇宙と地球と人體とは、極めて密接なる共通點の存在せるを認め得可く。斯くて又そこに、どうしても、宇宙の全般を通じて一貫する靈妙なる原理の存在と其の顯現に關する事實の嚴存するのを肯定せぬ譯に行かぬ。

而て更に進んで、吾人の心そのものに就き、そが發達の過程と現狀とを省察し、之を近代心理學の所説に視ると、何人も、其變通自在にして作用の微妙なると、其の發達過程の妙諦とに驚かざるを得ぬであらう。而も、此外、人間古來の宿題として、靈魂に關する問題がある。這是、現時尚、徹底的の答案を得ずと雖、最近、其研究益々隆盛に赴きつゝあるが故に、聽て、何とか、充分の解決を見るの日に到達す可く、斯

心的作用の妙
諦

くて、其曉、宇宙内の諸現象が一層徹底的に解釋せらるゝに到る可きこと、察知に難からぬ。

所謂宇宙の成立、其運行と運営及び進展の状態に就き、一通り觀察すると、如上の通りである。而て之が、秩序正しく、繼續的に、整正に、周到に行はれ、加之ならず、彼の「アインシュタイン」 Einstein も云ひける如く萬事が相對的相關的に行はれ、而も終局に於て一元に歸することや、あらゆる生物に對し、常に一視同仁の恩恵が施さるゝこと、並に、それが眞善美の發揚に努むると共に、偽、惡、醜なるものをも捨てず、常に其意義化に力むること等の事實に覺醒せんか、何人も、斯かる靈的活動の絶へざる精進の力行と仁慈と忍耐（實は法悅的活動）とに驚かざるを得ぬであらう。殊に幾億年を通じて、其運行運営に毫厘の差違だもなきことは、如何に大宇宙の精神行爲が至純であり、至誠であり、而て又至健なるかを物語つて餘りある。是即ち易に所謂「元亨利貞」であり、「天行健、君子自彊不息」ものにして、そは、現時に於ける科學の探求以外、超人的靈力のあるありて、然るものなりと信ずるの外はない。而も斯かる靈

宇宙の靈異

天行健

最近に於る科學者の傾向

力や、單に、獨り吾人の世界外に超絶するものならず、實に一切の萬有と萬我とに普遍的に存在し、夫等自身をして夫れ々の進展を營ましめつゝあるのである。之をしも至純と云はず、至誠と云はず、力行と稱し、周到と唱へずんば、天下何れの所にか是等を求めんやと云ひ度いのである。是即ち余の所謂「まこと」にして、それが宇宙と人との遍滿すること、前糺述の通りである。最近科學の長足なる進歩に伴ひ、科學より入つて、宇宙の靈性を確認せる結果、熱烈なる這次宗教的信念を持つるもの、亦尠なからぬが、這是克く如上の消息を證明するものと云はなければならぬ。

若し夫れ何人も進んで、大宇宙と生物界の現象を仔細に査察し、併せて人事百般の事象に潜心せんか。その奥妙幽玄なる、到底筆舌の盡し得る所ならず、前述せる如く、森羅萬象と人事との一切は、悉く相關聯し、調和し、連續し、而も統一せられざるものはなく、而て又各個の部分的進展を企圖すると同時に、全體として大宇宙の綜合的進展を圖つて居る事實を自得し得やう。即ち斯く洞察することによつて、大宇宙の全現象は、一個の關聯せる一大靈的活動の表現なることが立證せらるゝ譯である。

部分的進展は
綜合的進展に
寄與す

ある種の學者や議論家は言ふであらう。以上の如きは、所謂一種の形而上學にして、近代的吾人の領域に存在せしむべきものならずと。這是主として觀念論派により稱道せらるゝ所なるも、「併し前述せる如く、已に宇宙に事實があり、而も人間の理解力には限界があつて、一切の理解欲を嘲笑する永久なる問題殘餘が存續するとせば、正しき意味の形而上學は、常に人間の眞摯なる認識作業に依り正當に守護せられねばならぬこと、論を待たぬ。」是、最近「マックス、シェラー」Max Scheller や、「ニコライ、ハルトマン」Nichorai Hartmann(現存者)により新に唱道せられたる「問題の形而上學」の説く所なるが。這是恰も、如上縷説せる世界觀と人生觀とに立脚する吾人の直觀方法に對し、其正當なるを裏書するものである。

第五章 「まこと」と「まごころ」

「まこと」の要諦や、前述の如く、所謂至眞至善至美至愛にして、絶對の價値を有すと雖、而もそは決して特異なるものに非ず、珍奇なるものでもなく、實に人間本然の

眞髓にして其常道に外ならぬ。而も吾人や、又夫れ丈け、之が把握の困難なるを知らなければならず(特定のものに比し、常道は却て分りにくい)、斯くて人が如何にして此「まこと」を體得し得可きやは、人生行路に對する絶大なる問題である。そは唯、學問のみに依るべきものでもなく、勿論讀書のみでもなく、單に思惟に依るものにも非ず、唯だ一に尊嚴なる自己本心の樹立によりて一歩々々體得し得らるゝのみである。別言せば、そは「眞我」の確立にして、自己自身(心身を含むこと勿論なり)による自己の純化に外ならず。更に換言せば、そは實に「我」の「まこと」即ち「まごころ」によりてのみ獲得せらる可きものなること、言ふ迄もない。

斯くて、苟も「まこと」と云ひ、眞理と云ひ、眞實、誠と稱し、信と謂ふ以上、そは常に「人の有り難く懐しき晴れ々」とした明かるい心」即ち我國固有の清明心(又は清明心)即ち眞心と一體たらねばならぬが、そは、眞理や眞實等が唯り宇宙に固まつて居るものではなく、「人の心の「まこと」の鏡に映り、之により認められ、創設せられ、發展し行くものに外ならざるを以てあり。彼の佛典に所謂「菩薩清涼の月は畢

竟空に宿る」てふ經文の如き、又此境地を道破せるものに外ならぬ。然らざればそは、時に、或は我儘となり、抽象の弊に墮し、若くは邪道に外るゝ等、實際と隔絶せる極めて融通のきかぬものと化せざるを保し難い。

「まこと」なる言葉は、其内容の廣大にして豊富なる丈け、其中には種々の意味を寓して居る。従て前にも説述せる如く、そは、眞言を意味する場合があり、又眞理、眞實、眞心をも意味する場合があるが、是等を云ひ表はす言葉が一つより無き如く、其實質に於ても是等一切のものが調和して一つに融會する所に眞に「まこと」を認むるを得るのである。是等の全部の調和し融合せる根據の上に存在する言葉が眞言であり、斯かる調和せる基礎を有する理法、事實及心が眞理、眞實及眞心たるのである。即ち眞言乃至眞心は同時包括的存在を要求するものにして、其間、價値に本來の差異なきも、特に人間としては「眞心」に重きを置かざるを得ぬ。言葉よりも理法が本、理法よりも事實が本、事實よりも心が本なりと思惟するのが、日本民族の考へ方である。然れば古來皇國に所謂「まこと」の本義も畢竟、清明心を中心とし、事實乃至言

「まこと」の獲得は自證に俟たねばならぬ

軍部教育の長所

業をして之に基礎附けしむることにあるのであつて、全く前所述と異らず。そは一面、言語、理法又は事實の一端に偏らざるを意味すると共に、他方には清明心を中樞とし、何を措いても清明心を離れざるべきことを意味して居る。斯くて、「心の「まこと」」を缺ける凡ては一切理窟の末に墮落せるものなるが、如上の事は寛博士も古神道その他に於て切實に述べられて居る。而て「まごころ」が自己自身の純化によりてのみ得らるゝものたる限り、前述の如く、そは決して見聞により獲得せらるべきでなく、眞劍なる躬行實踐によりて心行く迄了得し自證せられねばならぬこと、恰も、科學の識得に實驗の切要なるが如くである。而て茲に「まこと」と「まごころ」と行との眞關係が存在す可きものなること、言を待たぬ。斯てそこに、軍部教育の眞諦があり、眞値が存し、目標が存立せねばならぬこと、言ふ迄も無く。而て茲に又、畏くも、勅諭實行上の要諦として、特に「まごころ」に就き御親諭あらせられし、我 明治聖帝の大御心が嚴存するものと拜察する。而て這は又古來、我國に於て「みこと」を以て尊しとし、それを以て神の稱呼たらしめたる所以である。古來我國では「まこと」を内容と

命とは

し乍ら、之に超越し、絶えず「まこと」の淵源となりつゝあるものを「みこと」と稱して居るが、「まこと」の包藏者にして其淵源なりと見得るときには、何人も皆即ち命である。日本民族は古來、大君は元より、國民の一人残らずが本質に於ては皆「みこと」なりと信じて居り、斯くて彌々其本質を實現せしめ、そを「彌々榮えしめむ」と意氣込んで居る。是即ち 天皇は勿論、皇國人一般活動の根本原理にして、そは我國の歴史上終始一貫して表はれて居り、茲に我國體の尊嚴なる眞髓と事實とが永存する。そこで最後に、余は「まこと」と「まごころ」との關係に付、左の如く言ひて、本編の局を結ばうと惟ふ。

「まこと」と
「まごころ」の
關係

「まこと」は一に「まごころ」によりてのみ把握せらるべく、而も「まごころ」や又「まこと」によりてのみ養ひ得可し。

而て茲に人生の修養が無限の精進と力行であり、而もそが不斷に繼續せられねばならぬ所以が嚴存する。

第一編「まこと」の實現

前編に説述せる如く、余の所謂「まこと」は常に宇宙に遍滿し、無始無終、その進展を持續して居る。斯くて或る言ひ表はし方よりせば「まこと」は動なり」と稱しても良いが、そは勿論動靜を兼備すること云ふ迄もない。斯くてその限り「まこと」は隨時隨所に發現し、宇宙内の凡ては一として其範圍を脱逸するものがない。別言せば、即ち宇宙と其萬我萬物とは盡く「まこと」の發現せるものなりと稱することが出来る。而て此「發現」や、是れ余の所謂「まこと」の武的方面に外ならぬ。

以下、本編主として、本書の見地に基き、「まこと」の武的方面に就き考究しよう。

第一章 國 是

國是とは讀で字の如く、國家の認めて是なりとする根本的方針主義であり、換言せば、國家がその國家たる任務を達成せんとするに際し、採る可く準據す可き方向であ

り進路である。而てその限り、そはその國の國民各自が真心から認めて以て是なりとする進路であらねばならず、其の歴史に本く必然的なる本然の大道でなければならぬ。去れば一國に於て眞の國是なるもの存在せりとせば、そは其の顯はるる所に於て種々の進展と變易とを生ず可きも、その大主義及び大方針即ち國是の眞精神、心髓に至つては、妄りに變更す可きものにあらず、その限りそは實に永遠のものであらねばならぬ。而もその國家の建設が合理的でなく、又合理的に進展せざる限り、其國是が一定の確固不變なるものに到達すること極めて困難にして、之が爲には本來悠久なる年月と種々難多の經路と不撓不屈の鍛鍊と修養とを必須とすること想察に難からぬ。之を家に就きて見るも、其の成立の由緒古くして善を積み美を重ね、眞を體得せるものに在ては、社會と調和せる其家の方針が自ら定まり牢乎抜く可らざるものある爲め自ら世の尊信を受ると雖、彼の成り上り者の多くが社會より擯斥せらるる如きは、畢竟、物質的の擴大により俄に成功を收め得たる彼等が、動もすれば心驕りて其の修養に不足勝なる爲め、其家に何等確乎たる規矩準繩なく、時に或は私慾に掩はれ目先の功利に是れ走

るの風あるに因るものである。國家亦之に同じく、其の成立の根源と爾後に於ける歴史の發展とに伴ひ一種の品位と性格と方針とを具備す可きものなることを俟たず、而て是即ち國是そのものに外ならぬ。

惟ふに、我國は開闢以來宇宙の根本精神に本きて成立し、否な宇宙の根本精神たる神の垂統によりて建設せられ、爾後今日に至る迄該方針は變革せらるることなく、終始一貫連綿たる進展を續けて居る。是即ち我國の何物にも換へ難き宇内に冠絶する點であり、そは實に尊嚴にして本然なる國家の方針を完備せるものと云ふことが出来る。是抑も萬國に卓越する我國の國是ではないか。

謹で惟みるに、我 皇室の御仁慈と大御力の悠久にして洪大無邊であり、宇内に匹儔するものなきは、又贅言を要せず。そは全く宇宙精神の權化にして、祖神 天照皇大神の御魂が永へに繼承せられ、彌榮に彌廣に、彌増に發展しつつあるのであり、日月の如く炳として明かである。去れば我國家も我國民も常に此の尊嚴なる大方針を嚴守し、之を修め、之を啓き、之を展べ、以て宇宙と世界との進展に參與し、其の天與

の福祉を益々増進せねばならぬことを俟たぬが。是れ抑も我國に固有する悠久にして崇嚴なる 天皇道にして、そは實に開闢以來無窮の進展を経て益々純化せられ美化せられ、宇宙と併存し、天壤と共に永へに無窮なる可きこと、言ふ迄もない。是即ち我國の國是にして、這は固より君民を一體とする無二の理想的信條たるのである。今左にその梗概を要約して摘録しよう。

理想的帝王道
たる我 天皇

「斯道や、云ふ迄もなく、「我國に嚴存する、洪大無疆なる我建國當初よりの大主義」にして、天皇様は申し上ぐる迄もなく、皇族様は固より、上は大臣大將より下は一農夫、一商賈、一職工に至る迄、男も女も、何人も、總てが、歸依し、尊信し、之と一致し、其實現に力めつつある、否な、力めねばならぬ大主義である。尙別言せば、「上下一致して（明治聖帝は「上下一致して王事に勤勞せよ」と宣らせ給ふたが、此王事とは勿論 天皇の私事ではない、治國の大業である）此國を良くしよう、萬民をして其所を得しめよう、正義を天下に樹立しよう、而て御互に皆良く手伸しく生きよう、現時の辭では天地（宇宙）の「まこと」を基として良く斯の國を治め、

眞の共存共榮以て世界に對し、自他相伴ひて、世界の平和と世界文化の進展とに貢獻しよう、而て此大義を世界に敷かう」てふ大主義にして、大學に所謂「親民、止於至善」の道（親は新にあらず、「したしくす」にして和を意味す）の如き、社會學的に所謂社會聯帶 *Solidarity* の如き、勿論其中に全く包含せられて居る。そは畏くも建國以來、否々 神武建國前幾々萬年の昔より書紀に所謂積慶し、重暉し、養正し來り、神武聖帝の建國に依り一層具體的に確立せられ、爾後歷代天皇の實踐し給へる御道であり、全大和民族の追進せし道であり、日本人の永久に亘り是非とも依據せねばならぬ大道である。而もそは、其窮極の根源を「天つ日嗣彌榮の神勅」と、御歷代天皇の御聖業とに發する點で、余の所謂「天皇道」と稱す可きものではあるが、這は同時に眞の日本人道であり、而て之に即して世界人としての道にも叶ふものである。換言せば、是實に永き過去に於る我國民各自衷心の要求であり、歴史の進展であり、而て又現時に於る我等の理想的大道たるのである。」

而て戰爭若し吾人に許さる可く、又爲さざる可らざる場合ありとせば、そは言ふ迄

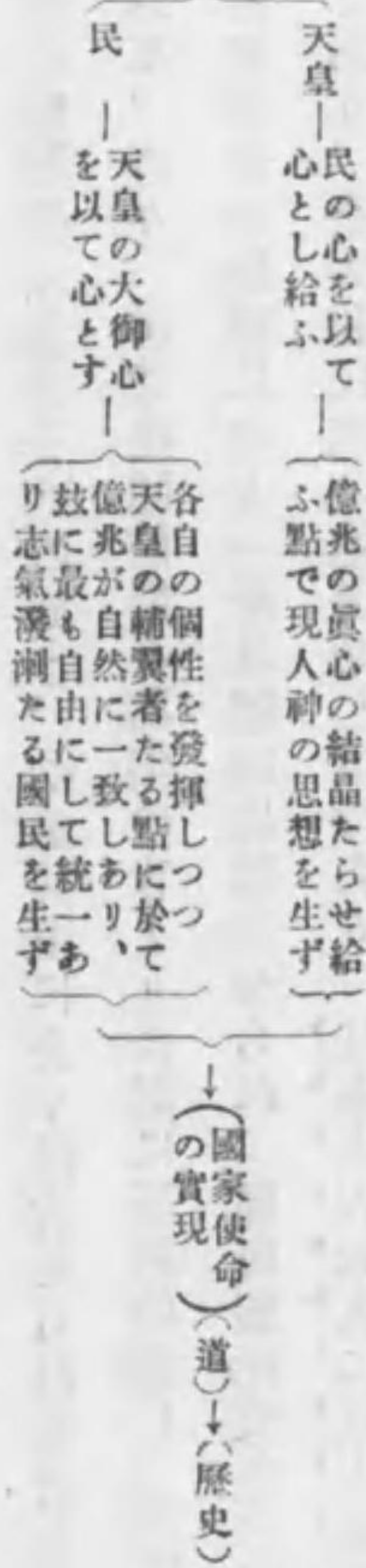
天皇道即ち是れ日本人道たり而て之に即して世界人とも叶ふの道にも

もなく、如上の大道に基くものでなければならぬこと、論を俟たぬ。

斯くて斯道は悠遠の昔より我國に於て不斷の進展を遂げ、本邦獨特の國體を形成し、永へに我國家上下批判的精神の源泉となれるものにして、是即ち國是そのものに外ならぬ。斯くて本邦國體の特色は左圖の如く、國家、天皇及び國民が一體となり、人類理想の實現に邁進しつゝある點に存するものなるが、這是理想的國家の典型なりとも云ふべきである。

我國家の體様

我國家



歴史即國體

右圖に示せる如き國家そのものが是即ち我國體であり。開闢以來に於るその進行は、我國君民の經驗せる所即ち歴史である。故に此點で歴史即國體なりとも云へる。而て此精神を近代的に推擴せば、立派なる國際的精神となり、先づ自國を整へて

天下を善くする眞の國際協調、世界美化の精神とならざるを得ぬ。斯くて此道を尊信し、敬重し、之を克く了得して、それを如實に實現せんか、所謂世界主義も民族主義も、國家主義も、個人主義も、家族主義も、社會主義も自らその中に包容せられ、淨化せられ、些の扞格なく、宇宙の進運に伴ひ、天地と共に、無窮の發展を遂ぐ可きことを俟たぬ。是即ち我國家と國民と而て又我 天皇の「まこと」そのものに外ならず、而てそは又實に、明治十五年我陸海軍人に賜りたる勅諭の根本精神として、畏くも明治聖帝が特に訓諭し賜ひたる「まごゝろ」の源泉に別ならぬ。

而も近代人や、時に或は此の内なる至寶を忘れ、之に代ふるに外なる瓦礫を以てせんとするものなきに非ず。豈に恐れて懼る可き極みではないか。是余が本記念日を迎ふるに當り、先づ本章を編初に置き、一面御互修養の指箴たらしめ、他面敢て全國民の深刻なる猛省を促さんと欲する所以である。

第二章 國是の實現と武道

抑も人生の目的が良き生の充實實現にして其の窮極の理想が善の顯現であり、眞の體得であり美の實現に存せねばならぬこと論を待たず、斯くて吾人人類各個も、何れの國家も、皆其各自の特殊使命に基き歴史の過程を履みつつ、此理想に向ひ邁進せざる可らざる譯にして、そこに國是の存立すること前章所述の通りであるが、斯くて又そこに、其が實現の手段とし、過程として、武道てふ重要な人生の一方面が存在する。

「武」の本體

「武」の本體たる、本來、矛盾反對を歡迎し之を人格の光に同化し行く勇猛心である。元來世の中は矛盾反對を少しも離ること能はず、彼の希臘哲學界の驍將「ヘラクレス」Herakleiosも「生成に於る最も普通の形式は反對と調和との對立である。即ち一切の事物は其中に反對の性質を融合して居り、そこから争を生ずるが故に、(戰は萬物の父、諸法の王)」と言はれて居る。然るに此反對物は同一の火より生ずるものにして、結局調和するを以て(世界は戰にして又和、飢にして又飽なりと言はれて居る)と唱道して居るが、這是東洋に於る易の思想とも同一なるものである。去れば如何に

「ヘラクレス」の學說

武力の用途

氣に入らぬ事にも之を歡迎し、自己組織の内部に活き且つ輝きある生命と光とに同化し行く強き働を有するに非ずんば、組織も組織たり得ざることとなるべく。茲に武力本來の任務を有するが故に、此武力を用ふる場合は、理想の實現、國是の貫徹、統治進展の爲のみでなければならぬ。若し苟も武斷が如上の三者と離れ、只管其武力のみ拘泥するときは、矛盾反對を同化するにあらず、却つて之を排斥し、一切を破壊せざれば満足せざることとなり了る可く。之に反して、如上三者の精神よりせば、常に和平にして愉快なる心を持つるを以て、矛盾反對を有するも、却て愉快の材料たるに到るものである。大聖に取りては否な人世の哲理よりせば世に眞の惡なく、一切は至善の材料たらざるなし、否なたらしめずには置かないのである。競争や遊戯にしても、對手が自分より弱くては面白からず、總て自己に矛盾反對するものを喜ぶの傾もあるも、之に反し自己の精神の飢へある時は、總て之等を排斥する氣分になるものにして、人格の光に同化するなどは思ひもよらず、一切を唯々破壊せねば氣が濟まざることになり、猛き心は即ち暴心に化し了るべし、慎まざるべからず。之を字源に考ふ

「武」字の意義

るも、「武」字は本來「止弋」を意味し、此點より云ふも、それが、元來、平和を目的とし活人を主眼と爲して居ることが克く分かる。

斯くて再言せんか、「武」の本質たる、世上一切の矛盾乖離を歓迎し攝取して之を人格の靈光（是れ即ち余の所謂「まこと」と「まごころ」とに外ならぬ）に同化し行く勇猛心にして、一切の不仁不義なるものに對する折伏を目的とし、武道とは之を實現する所以の過程である。而て「戰」とは本來相對抗する二者各自の正當なるを信ずる場合に於て、而も其が相容れざる際、之が解決を相互の力量に訴ふる所作に外ならぬ。そこで戰は武道を實現する一方法にして、それを構成する一要素にはなるが、武道其ものとは別物なること勿論にして、それは武道の鮮明に顯はるる一方面に外ならぬ。故に武道は人生社會に惡の存する所、不條理不道德の存する所に於て、必ず常に其發現を見る可きものにして、決して好戰的な血や暴力に渴するものではない。その戰にあらはるゝのは已むを得ざるに出づるものなるが、それは決して戰の爲の戰であつてはならず、唯武道貫徹の爲としてのみ其活動が許さるゝ丈でなくてはならぬ。去れば戰はず

武道とは

「神武不殺」の道

して其目的を達せんこと、是れ武道の極意にして、兵法でも孫子は「百戰百勝、非善之善者也、不戰而屈人之兵、善之善者也」と云ふて居る。況んや武道の本意としては、戰てふ手段に訴ふるに及ばずして、事を解決するを理想とする。斯くて、武道は一面から觀ると、活人愛生を目的とするものにして、時ありてか、其が殺人を敢てし、誅戮に果なるものあるは、より大なる至活と至愛とを欲するに因るを以てある。是即ち我國に尊嚴なる「神武不殺之道」にして、余の所謂「まこと」の實現に外ならぬ。斯くて斯道は成る可く戰を未發に豫防しようとする。個人にしても國家にしても武道の心得を體得しあらんか、他をして自個を敬愛するの心を生ぜしめ、我に對して禮讓の道を致さしめ、夫をして我を輕侮し侵犯せんと欲する惡心發生の餘地なからしめ、時に非違の心を生ずることあるも彼をして自省せしめ自發的に正道に復せしむることが出来る。這是武道の理想にして、そこに健實なる平和が確保せらるること言を俟たぬ。然れども、若し頑迷暴戾度し難き兇者か驕慢無禮匡し難き惡徒の跋扈するものありて、如何にするも我が誠意を解せず、毫も其非を省みる所無ければ、武道は決して其

固有の力を發揮するに吝かなるものに非ず、どこ迄も勇戦奮闘して兇惡者を折伏し、
 そをして正道に覺醒せしめねば已まぬ。但し此場合と雖、其發顯は徒らに殺戮を好む
 ものならず、「其罪を憎みて其人を憎まず」で、對手にして翻然悔悟せば快くそを宥恕
 する。勝に乘じ相手を苦めて快とし、事後相手の弱みに附け込みて不當の要求を爲し、
 或は戦敗に苦み兵禍に惱める敵國の生靈を塗炭の苦境に陥るるが如きは、其の忍び能
 はざる所にして、是れ抑も「武道」が本來天地のまことに基く「良き生」の充實進展を
 以て其目的とする「まごゝろ」の發顯に外ならざるを以てである。そこに「武道」そ
 のもの、絶大なる眞價値があり、無上の尊嚴性が永存すること、言ふ迄もない。

之を要するに、武道の本質たる、人生理想の實現を以て其生命とし、争亂を未發に
 防止し、以て人生の圓滿なる進行と平和の確保とに任じ、已むを得ずして戦ふこと
 あるも、そは爾後に於ける健實なる平和の招來を期するにある。結局、理想の實現と
 武道とは常に密接不離の關係にあるものにして、理想の達成には實際上いつでも武斷
 と武力とを豫想せざるを得ず、一刀兩斷亂麻を斷つ眞劍なる心持にて爲さざれば理

理想の實現と
 武道

想の實現は決して出来ぬこととなるが、然し、そはどこ迄も人世の眞理想を達成する
 爲めの過程であり、方法たるのでなければならず、武の爲の武であつてはならぬこと
 論を待たざる所である。而て茲に文武二道の密接にして不離なる關係があり、そこに
 本邦獨特の洪大にして崇嚴なる武徳が胎胎せらるゝが、是れ抑も亦余の所謂「まこと」と
 「まごゝろ」との顯現に別ならぬ。

第三章 文武二道の關係

歐洲大戰は蓋し地球上に於る武道の大なる發現である。然るに此大戰によつて、世
 界の人類は直接に間接に其禍を被らぬものではなく、ある統計に依れば、之が爲に死せ
 るもの約九百萬人、負傷せるもの約三千萬人、直接の戦費約五千億圓、間接の戦費約
 六千七百萬圓である。戦禍を蒙れる歐洲の中央部に於ては其慘狀見るに忍びざるもの
 があるので、「平和」は時代の要望となり、如何にして永久の平和を確立す可きかてふ
 ことは、志士仁人の思を凝らす所となり。斯くて平和主義の宣傳は時代の思潮を作り、

一種の平和論

武を尊び兵を談ずることは忌み憚るべきことなる如く考ふる者も生ずるに到つた。就中、一種の平和論者は「今日迄の人類の祖先は愚昧にして、個人同士、次に團體同士更に進んで國家てふ大規模の團體が、相互に獸類の噛み合ふのと同じ状態にて、戦争といふ罪惡に充ちた喧嘩を敢て爲し來つた」と稱へて、戦争を罵倒して居る者がある。結局、國難に殉じて戦死し、忠勇義烈の士として歴史上に尊崇せられて居る者は、皆無意義な戦争てふものに奉仕せる愚人等の筆頭なりとの考を起さしむる如き議論も宣傳されぬでもない、我國が古來武國なりとさるることは、時代の平和思想の要求に添はざるものにして、是、世界をして我國を嫌惡せしむる原因なりと稱するものもある。甚きは元寇や日清日露の戦役に關する記事さへ、國民教育の教科書から除去せざる可らずと論ずる者があり、國民古來の風尚に迄も立ち入つて五月端午の節句の如きも其尙武的の意義を去らねばならぬ、桃太郎の童話の如きも廢止す可きものなりなど、論ずる者もあつた。此頃は餘程良くなつたが、先頃迄は稍もすると、學校の兵式教練に情氣を生じ、劍道柔道の修行を勉勵するのは蠻風の保存を計るのと同様なりと評する者

現代の青年氣
質

があつて、修業者自ら少からず煩悶を感ずる者も無きに非ず。而て此風は高等の學校になる程多い様に思はる。若し余の言を信ぜざる者あらば、公等請ふ、試に行て二三の高等學府を訪ひ、親しく學徒の志向を観察せよ、蓋し思半ばに過ぐる者あらん。軍備が減縮せられて、現職を離るゝ軍人が多かつたので、有爲の青年が心から軍人たることを志望する者が少なく、其志望する者は、偶々經濟界の不況を見て、不得止功利的に之に赴くと云ふ状況もある。斯くて我國が古來國民の道として尙武を主義とせることは、果して時代錯誤であらうか、將又世界の進運に添はざるものなるべきか。

(最近滿蒙事變の爲め青年の思潮に一大轉換を招來せるは喜ぶべき事である)

言論浮動し、人情の轉變多き世の習ひとは云ひながら、古來「武國」として其自重心を高め、之を以て大なる光榮となし來れる國民中、斯くも輕浮な排武的の言動を爲すものが現はるゝことを思ふと、親しく日清、日露の二大戦役に遭遇し、具さに舉國一致の艱苦を嘗め來りたる我等は顧みて轉た無量の感慨に堪へぬ。嗚呼斯くの如くして我國を如何にせんとするか。我國の安危興亡の機は實に此間に存する。而も是獨り

我國のみの問題でなく、世界人類の公道上由々しき大問題である。是余が更に前章に次ぎ本章を設けて文武二道の關係に就き言はんと欲する所以であり、而もそれは實に「文」そのもの、發展上にも黙す可らざる緊吃事たるを以てある。

文武二道の本質を研究せんとするに當り、先づ注意す可きは、それが便宜上抽象せられた概念であり、而て其意義が現代の職業的區分に當嵌められて通俗的に解釋さるゝ傾向を有することである。斯くて現時に於る我國人の「文武」に對する見解は著しく職業的の對立に捉はれて居る。維新前に於る我國人の「道」に就きての思想は、それを傳統的に爲政者、士人の道なりとなせしものにして、從て文武二道も亦、此種の意義に解せられて居る傾があるし、加之ならず、目下本邦の官吏は之を大別して文武官と爲さるゝが故に、通俗的には此區別に即して文武二道を考察する因襲的傾向も亦稀ならず。斯くして我國人の文武二道に對する概念は頗る明瞭を缺いて居る。去れば此兩道の研究に際しては、須らく其本來の意義に付反省するの必要がある。

文武二道の解

余は文武二道を左の如く解したい。「文道」とは、人生最高の理想たる仁愛を實現する過

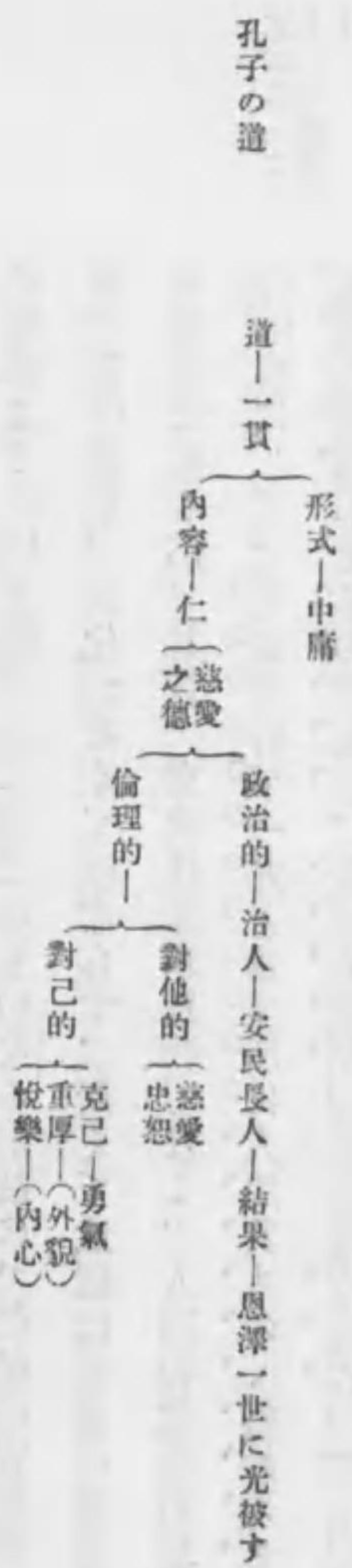
文武は「まこと」の兩面たり

程を意味し。武道とは之に對し矛盾反對するものを迎へ、それを自己の有する最高の理想に攝取し同化する過程を意味す。畢竟、前章に於て説述せる如く、世上の一切はあらゆる意味よりせば矛盾反對に満てるものなるが故に、仁愛の實現や統一の成立に際しては、先づ攝取、同化がなくてはならず、斯くて武道は文道の實現に是非共伴はねばならぬのであるが、其實、文武は元來別物でなく、人間の生命の眞靈力たる「まこと」の兩面にして、文武を打て一丸と爲す所に人間其もの、靈妙なる働たる價值創造即ち實現の過程が出るのであり、是即ち文化現象に外ならぬ、若し然らずして文のみ偏現せばそれは文明に導かんも、決して文化を招來せず、而も文明が應て行詰りを生ずべきは、識者を待て知らざる所であり、現代の實況が之を立證して餘りある。そこで、人間精神能力の作用を知、情、意の三となし、其各々に配する徳を智、仁、勇とする區分法に従へば、文道は情意の發現を主とし、武道は知と意との發現を主とす。而て文道は専ら仁てふ徳の發露なりと爲す可きも、而も其一面に於て意及勇の徳が之と同時に活躍しあること、看取するに難からず、是即ち所謂武道の發現に外ならぬ。以下尙例

人間精神能力と文武二道

を藉りて説明しよう。

儒教に於る孔子の道は「一以貫之」で、「一貫の道」と云はれて居る。此一貫の道に付ては中々六づかしく、色々議論もあるが、要するに其内容は「仁」(但し此「仁」は其意味廣大にして、仁義等と稱する場合の仁の如き對立的のものならず、萬道を包括せるものなりと解すべきである)であり、其形式は「中庸」なりとすることが出来る。今其主張の系統を圖示すれば左の如し。



此所謂一貫の道たる是廣義の文道に外ならずと雖、其實現に關する過程に就き考察せんか、其何れに在ても非常なる勇氣の力を伴ふを要するものにして、そこに武道の

孔子の所謂「仁」には勇氣を伴ふ

發現を見ること察知に難からぬ。即ち其政治的主義の大綱として禮を尊重せるが如き、其目的とする所、事の宜しきを制するに在りて、武道てふ方面の重視に外ならざるものと見得可く、倫理的方面に於る對己の修己の道として、慈愛と忠恕とを實現せんが爲にも、先づ私利私情に關する妄念を斷滅し、小我を克服して、大我を發現せしむるを要す可く、對己的修己の道としての克己は、是即ち勇氣其もの、實現に外ならず、重厚悅樂亦勇猛精進の結果、利害を超越せる自己満足の状態に別ならざるが故に、そは何れも武道の發露に伴ふて發現するものなりと云ひ得べく。更に別言せば、「文道中武道あり」と爲すことが出来る。孔子は論語憲問篇に於て「仁者必有勇」と云ふて居る。是れ仁者に必ず道義的の勇具はるを謂へるものなるが、別言せば、這は仁中必ず勇あり、道義的の勇なくんば仁も亦實現せられざるべきを道破せるものに外ならぬ。中庸に曰く、「天下之達道五、所_レ以_レ行_レ之者三。曰君臣也、父子也、夫婦也、昆弟也、朋友之交也。五者天下之達道也。智、仁、勇三者、天下之達德也。所_レ以_レ行_レ之者一也」と。朱子之を註して曰く、「達道は天下古今共に由る所の路にして、書に所謂五典、孟

五達道
三達德

子の所謂「父子有_レ親、君臣有_レ義、夫婦有_レ別、長幼有_レ序、朋友有_レ信」が是である。
(而て之を實現する能力として三徳を列擧して居る) 知は此を知る所以なり、仁は此に體する所以なり、勇は此を強
 ひる所以なり。之を達徳と謂ふものは、天下古今同く得る所の理なればなり。一とは
 則ち誠のみ。達道は人の共に由る所なりと雖、然も是の三徳無くんば、則ち以て之を
 行ふこと無し。達徳は人の同く得る所なりと雖、然も一の誠ならざること有れば、則
 ち人欲之を問て、而て徳其徳に非ず」と。以て文武兩者が本來別物ならざるを察知す
 ることが出来る。畢竟道も徳も本來渾然たる統體を源泉とするものにして、假りに便
 宜上を分析的に列擧せば、五達道三達徳を數へ得可きも、這是元來如上の統體が發
 現する種々相に別ならず。之を我皇國に就きて云はんか、そこには、我日本人の踏む
 可き大道と、之を實現する所以の能力として、一大靈徳が存在するものにして、是れ即
 ち前章に概述せる、我尊嚴なる所謂 天皇道と「まごころ」(清明心)とに外ならぬ。
 かの慈悲忍辱を最大の主張とする佛教は如何、法華經及勝鬘經には治世の三大綱領
 として正法、攝受、折伏の三道を説きあるが、そは天地の公道、慈悲及び正義にして、

正法、攝受、
折伏

此正義の實現は是れ武道そのもの、發現に待つ可きものに別ならぬ。

「カント」の斷
言的命令

又かの「コペルニクス」的轉回を精神界に惹起し、現代人に黎明の曙光を光被せし
 媒介者たる名譽を荷ひし西哲「カント」Kantは如何。彼先づ合法性と道德性(「*die
 Tugend u. Moralität*」)とを嚴密に區別することより始め、道德の道德たる所以は純乎たる
 自律性 *Autonomie* ならざるべからず。行爲が自律性 *Heteronomie* たらんが爲には、
 行爲を起す動機即ち命令は、一切の經驗的要素を捨て、斷言的命令(無條件的命令)
Kategorischer Imperativ ならざるべからず。此命令より出でたるものにあらずれば、
 其結果は假し善なりとも、畢竟合法的たり、或は偶然のものたるのみ。未だ以て道德
 的のものたらしむるを得ず。と唱へて居るが、是「カント」の嚴肅主義 (*Rigorism*)
 と呼ばるゝ所のものなり。然らば無條件的命法とは如何なる形式のものなりや。曰く
 「汝の意志の格率が、何れ如何なる場合にても、一般的立法の原理たるが如くに行爲
 せよ。」 *Handle So, dass die Maxime deines Willens jederzeit zugleich, als Princip einer
 allgemeiner Gesetzgebung gelten könne* と。而て斯かる法則を法則として行爲する所の

人たる、既に普通現象界のものならずして、自由の主體である。それは即ち人格者なり、大悟徹底せる覺者なり。而も斯くの如きは、常に勇猛精進して己むことなき、菩薩道の實現者にして、其行者に異ならず。斯くてそれは實に降魔の利劍を振り、諸々の邪惡を克服する不動明王の働に別ならぬのであつて、そこに、文道を実現する働の一方面が、同時に、武道實現てふ働の方面に外ならざるを觀ることが出来るのである。

以下更に、右と反對なる武道の實現てふ方面より、之を考察しよう。則ち例へば、暫らく勇氣の實現に就き研究の歩を進めよう。此勇氣の事に就きては、曾て心友文學博士吉田靜致氏が某所で講演せられた事があるが、其所述頗る肯綮に中り恰も余の言はんと欲する所を説かれて居る。依て以下此所説に藉り、所要の事項を概述する事にする。

勇氣の正體

元來勇氣とは困難、苦痛又は恐怖に打勝ち、爲す可き事を爲すために通常人の爲し得ざることを敢て爲すてふ事なるが、さて其勇氣とは如何なることかと云ふことになると、鳥渡答解に苦しますことになる。譬へば或る相撲の横綱が普通人の持ち得ざる

重量物を扛擧せる如き事實に對し、一見、人或は之を以て勇氣ありとなすべきも、這は眞の勇氣に非ず。何となれば、普通人より見て困難苦痛なりと思考せらる可き事にて、其實行者が其實施に際し何等の苦痛と困難とを自覺せざらんか、それは眞の勇氣なりと稱し難きを以てある。彼の盲者蛇に怖ざるが如き、決して眞の勇者ならざること勿論である。去れば勇氣の發現に當りては、先づ其困難、苦痛、又は恐怖に對する自覺あることを前提とせねばならず、而て此自覺は是即ち知の働に外ならぬこと、言を待たぬ。而も此自覺丈にて充分なりやと云ふに、さうでない。例へば汽車の進行し來るに際し、線路に跳び込むが如き、假し實に其恐怖を自覺しながら跳び込みとするも、之のみにて眞の勇氣とは爲し難い。それは暴勇か小勇ならずんば、痴愚の爲す所に外ならぬ。そこで眞の勇氣には尙一つの條件を必要とすることになるが、それは「爲す可き事を爲す」てふ事にして、即ち「爲す可き事を爲す」爲めに、困難、苦痛又は恐怖に打ち勝ちて敢行するのが眞の勇氣である。例へば列車の顛覆を防止せんが爲め、一身を犠牲としそを停止せしむる爲め線路内に跳び込み、停車合圖を行ふが如き、是

暴勇と小勇

である。斯くて眞の勇氣の成立には次の二條件を必要とする。

一、困難、苦痛又は恐怖てふことの自覺。

勇氣成立の要件

二、「爲す可き事を爲す」爲め、敢行すること。

而て此二條件を見ると、そこに本分本務に對する尊崇、畏敬の念が活躍せるを知り得るが、是即ち之等の念慮が何ものにも壓倒されざる場合に於て、始めて眞の勇氣の實現を見得可きを示すものにして、武道實現に際する文道活躍の一例となすことが出来る。

孔子は論語季氏篇に於て「君子有三畏。畏天命、畏大人、畏聖人之言。小人不知天命而不畏也。狎大人、侮聖人之言。」と述べて居るが、此「畏」は眞に怖る可きものの自覺であり、「カント」自ら其無條件的命法を嘆美し、「之を考ふること久しうして、贊嘆と敬畏とに満つるもの、我上にありては星ある空、我内に存りては道德法」と稱せるが如き、亦此自覺に外ならぬ。而て斯かる徹底的自覺により誘導され、推進され、其眞つ唯中より湧出する純粹行そのものが是即ち眞の勇氣の發現に外ならぬ。

「誠の大勇」

畏くも 明治聖帝は、明治十五年陸海軍人に下賜せられたる勅諭の五箇條中、武勇に關する條項に於て、「……去れば軍人たらんものは常に克く義理を辨へ克く膽力を練り思慮を殫して事を謀るべし小敵たりとも侮らず大敵たりとも懼れず己れが武職を盡さむこそ誠の大勇にはあれ……」と宣らせ給ひ。尙最後に其實行法に就き、「……さて之を行はんには一の誠心こそ大切なれ抑も此五箇條は我軍人の精神にして一の誠心は亦五箇條の精神なり……」と御諭しになり給ふたが、是亦全く如上の趣旨に外ならざるものと拜察される。

又西哲「アリストテレス」Aristoteles は、左の如き種類の勇氣を以て、眞の勇氣と認めざりしが、是亦上述と其歸を一にするものである。

「アリストテレス」の排斥せる勇氣

- 一、希望の勇氣（報酬や稱讃を博さんが爲に爲されしもの）
- 二、恐怖の勇氣（他人の嘲笑を避くる爲又は責罰を遁れんが爲に爲されしもの）
- 三、經驗の勇氣（平素熟練を積めるものが、爾他のものより、比較的有利の地位に立ちて冒すが如き類にして、熟練の勇氣とも云ふ）

- 四、忿怒の勇氣（反省熟慮を缺き、動物的に現はるるもの）
 五、好機嫌の勇氣（多血質の勇氣又は樂天主義の勇氣とも云ひ、自己に對し好都合に出來あるものを妄信し、元氣克く活動する類を云ふ）
 六、無識の勇氣（困難危険を知らずして進みつゝある場合を云ふ）
 七、無感覺の勇氣（精神遲鈍にして、生命の價値又は死の苦痛を感ぜずに爲す類を云ふ）
 八、絶望の勇氣（「生命もいらぬしてふ絶望的體度に立つものにして、似而非なる勇氣の一なり）

先きに述べた尊崇畏敬の念は人格に認めらるる特性なるが、人格には尙他に二つの特性を有す、それは羞恥の念及び同情の念なるが、之等人格の特性に發する勇氣が眞の勇氣である。而て之等の特性が充分に發達し、純化し、鍛練さるるに於ては、之に基く勇氣が眞に百折不撓であり、絶大の力を包藏す可きは疑ふの餘地なき所である。孟子の所謂「自反而縮、雖千萬人吾往矣」の態度が即ちそれである。斯くて正しき武道の

發現する爲め、常に正しき武道の伴はざる可からざるを知ることが出来る。否な正しき武道中には、必ず正しき武道が包含せらるるものと云ふべきである。

貝原益軒は其「武訓」の序に、「文といひ、武といふ、分ちて是をいへば其の用大に同じからず。故に車の兩輪鳥の兩翼にたとへて、其一を闕くことあたはざることをいへるも、おなじからざるあとにつきて、文武の二を對しいへるのみ。合せて是れをいへば文武只一徳にして、文の中に武あり、武の中に文あること、猶陰陽のたがひに根ざすがごとし。故に文なき武はまことの武にあらじ。……」と述べて居るが、亦如上と全く其歸を一にするものである。

斯くして、余は如上の結論として、左の數項を列舉したい。

- 文武二道の本義
 一、文武は人間に特有なる「まごころ」の發現する兩方面にして。所謂大和魂の發露亦之に外ならぬ。
 二、文とは仁愛そのもの、本體であり。武とは文即ち仁愛の伸展力であり、抵抗力である。

三、文武は元來渾一的の統體にして、夫れ自身伸展力を有し、抵抗力を有し、持久力を有す。

六二

我國には古來「武國」の思想が強く、古へより武勇が最も尙ばれ、此武勇な國民性を鍛鍊し發展せしむることは、我國民最上道の一とせられた。而も此自覺は明治維新と共に一新せられ、國民皆兵制度の採用により軍備の充實が期せられ、從來武士を主體とせし武徳の涵養が國民全般に普及した。是抑も蕞爾たる東洋の一島帝國が現時の世界的地位を獲得せる最大なる原因の一である。東洋各國の民族が何れも白人種の侵略を受け若くは其驅使に甘ずるに當り、我日東皇國のみが其獨立を全ふし、東洋民族の爲に氣を吐けるは、世界列國の驚畏する所にして、其の茲に到れる根源は種々なるべきも、其の「まごころ」に基く「武國」たることが、最も重要なるもの一である。更に別言せんか、我國の所謂「武國」てふ思想の中には左の事項を包含するものと言ひ得やう。

一、人間は「まこと」を砥礪し、之を保持し常に之を實現す可きこと。

「武國」の要諦

二、知行合一を旨とすること、即ち萬事は實行的ならざる可からざること。
三、文武併行して偏重なかるべし、殊に陥り易き文弱の弊風に染まざること。
四、治に居て亂を忘れず、常時之に應ずるの覺悟と能力とを有すること。
斯くて、我等は何處迄も國民的自負偏見に陥つてはならず、其任持は何處迄も眞實且つ清明でなければならぬ。上述せる「武國」の思想には、其解釋の如何によりては、修正を必要とする部分なきに非ざる可きも、而も斯の思想は我國民が自覺し來れる長所なるが故に、吾人は飽迄、之を純化し美化し、發展せしめ、之をして世界人類の文化に貢献あらしむる如く仕向けねばならぬ。否なそは實に我全大和民族に課せられたる世界的使命たるのである。斯くて茲に武徳養成の必要が生ずるのである。

第四章 武 德

吾人は前諸章に於て、國是、其の實現及び文武二道の存在と其關係交渉に就き、其

六三

一斑を説述した。以下更に武道實現の源泉たる「武徳」に付、研究しよう。

之が爲め先づ最初、「徳」に付考究しよう。徳は説文に依れば古字惠にして「惠得也」とし、其意義を「外得_二於人_一内得_二於心_一」として居るが、是れ外人心を感動せしめ、

内己れに獲得するの意にして、此中「内得於心」の方面を重視すること論を待たぬ。朱子は之を定義して「行_レ道而有_レ得_二於心_一也」となせるが、是蓋し其道を行ひて熟するときは、自然の妙境に達し、心之に安んずるに到り、初めて之を心に得るに到るものなりとなすのである。而て此「得」は固より心外なる別物を心に得るに非ず、天附與の理性が充分に其力を得、妨害なく完全に發現するものに外ならざるべく。平たく云へば、修養により何等の骨折なく道を行ひ得可き心性の體得を云へるものなりとすることが出来る。

西洋に於ても希臘古代の「アリストテレス」は、實踐的の徳を以て、善良なる行爲の習慣なりとした。

又獨國哲學者「フイヒテ」Fichte は「カント」を祖述し、當時具體的に行の哲學を

説ける第一人者なるが、彼道德の本質を説て曰く、「非我を克服し、自我固有の本質を發揮する活動が、結局吾人の道德性を得る本旨なり」とした。是即ち無限の努力を以て道德的生命とするものにして、斯かる活動と努力との源泉が「徳」に外ならぬ。彼の大學に所謂「苟日新、日日新、又日新」の古語亦以上の趣旨に異ならず、此點東西符節を合せるを見る。要するに彼の説たる、理想への向上心を體得することを以て、徳なりとするものにして、別言せば我が身に持てる大使命（「まごゝろ」の命ずる所）を何處までも追進せんとする氣分を、常に保持することであり。尙他の一面より云へば純粹無雜なる心の状態を常に保有することなりとも解し得るし。更に換言せば人生窮極の要求理想を實現するのが道にして、此道を実行し得る能力が徳なりとも云ひ得るわけである。以下武徳に付説述しよう。

武道を實現せんと欲せば、そこに力を必要とすること言を待たぬが、而もその力や正義と仁愛とに燃ゆるものでなければならず。斯くて此の力が動けば、常に世の爲め人の爲めに惡を除去し道を護持する折伏擁護の力とならなければならぬ。義によりて

動く武、正義によりて動く武、道に従つて動く剣にあらざれば、力は反つて人生の災因となることをつくづく我等に思はしめる。財も力である、然れども、不正な財は國家を毒し、社會を毒し、一身一家を毒す、金が仇の^{かた}諺眞に吾人を欺かぬ。軍も兵器も劔も大なる力を包蔵し、一たび動けば天下の風雲を捲き起すに難くない。然し是等の力は、悉く正道に根據し、未だ動かざる時と雖、將に動かんとする邪力に對する警戒となり以て道を護り、一度發動すれば、破邪顯正以て道を護ることを其意義とし、使命とせなければならず、茲に武徳の絶大なる任務が存在すること言を俟たぬ。斯くて吾人は「徳としての武」を最も尊重する。吾人は「健實なる平和」をどこ迄も愛好するが、而も其れ丈け、「武徳」の切要を高調する。健實なる眞の平和は、人類最高の道德たる仁愛と正義とが如實に繁榮しつつあるものにして、世間には是程善美にして樂しきものはない。但しそは平和の健實なる正しきものに就きて云ふのである。近來單に平和と稱するものは、必ずしも善と正とを包含せぬ。單に戦争がないと云ふ丈けの平和なら、却て其間に、武器を用ゆる戦争以上、平時に於る經濟的利益や勢力の争奪戦が行はれ、

時としては、其害毒之に優ることもある。故に眞の平和は何處迄も此世が仁愛と正義とに彌々榮ゆるものでなければならず、そこに「武徳」の切要をつくづくと吾人に痛感せしむるものがある。以下「武徳」の本質に就き考究しよう。

人類の特性は色々あるが、就中人格の人格たる所以の本質は、それが「まこと」の包蔵者であり、「まこと」の伸展者たり、而て「まこと」の絶へざる實現者たる點に存する。而も「まこと」や、靈妙にして不可思議の力を有し、不斷の活動を續けて居る。之を大にせば宇宙をも包含し、之を小にせば粟粒の微、否な原子の至小に迄分割せらる。口之を説く能はず、手之を擬するに由なし、例證するに物なく、比喻其時を逸すること、前編に説述せる通りである。紀平博士は曾て之を中心Xと呼ばれたが、這は實に如上の爲に外ならぬ。Xそは何ぞ。是即ちXたり、何かな知らねど、不可解にして尊嚴なる自己中心の存在である（知らざるに非ず、言ひ難きなり、畢竟各自の體得に待つべきものなるを意味す）。そは「ソクラテス」の^{Deities}の奉仕せる Daimonion であり、又我等が永遠に頼りとする、否ないやでも頼らねばならぬ、我等小宇宙内の神であり

佛であり、而て又實に宇宙に於る神佛の分身でもあるのである。是即ち「ヘーゲル」 Hegel 哲學に所謂自己意識の純化せるものにして、純一無雜なる「我」の統體に外ならぬ。そは常に眞であり、善であり、美であり、而て仁愛に満ち、常に其實現を念とする。而もそは固より單なる知にあらず、智仁勇の統體であり、知情意を兼ねる渾一體である。内仁愛の徳に満ち、そをして斷へ間なく活躍せしめ實現せしむる所以の力を充實する。換言すれば、そは、仁愛を仁愛とし正義を正義として發現せしむる所以のもの一切を包含するものなりと云ふことが出来る。而て以上に所謂仁愛と正義とをして活躍實現せしむる所以の力、更に別言せば仁愛正義そのものに具存する活躍力實現力は即ち「まこと」そのもの（中心X）の前進力であり、内外よりする障害や壓迫やに對する其抵抗力であり、不撓不屈の彈力である。斯くて此力は一切の虚偽、不正、非理、悖徳を排除せんとして努力し、不斷の争闘を覺悟し、準備し、要すれば遲滯なく、其實行に任ずるが、而も其窮極に於ては、必ずそれを活かす働となるのであつて、這は抑も我國に固有なる直昆の靈の發現力に外ならぬ。是即ち「武徳」そのもの、正體

武徳とは

に別ならず、そこに我國の眞の「武國」たる所以が嚴存する。如上は主として説を個人に取りたるも之を國家に擴張せば、そこに國體あり、國是あり、國家の歴史があり、其使命が存在し、斯くて亦そこに「國家の武徳」なかるべからざるは多言を要せざる所である。

人生は廣大である。吾人の耳目を樂ましめ、人生に幾多の富源と資材とを提供する山河も、時に吾人の爲め絶大の障礙ともなり、抵抗ともなる。然れども之を大局より達觀せば、障礙や、抵抗や、そは必ずしも人生の禍ならず。之等は吾人の試金石ともなり、見方によれば抵抗力の根源とも稱し得可きものにして、能く之を統制し駕馭せば禍を轉じて福たらしむることも出来る。斯くて我等も國家も須らく之に處するの道を過たざらんことを心懸く可きである。障礙や抵抗の存する場合には、之を解決する道が二つある。一は之と協調し、之を利用し之に順應することにして、他は之を敵視し、之を排除し、そを滅却することである。斯くて常に其障礙に抗争するのみが成功の道にあらず、其障礙に順應しつつあらゆる堪忍と幾多の曲折とを経て、其所期に邁進

せねばならぬことがある。然し、這は固より挫折にあらず、屈服にあらず、其障礙や困難を突破し之に抵抗する力を有しつつ、境遇と時とに順應して善處することとなるが、其際に突破や抵抗の力がなくては、私の態度や使命を損することなく善處することが出来ぬ。又時としては、順應する餘裕の存せざることがある。先方より積極的に我活動を妨害し來り之を避け難き場合や、他日我を侵害すること明白にしてどうしても之を不問に附すべからざること極めて明瞭なる如き場合に在ては、躊躇なく之を除却し禍根を絶滅せねばならぬこともある。何れにしても、「まこと」の伸展力、活躍力、實現力、抵抗力は常に必須のものである。否な之なくんば、それは死物であり、人間の「まごころ」ではない。

元來から云へば、伸展力、活躍力、實現力、抵抗力は、其れ自らとしては、必ずしも常に善なるものとは云へぬ。單に伸展し、活躍し、實現し、抵抗する爲のみのものなれば、それは善も悪用もされる。それが道德そのものの活動力たる時に於て、始めて武徳と稱し得可きである。斯くて武徳は實に「まこと」そのものに内在する力（物理

武徳は「まこと」に内在する力なり

的の語を藉れば energy) に外ならざるを知ることが出来る。世に所謂武力は必ずしも善と正なることを意味せぬ。然れども茲に所謂武徳は必ず善正そのもの、活躍力でなければならぬ。故に武徳とは勿論競争力や戦闘能力の謂に非ず、戦争は單に武徳の發現する一状態に過ぎぬ。世上單なる戦闘能力としての武力を尙ぶものもあるも、それは單に經濟能力としてのみ金錢を重んじ、そこに金色夜叉もあれば、慾の熊鷹もあるのと同様に、金錢の悪用と等しく武力の暴用もある。斯くの如きは畢竟天下の指彈を招き、正義の制裁を及くることを免れぬ。之に反し、武徳にして充實せば決して斯かる醜き事態を發生せぬ、是れ此場合武徳は先づ自己心中の邪惡に對する抗争力となりどこ迄もそれを克服せざれば已まざるべきを以てである。

然れども古來「克己」は頗る難しとせられ、三軍を叱咤する勇者も往々自己衷心の私慾により左右せらるゝが故に、武徳の戦端は一早く先づ之等に向ひて開始せられねばならぬ。然れどもそれは固より強ひて闘争を好むものならず、其の他に對して争ふは人類社會の邪惡に對し萬已むを得ざるに出来るものである。世には金錢の爲に金錢を得

んとする集金道樂家や守錢奴もあり、單に鬭争本能の満足を求むる爲の鬭争もあるが、それは武徳を瀆すものにして、眞に武徳あるもの、決して爲さぬ所である。斯くて武徳は飽く迄も常に善の活躍力、惡に對するその排除力、抵抗力として活動するものでなければならぬ。

世界人類が仁愛正義の徳に榮えると云ふことが、高遠な理想である丈、之を實現するには障礙や抵抗も伴ふし、時としては無理非道の亂暴者が存在することを覺悟せねばならぬ。それは實に外敵のみならず、**靱強なる内敵**の存在を豫想する。如何に我より親切を盡して懇諭するも、却て反抗を増す如き頑迷な兇者に對しては、一撃により先づ對者の覺醒を促さねばならず、人間の掌には平手と拳固の二様あるを知らなければならぬ。國家に兵備なく警察力なくんば、一日と雖も其堵に安んじ能はざる可きは、識者を俟て知らざる所である。仁愛正義の徳なるものは決して空漠裡に平和を夢みて居ることでもなく、單に涙脆ろい感情や安價なる同情を意味するのでもなく、半面に之を實現する強大なる力を有せざるべからざること、言ふ迄もない。這是前述せる「ま

人間の掌には
平手と拳固の
二様がある

戰場の勇者

ことに具備する勇まじき活躍力にして、武徳が之に外ならぬ。平素無暗みに強よがつたり、暴げれたりするものは、實戰に案外弱く、稍ともすると掩蔽物の蔭にひつゝたがるが(しかも此弱者も、凱旋して論功行賞の時に至ると、皆一廉の勇者になる)、平常柔和で口數も寡き正直物は存外戰場の勇者である。是れ體力は假し弱くても、**止むに止まれぬ「まこと」**の後と押しが、戰場に純化されし國家愛の權化たる彼をして、彈雨を冒さしめ、劍戟を振はしむるからである。眞の仁愛や正義の存する所武徳の存せぬことは決してない。

易に「**神武不殺**」の辭句があるが、それは武徳の理想に外ならず。是れそが時ありてか殺に果なる場合なきに非るも、這是畢竟活人を目的とし愛生を本旨とするを以てである。斯くて何人も何れの國家も世界も武徳の緊吃と其尊嚴とを認めざる譯には行かぬ。國家が斯かる武徳を具ふる時、眞の「武國」であつて、各國家が殘らず、「武國」ならんか、世界はいやでも平和ならざるを得ぬ。單なる文國は世に確立し得るものならず、それは却て時としては陰險なる愚策や暴慢なる言辭を弄し、國家間の不和と争鬭とを誘發する患がある。各國家が正しき「武國」たることは、先づ一面自國を整へ、

他而他國をして、非禮を加へ或は侮蔑を生ずるの餘地なからしめ、聽て仁愛の道に於て互に相敬し相親ましむる所以である。そは我武士道の理想にして、眞武士の間には禮儀ある眞の親みが永く保たれる。斯くて余は斯徳を以て、世界の眞の平和の最大なる保證劑として、普く世界の國際場裡に推奨せんと欲するものである。

第五章 我國の所謂「文武」の思想に對する 歴史的考察

第一款 緒 説

我國は武國であるが同時に仁國である。そは神代より現はれある思想なるが爾後に於る歴史の進展に伴ひて、交々も相發達助長し、漸次其内容を豊富ならしめ、遂に我國獨特の武士道を形成するに至つた。實に一旦分化せる文武二道は武士道の完成するに隨ひ、武士の本分てふ數語中に融合歸一せられ、士道の典型として、櫻花と共に、本邦生粹の逸品となれるものである。之を泰西諸國に就き、探求するに、能く我國の文

武士道の特徴

武二道と武士道とに匹儔するものあるを見ぬ。去れば文武二道を研究するものは、須らく先づ古來本邦に於ける、そが進展の概要を考察するを以て尤も必要とする。以下、之に就き若干の考究を遂げようと思ふ。是れ之により余の唱導する「まこと」そのもの、意義を一層明徴ならしめ得可しと思考するを以てである。(紙數の關係上單にその二三を擧ぐるに止める)

第二款 熊澤蕃山の思想 (集義和書抄録、集義外書抄録)

蕃山天資聰明雄傑、卓識深慮ありて經世濟民の術に長じ。實に我國に卓絶せる政治家なりと謂ふことが出来る。彼藤樹に學び、亦王學を奉ず。其說母國主義を以て知られ。教育を重視し、殊に武士の教育を重じた。

問 武士たるものは、事あれかし高名して立身せむと思ふを以て常と覺え候、又事なきこそよけれ兵亂をねがふは無用の事と申候へば、武士の心にあらずなどいひてあざけり候、いづれが是にて候べき。

答 いづれも非にて候、文盲にして道學のわきまへもなき武士は、せめて武道一偏の心がけを第一として、只今にも事あらば油斷せず高名せんとおもひ、疊の上にて病死

熊澤蕃山の思想

七六
するは無念なる事におもふも可也、しかれども浮氣にてさやうに思ふはひがごととなり
我高名せんと思へば人も又同じ心あり、死生二に一なり、それまでもなく弓矢鐵砲の
憂へあれば、死は十にして生は一也、高名立身を望みて事あれかしのねがふは思慮す
くなき事に候、十死一生をしらで理運に高名すべき様に思ひなば、なりがたき勢ひを
見てはおくれを取事もあるべきか、其上天下の人妻子等のなげきくるしみをおもへば、
たとひかならず命を全して高名をきはひとも、一人の小知行のために萬人をくるしめ、
人のなげきをあつめて名聞利用とせん事心にこゝろよからむか、仁人は國天下を得と
ても好ざる事なり、兵書に云、凡兵は過ちなきの城をせめず、罪なきの人を殺さず、
人を殺して其國郡をとり貨財を利するは盜なりといへり、惡人ありて亂もいでよがし
高名せんと思は不忠なり、其上富貴貧賤盛衰相かはれり、如此のわきまへありて、兵
亂をいとふはよき心得なり、其わきまへもなく武道、武藝もきらひにて、やはらかに
くらす便利のために、無事を好めるは、しなこそかはれうは氣に何事ぞとねかふ人に
同前たるべく候、よき武士といふはあくまで勇ありて、武道武藝のこゝろがけふかく、

何事ありてもつまづくことなき様にたしなみ、さて主君を大切に思ひ奉り、自分の妻
子より初て天下の老若を不便におもふ、仁愛の心より世の中の無事を好み、其上に不
慮の事出来る時は身を忘れ家をわすれて大なるはたらきをなし、軍功を立る人あらば
一文不通の無學といふとも文武二道の士なるべし。世間に文藝をしり、武藝をしりた
る者を文武二道といふは至極にあらず、これは文武の二藝といふべし。藝ばかりにて
智仁勇の徳なくば二道とは申がたかるべく候。

舊友問 日本は武國なり、しかるに仁國と云は何ぞや。

答 仁國なるが故に武なり、仁者は必ず勇あるの理明かならずや、北狄は勇國也、然
れ共不仁にして禽獸に近し、勇者は必しも仁あらずの至言まことならずや、夫れ化は
人也、心の徳なり、慈愛惻隱は人の情なり、無欲無爲は人の本也、天は其心萬物にあま
ねきが故に無心なり、仁は萬物をもつて一體とする故に無欲なり、動に公をもつてす
故に無爲なり、仁者の樂は山也とは仁者の心をかたどるに山のごとし、無欲なるが故に
靜也、知者の樂は水なりとは知者の心をかたどるに水のごとし、源ふかきものは流遠

し、深きとは神化のあつきを云、知者は無事なる所を行ふ、流水の物たる内明にして外順なり、大知は愚なるがごとし、泥土のためにしばし濁るも行ては終にすめり、誠のおほべからざるなり。知者はまどはず、勇者はをそれず、仁者はうれへず、知は明の至なり、勇は義の徳なり、仁は生の精なり、此故に仁者はいのちながし。

心友問 仁者不憂知者不惑勇者不懼とある時は三人の様に聞へ侍り、君子の道三とあれば三ながら有て君子と云義か、仁者、知者、勇者いづれも君子との義か。

答 君子の不憂は仁也、不惑は知也、不懼は勇也、此三ある時はともにあり、君子の道廣大也といへども心の徳に本づく時は此三にすぎずと云義也、己を成は仁也、物を成は知也、性の徳也、外内を合するの道也、故に三本一也、一人の人あり、子よりいへば父也、臣よりいへば君也、婦よりいへば夫と名付るが如し、仁知勇同じく性の徳なれども、君子の天地幽明順逆死生禍福を以て一にして己にあらざると云ことなければ、憂るところなきにつきては仁者と名付、君子の陰陽人鬼富貴貧賤夷狄患難一として自得せずと云ことなく、心にとどこほりなき事流水のごとく、無事を行て明かなる

所につきては知者と名付、君子の浩然の氣天地にふさがり、剛強盛大にして萬物の上にのびやかに物欲にたわまされず、威武に屈せられず、惡鬼妖物猛獸もふるることあたはざる所につきては勇者と名付たるなり、常人の憂る所を不憂によりて、君子を知こともあるべし、凡夫のまどふところ、まどはざるによりて、君子を知ことも有べし、世人のをそる、所をおそれざるによりて君子を知ことも有べし、時により三人となして見とも害あらじ、又仁にして知勇をかねず、知にして仁勇をかねず、勇にして仁知をかねざる者あり、是は氣質に得たるものなり、氣質に得たる仁者は好で人を愛し、或は其身溫柔寛裕なるばかり也、不憂といふには及ぶべからず、不憂は知わきまへ勇たはまざるところあればなり、氣質に得たる知者は俗にいへる分別者也、然れ共萬物一體の仁なければ物を成の功なし、人間世の名利得失の分別のみかしこくて、幽明死生の理を知らず、この故におそる、所も有り不惑とはいひがたし、氣質に得たる勇者はなれしりたる所にはおそれざる也、山に行て虎狼をさげざるは獵者の勇也、海に入て蛇龍を恐れざるは海士の勇也、戰陣にをいて弓矢をいとほざるは武士の勇也、大森

彦七ほどの武勇者にても妖物に逢ては氣をとり失ふことあり、其上海に入ては海士に及ばず、山に入ては獵者に不_レ及、大勇の名を得たる武士といへども不_レ懼とはいひがたし、物によりて恐れ物によりておそれざるは、知てらさず仁一體ならずして物と二になる故也、道學に得たる者はさあらず、勇者は仁知をかねておそるゝ所なく、知者は仁勇をかねててらさざる所なく、仁者は知勇をかねて憂るところなし、故に君子の道三との給へり、一もかけては君子とはいひがたし。

斯くて彼は其師藤樹と同じく、文武二道の根源が一體たるを高調して居る。彼れ三種の神器を以て最も尊ぶべきものとし。之を以て唯一の神書なりとし。之に智仁勇を配すること、猶師藤樹の如くせり、其説集義外書、三輪物語、大學或問等に見ゆるも、就中集義外書水土の解の條に見ゆるものは、最も高潮せる趣あるを見得、左に其要點を掲げて彼の説の局を結ばうと思ふ。

三種の神器、則神代の經典なり、上古には、書なく文字なし。器を作りて象とす、玉を以て仁の象とし、鏡を以て知の象とし、劔を以て勇の象としたまへり、云々、上

三種の神器に
對する蕃山の
解義

古には名なくして德行はる、あつきの至なり、云々、聖人之を知人勇の三徳といふ、日本の神人は、これを三種の神器にかたどれり、神は心なり、器は象なり、神璽寶劔内侍所の象を作て、心の三徳を知らしむる經書とし給へり、云々、至易至簡にして、道徳學術の淵源なり。

第三款 山鹿素行の思想（山鹿語類）

山鹿素行の思想

素行は武士道の權化と稱せらるゝもの。而も單なる武人に非ず、明瞭なる自覺と深遠なる學識とを有す。大義名分、忠道及士道等に關する立説豊富なり、彼當時の官學たる朱學に反抗して古學を唱道し、獨り自ら孔聖の道統を繼がんとし。又夙に兵學を研鑽し、悉く其秘奥を究め、山鹿流の一派を樹立した。性沈毅、事變に遭ふて狼狽せず、冷靜以て事後の計を處す。其風濤中に投ぜらるゝも撓まず、烈火の中に燒かるゝも泰然たる態度は、天晴日本武士の神髓を發揮せし者と謂へる。彼四十有歲にして常住不滅の眞理に悟入し、益々武士道の發展に力を盡せり。我邦武士道體系の創唱者と稱するも過褒にあらず。素行は實に文武兩道を兼備せり。而て其の文や實際的たり、

其武や道義的たり。又神道の蘊奥を究め、歌道を學び、諸子百家の學に精通せざるなく、隨て著述も甚だ多い。左に其文武に關する思想の概略を摘述しよう。

其士道に關する著述は、立本、明心術、練徳全才、自省、詳威儀、慎日用の六篇及附録に分ち。士たるもの、心懸くべき極致と、之に達す可き道とを詳論し、微に入り細を極めて居る。前三篇は主として前者にして、今日の辭では基礎的理論であり、後三篇は後者にして修養に關する所謂方法論に外ならぬ。

彼先づ「士道」中「立本」の劈頭に於て「知己職分」てふ一項を敍して居るが。是即ち「自己を知れ」Know thyselfなる一事が、能く人間百行の基礎たり得るを力説せるものにして、孔子の所謂「本立而道生」(論語學而篇)の趣旨を懇説せるものであり、今日の西洋倫理學や哲學の所説とも符合する、茲に彼の説の強みがあり、人間の眞味に觸れた點がある。西哲「デカルト」Descartes「カント」Kantの輩を拉し來るも、蓋し此點に於て彼の右に出づる能はざるべし、曰く。

師嘗曰。凡天地の間、二氣の妙合を以、人物の生々を遂ぐ。人は萬物の靈にして萬

物人に至て盡く。こゝに生々無息の人或は耕して食をいとみ、或はたくみて器物を作り、或は互に交易利潤せしめて、天下の用をたらしむ。是農工商不_レ得_レ已して相起れり。而て士は不_レ耕してくらひ、不_レ造して用ひ、不_レ賣買して利する、その故何事ぞや。我今日此身を顧るに、父祖代々弓馬の家に生れ、朝廷奉公の身たり。彼の不_レ耕不_レ造不_レ賣買して士たり。士として其職分なくんば不_レ可_レ有。職分あらずして食用足しめんことは、遊民と可_レ云。一向心を付て我身に付て詳に省りみ考ふべし。……若しつとめずして一生を全く可_レ終は、大の賊民といふべし。しかれば何ぞ職業なからんと自省みて、士の職分を究明いたさんには、士の職業初めてあらはるべき也。此思入の立ざる内は、或は人の云にまかせ、或は書冊にしるせるまでを以てして、實に腹心に體認せざるを以て、志の立處甚薄し。思の立處甚薄きときは以前より因循して所_レ久染の惡習内にかくるゝを以て、輕薄にして道志何を以てか長ぜんや。是士の立本の第一とすべし。……

是實に名門、上流者、金持にして、大君と國家の御蔭により立派の教育を受け乍ら。

地位に慣れ名に誇り、遊惰に日を送る「のらくら」者や墮落者流に對する頂門の一針であり。而て純眞なる「我」の捕捉であり、「カント」の所謂 Postulate であり、我國の「まこと」に達する門戸に外ならぬ。次で曰く。

……農工商は其職業に暇あらざるを以て、常住相從て其道を不_レ得_レ盡。士は農工商の業をさし置き、此道を專として、三民の間苟くも人倫をみだらん輩をば速に罰して、以て天下に人倫の正しきを待つ。是士に文武之徳知不_レ備ばあるべからず。されば形には劔戟弓馬の用だらしめ、内には君臣朋友父子兄弟夫婦の道をつとめて、文道心にたり武備外に調て、三民自らはを師とし是を貴んで、其教にしたがひ其本末をしるにたれり。こゝにをいて士の道たつて、衣食居をつくのひ、以て心易かるべく、主君の恩、父母の恵、しばらく報ずるにたりぬべし。……

と謂つて居るが、此文武を體得することが、彼の「武士」に對する理想であり、爲政者の心懸く可き道であつたのである。之に次で「志_レ於_レ道」てふ一項を説て居る。曰く。

人既に我職分を究明するに及んでは、其職分をつとむるに道なくんばあるべからざれば、こゝに於て道といふものに志出来るべき事也。たとへば京へ行べきと思ふに及んでは、其道をしらざれば不_レ可能行、不_レ知してしひて行ば皆邪路に可_レ入也。士の身を修め、君につかへ、父に孝行し、兄弟夫婦朋友に相交て、其快く相和することくに致さんことを知は、其道を尋て其用をしるに在べき也。而て道あらんやと志出来は、我より先だつて志あつて能く行ひ得たらん人を求め、是に案内を頼んで、その引導に任せつべし。……如_レ此外を尋ね學ぶといへども、外に聖人の師なくんば、自ら立飯て内に省るべし。内に省ると云は、聖人の道聊しいて致す處なく、唯天徳の自然にまかせて至る教のみなれば、我に志を立處あらんには、事は習知て至るべく、其本意は推して自得するに在るべき也。況んや古の聖人人を導びくのために格言を垂れ玉へり。我是を以てつつしみ勤めんには聖人の大道こゝにをいて可_レ得也。……

と謂ひ。武士の覺醒發奮を促して居る。次で修養に關する實行法を述べて、「在_レ勤_二行

其所「志」となし。則ち謂て曰く。

曾子曰。士不可不以不弘毅。任重而道遠。仁以爲己任。不亦重乎。死而後已不亦遠乎。といへり。士は其器尤廣く、能く忍ぶ所あらずしては、重きにたへ遠をいたすこと不可叶也。職分を知り其道に志すと云とも、つとめて其志す處を行ふにあらずしては、言計にして其實あらざるなり。行ふとも、一生是をつとめて死して而後に已むにあらざれば、中道にして廢す。道のとぐべき所なし。故に勤行を以て士の勇とする也。孔子曰。君子欲訥於言而敏於行といへり。言ふことは是安く、行ふことは是難しと云へり。職分を知て志を立、道に志有て其道の次第をきくことを得ると云とも、勤め行ふ所を專とす。而して勤行ふ事大方の志にては遠ること難し。今少の不人事を致し、ならへるわざすら是を改んとするには、甚力を不レ入しでは安じがたし。殊に利害の間、色欲の妄動、名根の所萌、因循すること久しきを以て、更に間斷する所なく其意妄りに先ず。こゝに於て我に大力量あらずしては必ず引おとされて、其誠を盡す事不可叶。我に大力量を出さしむるは、志の淺深

によることなり。志淺くしては、勤むる所深かる不可也。志は自省みて人の人たらざる所をたしかに辱る處深からざれば、此志不レ出也。故に中庸に、子曰、好學近乎知、力行近乎仁、知耻近乎勇と出せり。孟子曰富貴不能淫、貧賤不能移、威武不能屈、此之謂大丈夫と云へり。富貴は人の大に所好にして、貧賤は人の大に所惡、威武は人の大に所恐にして、此間に聊か心を付る處なきに不有ば、大丈夫とは云可らず。大丈夫と云は、是士の道に志して、其志す所をたしかに行ひつとめたるもの事也。其厚く正しき所如此つとめずしては、士の本の立と云べからざる也。

以上は彼の思想の片鱗に過ぎぬが、此所信を觀ると。毫も武斷的な無理押し附けの所がなく、極めて實行的で且つ實行上に遺漏なきの特點を窺ふことが出来る。是抑も彼に特有なる武道的鍛鍊上體得せる所にあらざるなきか。而てそは有限と無限との間の緊張を以て人格の特質となす西洋の倫理説とも全く同一である。死して而後已むの七字深く味ふ可きであり。是亦文武の統一から胚胎せる思想に外ならぬ。

尙彼は特に修養に對し、自己反省の工夫を述べ、「誠」の實現を以て士道の全般を統一せんとした。そこに文武一如の思想があり、彼の腦裡に於る文武の密接なる交渉を見る事が出来る。

其著書の重要なものを擧ぐれば、「聖教要録」、「武教小學」、「武教全書」、「山鹿語類」、「武家紀」、「中朝事實」、「原源發揮」、「謫居童問」、「配所殘筆」等がある。就中「配所殘筆」は其自叙傳であり、述懐であり、修養録であり、而て其體得せる「自我」の叙述でもある。言々句々皆慷慨の發露であり、熱誠の迸りならざるはない。百世の下、讀者をして覺へず感奮興起せしむるもの、眞に故なしとせぬ。以下彼の修養上に於ける覺悟並に體得せる境地に付、其一節を摘載する。

……然者武門之學問者。自分計修行致ても。此品々にあたりてしるしなく功立不_レ申候ては。聖學之筋に而無_レ之候。此故に右之品に付て工夫思案も有_レ之。舊記古實をも考る事有。然ば外に工夫黙識靜坐等致候事。其暇不_レ可有_レ之也。左候とて極り無品々之業を習知仕候は。盡すと云にはあらず。前に云如く。聖學の定規いかたを

素行の修養上に於る覺悟と其體得せる境地

能知。規矩準繩に入時。見事能通し聞事明に成て。いかやうの業來れりと云共。其品々勤やう明白に知るゝが故に。事物に逢て届する事無_レ之候。是大丈夫の意地たり。誠に心廣く體ゆるやか成共云べきなり。

此學相積時は。智慧日に新にして。德、自、高、し。仁、自、厚、勇、自、立、て。終、は、功、も、な、く。名、も、な、く。無、爲、無、妙、之、地、に、可、至。されば功名より入て功名もなく。只人たるの道を盡すのみ也。孝經云。立身行道。揚名於後世者。孝之終也。

余は讀で、此「終は功もなく名なく。無爲無妙之地に可_レ至。されば功名より入りて功名もなく。只人たるの道を盡すのみ也。」の數句に及び。而て彼がそれを孝の終局に即せしめたるを觀、感慨無量なるものあり、その悟入の頗る徹底的にして用意周到なるに對し、敬虔の念禁じ能はざるものありき。念ふに、是、即ち我國に固有なる清明心の自律的發展であり、儒教に所謂「誠之者」(中庸)であり、佛教に所謂大乘菩薩道の實現であり。そこに自利他圓滿具足の世界が出現するのである。其極致や即ち、神髓の天皇道であり、それを體したる臣民道であり、社會道でもある。而て尙又

それは實に、朝見式勅語に所謂「創造」の斷へざる實現であり、Creationの連續的發展であり、所謂「産靈」の繼續的顯現に外ならぬ。

第四款 吉田松蔭の思想（士規七則、武教講録）

松蔭は我明治維新直接の原動力であり、其事蹟亦世に周知せらる。依て左に其面目を窺ふため、一二の事項を挿記しよう。

松蔭、短軀瘠骨、枯皮瘠肉、白痘滿顔、風丰揚らず。嘗て宮部鼎藏と相伴ひ、東北巡遊をなす。屢々茶店の老婆の爲めに賈客と誤らる。宮部戯れて曰く、君何ぞ商骨に富む一に此に到るやと。松蔭脆然として手を刀柄に擬して曰く、何ぞ我を侮辱するやと。松蔭十四五歳の時或人其父に謂て曰く。異なる哉此子、昔し韓使豊太閤を相して曰く、骨貌は末なり、獨り其眼光炯々近づきがたきを覺ふと、此子至誠物に接し、片言自ら欺かず、是れ豊公も及ばざる所なり、然るに此子豊公に及ばざる所も亦此に在らんかと。然り彼れ細目深瞳、眼睛炯々、一見自ら一種の正氣ありて人を壓せりと云ふ。一日山田宇兵衛關東より歸り、松蔭に告げて曰く。世變近きにあり、詩書鉛槧、悠々

吉田松蔭の思想

年歳を廢するは子の爲めに取らず、曷ぞ巨眼を開きて宇内の大勢を見ざるやと。松蔭輒ち大に感奮する所ありき。蓋し斯の數語は實に彼をして義勇公に殉ずるの大決心を起さしむるの導火線たりしならん。

彼の思想は陽明學に傾きたるところあるを以て、人或は彼を陽明學派とす。然れども彼自ら「吾非專修陽明學、但其學眞、往々與吾眞會耳」と云ひ。一方に於ては「余家學を襲し、幼より山鹿先師の書を読み、今日に至る、云々」と明言せり。實に彼の學は一部に踴躍するものならず。國體を議し、忠道を論じ、我國に於て現實的に生きたる問題を取扱へるものである。而て其思想の特色は士規七則（一、忠孝爲本、二、國體觀、三、義勇、四、質實、五、讀書尙友、六、慎交遊、七、死而後已）に於て、最も明瞭にあらはれて居る。曰く。

一、凡生爲人、宜知人所_三以異_二於禽獸、蓋人有_二五倫、而君臣父子爲_二最大、故人之所_二以爲_レ人、忠孝爲_レ本、

一、凡生_二皇國、宜_レ知_レ吾所_三以尊_二於宇内、蓋皇朝萬葉一統、邦國士大夫、世_二襲_レ祿位、

人君養民、以續祖業、臣民忠君、以繼父志、君臣一體、忠孝一致、唯吾國爲然、
一、志道、莫大於義、義因勇行、勇因義長、

と。即ち要するに、萬世一系、君臣一體、忠孝一致の思想であり。是實に素行學の核心にして松蔭學の生命である。彼武教講録に於て述べて曰く。

體認君父之恩情は是忠孝の本なり。思量今日之家業は是武道の本なり。先師、人を教ゆる忠孝武の三道鼎立を以て示せり。然ども忠孝は即武也、武は即ち忠孝也。忠孝を心に存して體とし、武を以て行に發し用とすと云て可なり。武は所謂戈止の武にして文武の統名也、彼偏武の謂に非ず、又腐儒の知る所に非ず。武の眞理は武教全書の首に於て委しく考ふべし。

と。此思想は「武」を以て人世の實行力と爲すものにして、正に私の所説と合致する。而て「腐儒の知る所に非ず」てふ喝破には、率先者たり、實行者たる彼の面目躍如たるものがある。而て茲に吾人は、我維新丕業の原動力として幾多の志士に Inspiration を附與せる彼の眞髓（「まこと」の結晶）を窺知することが出来る。

第五款 結

言

以上は我國に流行せる思想史の片鱗を窺知せしむるに過ぎずと雖、此外の諸説を併せ其全體を通觀すると、左の結論に到達する。そは他ならず文武の統一てふ思想が抑も我國建國以來の理想にして、殊に徳川氏時代に至り其が全く定説たるに到れることである。惟ふに、是れ文武が、元と其根源を人心の奧秘に發し、互に相引き相濟して人生を羅織すてふ歸結に到達せざる能はざるを立證するものであり、而て茲に我國の武士道が獨特の發達を遂げ、世界の偉觀と仰がるゝに到りし起因がある。封建以來の所謂武士は明治維新の現出と共に消失せるも、其精神は深く我國士女の胸奥に残存した。假令、將來、現状は變つても、時代は遷つても、此精神はいつ迄も永く嚴存するであらう。否、嚴存せざる可らず、又嚴存せしめねばならぬものと念ふ。是余が餘白を割き特に本章を挿入せる所以である。

夫れ文武統一の思想たる、我國に在ては開關以來の傳統たり。然もそは世界の現代に於て最も進歩せる最新の思想にして、そは實に歐亞幾千萬生靈の鮮血により淨化せ

られたる結晶に外ならぬ。而て茲に我國是の洪大なる偉力があり、國家の鞏固なる基礎があり而て又そこに我等御互が世界美化の爲め人類善化の爲め是非とも奮起して、先づ皇國の振興に向ひ戮力せねばならぬ所以のものがある。

第六章 戦争論

第一款 序 説

戦争は人間社會の一大事實にして、著大なる歴史の過程である。去れば其研究に關しても、須らく先づ史的考察を必要とするも、這は紙數の關係上本書の能くする所ならず。依て以下、主として其の價值批判に關する事項に就き、要項を説述する。古來戦争の可否に關する議論は、喧嘩を極むるものもあるも、そが平和論と結合すると、其所論の範圍が一層廣汎になり、一見收拾す可からざる觀を呈して居る。而も本問題に對し、納得し得る迄に研究し置くことは、獨り直接の従事者たる軍人のみならず、國家の全部にとり、最も重要にして緊切を極むる事項たらずとせぬ。是戦争は嘗に兇

器を以て危道を行ふ所以なるのみならず、實に民命國運の繫る所以なること、將來に於て益々著明の度を加へつつあるを以てあり。加之ならず、戦争は所謂武道の尤も顯著なる實現なる以上、その是非に關する明晰なる理解と、そがある可き態様（當爲、Sollen, Oughtness）の徹底せる考究とは、本書の目的に對する「まこと」の研究上、尤も緊切の要項にして、而も時勢の進運に察し、是非共忘る可らざる要件たるを以てある。是れ余が、武道と武徳とに付一通り考究せる後引續き、本章に就き考究を遂ぐる所以である。

戦争の社會に及ぼす影響は、頗る複雑にして多様なるが爲め、在來の戦争を論ずるもの、其見地往々一部に偏し、全體を捕捉する能はざるの憾がある。所謂群盲、象を評するの類に非るなきか否か。去れば戦争の本質を觀んと欲するもの。須く先づ身を公平の境地に置き、大所高處に立つて、其全部を達觀し、以て必然的歸結に到達せなければならぬ。之が爲、余は、本問題を左の三點に分ちて考察し度いと惟ふ。

一、戦争の一般的倫理的價值に就いて。

- 二、人類の歴史上に於ける其位置。
 三、戦争の事實及結果に對する價值批判に就いて。
 以下逐次其概要を考察しよう。

第二款 戦争の一般的倫理的價值に就いて

茲に倫理的價值とは、人生社會の要求より考察せる其眞價を意味す。前述せる如く、戦争は人間社會の一大事實であり、武徳と武道との絶大なる發現である。斯く戦争が、其根源を人心の奥所に發し、止むに止まれぬ要求として發現せる社會的事象たる以上、それが規範的考察は、どうしても、社會的見地に基く其倫理的價值批判に求めねばならぬこと、多言を要せざる所である。

戦争は實に社會的事實であり、夫自身、絶対に善でもなく、又悪でもない。其善惡は、一に相對的たらざるを得ぬ。尙一層適切に別言せば、それは善惡を超越するものである。茲に一の譬喩を取らう。之を一般的に云ふときは、健康が善事たり、疾病が惡事たり、又前者が正常であり、後者が變則たるを疑ふものはなからう。然らば健康と疾

戦争は所謂善惡を超越す

疾病と健康

病との定義は如何。實際上尤も正鵠を得たりと思はるゝ健康の定義は、之を組織體の正常なる状態となすことにして、疾病は生理的生活の正常なる状態を逸したるものなりとなし得よう。世人の間に普通行はれある考は「疾病を以て健康の反對なり」となすこととなるが、其實、疾病と健康とは絶対に反對せるものに非ず、生物の個體にありては、其生活機能が正當なるとき則ち健康で、之に反し、其生活機能が變常を致せるとき、之を疾病とするのである。而て該生活機能の變常たる、其れによりて一定の障礙を起し、又それが持續することを條件となすものにして、然らざれば疾病とすることは出来ぬ。然れども此變常は固より個體の生活の範圍内にあるものなれば、疾病が外方より體内に入り來れるものならざるは明かである、それは決して外部よりする種々なる悪影響による無意味の偶然なる出來事や、開放題の成果ではない。總ての識見ある醫學上の定説は、疾病の眞因を以て、組織體夫れ自らの内部に深在する變化に因るものとし、外部的の直接なる原因によるものと見らるゝもの、例へば凍え、疲勞、傳染の如きも、それは皆内部的起因を表露する機會たるに過ぎぬと謂つて居る。去れば吾人が疾病

と呼ぶものは、一定の原因（主なる内因と誘發作用をなす外因）によりて身體の組織に變常を起せるとき、それが治癒する迄、又は死亡する迄の間に起る異常生活機能である。吾人がそれを自覺せるとき「疾病に侵されたり」と稱するも、勿論、疾病と名くる獨立の個體が存在しありて、それに侵されたるに非ず。又之と同じく、普通人々が、よく病氣と混同する變則な現象即ち發熱、發作、咳、疼痛、異常の分泌等の如き、亦實に主なる病的現象として體內に生起せる破壊的な變動の結果に對して、組織體の爲す闘争の單なる表出に外ならぬ。此故に醫術の目的とす可きは、病の外部的現象でなく、主として内部の原因でなければならず、其本分は、内部の原因を知り、組織體自身が自力により其組織の變常を治癒せんとする努力の自然的經過を助長することに存するが、戦争に對する吾人の見方も亦如上に異らぬ。

戦争は例へば人間社會の慢性的病患であり、戦争に依て表はさるゝ國家間の敵意は變則であり、それは社會内部に存在する深奥なる惱みの必然的なる露出である。人間社會の精神的動搖や倫理的煩悶にして其跡を絶たざる以上、恰も身體内部の生理的變化

醫術の目的

に對する闘争現象として病的發熱や嘔吐等の存する如く、それが外部的表出たる戦争も亦人生の必然的事象たらざるを得ぬ。

戦争に對する
非難果して當
れりや

戦争に關する理論上の非難は、從來一般に文明人の間に行はれた。我々も口を開けば自然に平和の祝福戦争の恐怖を説くを常とする。何人も恐らく反對に戦争は祝福であり、平和は恐怖たりと説く者はあるまい、總ての倫理的宗教は、平和を願ひ、戦争から釋放されんことを祈らざるものはない。斯くして戦争に關する本問題は、一應、「戦争は罪惡なり」てふ唯一の答を得るが、然しその眞意義は、決して單に「罪惡災害なり」てふ消極的の定義のみに終らしむべきものならず、之と同時に、「それは正常ならざるも、時在てか、實際必要なり」てふ積極説もあり得よう。異常の現象たる此道は、生物界に於て一般に絶滅せられざるものなるも、去りとして又同時に、之を道德的理想の直接的要求として採用す可からざるものたることを俟たぬ。例へば、之を常識上より論ぜんか、何人も、小兒を樓屋の窓より街路の鋪石上に投出する暴舉を以て、不人情にして且つ不自然なりと爲さざるものなからう。然れども火災に際し他に救出

火災に限し窓
口より幼児を
投擲せば

100

の手段無くんば、此非常の方法も許容さるべきことである。絶體絶命の場合幼児を窓
口より投出する事は、危険に際する此種救助の道德的標準上、獨立せる普遍的原则な
らざるべきも、此場合、道德上の要求が、行爲の動機として、然か爲す可く吾人に命
令する。そは道德の原則に對する罪過ではなく、危険にして反則的ではあるが、此場
合に於る唯一の可能なる方法として、眞の必要から許さるべき必須的事象たり得る場
合があり。而てそは唯、歴史に依てのみ語られて居る。

戦争は實際的
事實なり

戦争や、實に社會的事實であり、國家的事象である。而て太古に頻にして今代に稍
々罕なるの事象であり、過去に小規模にして今代に漸く大規模なるの事實であり、過
去には過去に造詣せる文明文化の程度に應じ、今代には今代造詣の文明と文化との程
度に應じて、漸次變遷しつゝある事象である。其形相は爾餘の事象と同じく、社會的
進化を免れざるも、其社會に本有なる事實たるは、古今を通じて其關係と存立とを改
めぬ。凡そ社會的國家的事象は、其體制や、運営や、社會國家内外相互の關係やが皆
相互に因となり、縁となり、果となり、紛糾錯綜せる渾一的關係に於て成立し。而も

社會的事象の
觀方

その進展は一貫せる論理的關係（普通所謂論理即ち形式論理にあらず）に基いて居る
のであつて、そは宇宙や社會に動きつゝある、余の所謂「機」の屈伸、往來、消長に
負ふものに外ならぬ。乃ち這般諸關係にして變遷せざる限り、戦争てふ事象のみが、
獨り離群超出の變動轉化を成さんことは、全く不可能の事に屬す。戦争の社會的批判
は、そを絶對に否認するを容さざるのみならず、寧ろ人間社會の必要なる過程として、
其存在を是認せねばならぬことに到達する。今代の社會文明と文化とを批判するもの、
往々其根柢を個人的見地に據らしむるものもあるも、そは謬見たるを免れぬ。這は抑も
社會的事象は、社會が社會に由り社會に於て實現する事實なること及び個人的事象と
社會的事象とが其範疇を異にするを遺忘せるに坐するものである。現代に於る戦争非
認論者や、概ね如上の誤謬を冒せる者、其言の空、實にして著しき社會的反響を見ざる、
洵に當然といふべきである。

而も斷つて置くが、余は勿論決して戦争謳歌者ならざることである。戦争の廢絶は
爲し得可くんば、無論萬人の希望であり、誰も之に異論無かる可きも、之を實行せん

101

とせば、宜く速に空逸なる非難に由るを休め、社會内外の紛糾せる渾一的諸關係の變更に着手せなければならぬ。

戦争の倫理的
價値

戦争は之を全局より觀、現代社會文化の造詣に於ては、之を罪惡と斷定するを得ず。但し這は徳なりと云ふに異れり。戦争は、社會的道德上必ずしも非難せらる可き者にあらざるも、而も亦推奨せらる可き者にあらず。之を個人道德の上より見れば、戰鬥行爲は殺人、騙詐等、罪惡を構成す可き行爲を含むが故に、その一々の行爲は、外形上一面害惡と稱するを妨げざるが如きも、克く之を考察すると、其然らざるを知る事が出来る。之を國家社會と個人との關係に觀、國民道德の見地よりせば、單に害惡を以て論じ去るべからざるのみならず、其正當なる發動は所謂義勇奉公の至徳である。戰爭は充足事理より發生する社會的事實であり。それが、善惡即ち道德的規範の檢束を受け、其批判に應じ得るは、特定の戦争が如何に行はるか、特定戦争の決行が充足理由を有するや否やの點に存するものにして、戦争の存在其事には存せざるものなりと爲さねばならぬ。

第三款 戦争の人類歴史上に於る位置

往古に於て戦争は平和の保證たりき

眼を注いで世界歴史を一瞥し、民族心理學その他の所説に聽きて有史以前の社會状態を研究するとき、其一面に於て争闘や戦争てふ事實を有するも、之が爲め同時に他面に於て血族間の團結を促し、之を、より廣汎ならしめ、より鞏固ならしめて居る。而て又之等團體間に争闘や戦争が行はれしものなるも、實際各團體が絶えず他の團體と戦へるのではなく、唯單に團體間に於る戦争の可能性が全然無かりしに非るを意味せるものである。而も此状態は永續せざりき。團體間の交戦が弱者の滅亡に終れるは稀有にして、多くの場合、弱き團體は其亡滅を避くる爲め強者に和合して其配下となるか、若くは其數箇が相依りて同盟を形成した事實がある。斯くて戦争は、それ自身、平和の保證となり、主従關係や盟約を生起するに至れるものと見ることが出来る。此種從屬の結果は是れ國家の濫觴に外ならぬ。

此世に不斷の歴史的記録が始められた時代に於て、人類の大部は既に國家を形成しありき。而て其國家には二種の基本的型態がある。其一は小都市の自治體にして、共

和制を採れる希臘諸邦は此種に屬す。他の一は埃及の如く、諸國を糾合して廣大なる組織を有する專制君主國なるが、之等が何れも戦争により胚胎せるものなるは、上述の通りである。

國家無くんば、あらゆる諸力の複雑なる共力に待たねばならぬ人生教養の進歩は不可能にして。斯かる共力は、結合せられざる種族が如何に多くとも、企及することが出来ぬし、又互に絶えず血を流すことに依りても爲し能はぬ。國家に於て、吾人は、歴史上始めて、人間の群集が和合して活動する状態を見出し得るも、此の如き群集内に於ては、戦が既に消滅し、國家間のより廣き圏内に移されりしものである。原始的の群居團體に於て、あらゆる成人は常に武装せり、然れども國家に在ては、戰士は特殊の階級又は職業となり、尙徴兵制度が布かれし場合に於て、それは單に市民の一時の職業なるに過ぎざるに到つた。戦争に依りて國家が構成せらるることは、今日社會學や民族心理學の定説なるが、斯くの如き國家の構成は、之を一面より見ると、云はば、平和の建設に對する大なる進歩であり、這は征服によりて建設せられし大なる國家

戦争は一面平和の建設に對する進歩の母なり

の歴史により極めて明瞭なる所である。此場合に於て、征服は平和の擴張を意味するが、是却ち在來の戦争が當然廢止され、罪惡とせられ、非難すべき出來事と爲さるゝ範圍の擴大せらるゝことに外ならぬ。將來世界的國家若くは之に近き大國家或は國家聯盟の成立を見ることあらんか、それは多くの國家を一方の下に統制し若くは服従せしむる事に依り、間違ひなく世界に平和を與ふるものであらねばならぬ。征服に依りて生ぜる最も偉大なる國家例へば羅馬帝國の如きは、それ自身平和として説かれて居ること「羅馬の平和」Pax Romana によりて知らるゝ通りである。

這は古代の專制王國に在ても同様である。「アッシリヤ」Assyria 王や波斯王に關し第十九世紀に發見された記録によると、此等征服者の目的が總ての國家を征服し以て地球上に平和を建設することに存した事が分かる。東方の被征服諸民族間に希臘文明を深く根付けし「マケドニヤ」Macedonia 帝國の世界政策は更に複雑せる效果多きものなりき。爾後、世界的永久平和の理想は、唯一なる法律の力に依り世界を支配することを以て其使命と信じたる羅馬人の間に於て一層明確となり完全の域に進んだ。

歴史上に於る四つの世界帝國を比較すると、之等が相交互して、其廣さと内部的の意義とに於て次第に世界平和の理想に近きつゝありしを發見することが出来る。先づ第一に生起せる「アッシリヤ」、「バビロニヤ」Babyloniaの帝國は、其廣さ近き亞細亞を越ゆるを得ず、そは絶えざる劫掠の戰爭に依りて支持せられ、其統治は軍隊の力に據るものなりき。次で第二に現出せる「キロス」Cyrus王や「アケメニデス」Achaemenid王の帝國は、近東亞細亞に加ふるに中央亞細亞及埃及を以てし、其綱紀は道德と正義を確認する「オルムズ」Ormuzdの宗教の光によりて維持せられた。「アレキサンダー」Alexander及其後繼者に依る第三の帝國に於ては、歴史的なる東部地方が歴史的西部地方に加へられ、此兩者は劍の威力のみならず、希臘文明の心的要素に依りても銜接せられた。最後に羅馬帝國になると、其範圍は遠く大西洋に達する迄擴げられ強固なる政治組織と鞏固なる法律的體系とを具備するに到つた。斯くて戰爭は手段となり、武力は平和建設の事業を支持する爲めの必要物となりしものにして、戰爭と平和とは、正しく兩極を表象しては居るが、そは羅馬の「ヤヌス」Janus神の不可分なる表裏二面たることを忘れてはならぬ。

交戰國の各々に於る内部の力を結合し、且つ其後に於る共同と、敵同志の和合を齎らすものは戰爭に如くはない。是希臘の歴史に於て最も明かに見らるゝ所である。彼等の歴史に於て戰爭は三度あつた。第一は「トロイ」Trojan戰役、第二は波斯戰爭にして第三の「歴山」Alexandria大王遠征は、希臘に於る天才の創造を人類の一般的所有たらしめし點に於て、世界文化史上に於る最大の收穫である。

「トロイ」戰役は、亞細亞に希臘の分子を建設した。希臘の詩の生れたのも、彼等の哲學の隆起し發達したのも、如上の亞細亞海岸に於てあつた。波斯との争闘に依りて、結合せる國民の力を鼓舞せる事は、更に希臘人の獨創的天才を發揮した。希臘的教養の熟せる種子を開化せる亞細亞及埃及の古き沃土に蒔ける歴山王の征服は希臘並に東方諸國の宗教及哲學思想を綜合醸成し。爾後羅馬帝國に到り、之等は更に羅馬思想と結合せられ、基督教の傳播上重要な役目を演じて居る。

中世に於て古代羅馬帝國に代れる基督教徒の世界は、以上に比し、著しく廣きもの

にして、其中には實際屢々戦争を生起した。そこには、羅馬帝國に於る如く、暴動や軍隊幹部の背叛が存在せしも、基督教徒は悲むべき確執として出来得る限り紛争を止めんとした。西班牙や「ルヴァン」Levant に於る基督教徒と回教徒との戦争も、亦進歩と試練とであり、回教の進出に對する基督教徒の防禦は、より高き精神發展の可能性を示す機會となり、兩者の闘争は單に流血に止まることなく、漸次に兩者知的視界の擴大を齎らした。斯くして基督教徒の側に於ては、學術技藝の復興や宗教改革の基礎が準備せられしものなるを惟はねばならぬ。

近世に於る戦争の貢獻

近世史に於ても、此問題に關しては、三の重要な點が発見せられる。即ち(一)民族精神の發達、(二)國際關係の發達、(三)全世界文化結合の擴大是である。

此事に就いても、其歴史的過程と其效果の細部を詳述すると、相當長くなるし、加ふるに、事近世に屬し、比較的熟知せらるゝ事項なるを以て、本款に對する考察は之にて擱筆する事とする。

尙以上の考察に當り、本邦の史實に關しては毫も論及せざりしが、其積りにて少し

く研鑽すると、本款に對する研究資料が續々發見せられ、趣味多き事柄なるは疑ふの餘地無き所である。

第四款 結

言

戦争の本質

戦争や、人生の神秘に伴ふ必要の事象であり、それは實に、一定の形式化せる人倫と法律の尺度とに超絶する、而てそが、世に所謂善悪可否の規範により律し得可からざること論を待たぬ。之を前諸款の所述より見ると、從來にありふれた「戦争に對して輕易に善悪可否の辯を爲す者」の謬妄なるを知ることが出来るが、それは同時に、突飛なる戦争謳歌者や所謂軍閥者流の陋固なるを指示するものである。尙之を克く味ふと戦争休止策が若しあり得るとせば、そが將に那邊より着手せらるべきかの問題に就き、一道の光明が認め得らるべきを暗示するものである。

戦争は、人類の異常や違和やに對する治療救済の直接手段である。時ありては靈藥であり、場合によりては、無二の外科手術用利刀であつた。理性が人間に必要な限り、此薬餌や武器を棄つることは禁ぜられた。而もそは、常に活人を目的とし、決し

人世上に於る戦争の價値

薬の用法と分量の適否に注意せよ

て、殺人を企圖す可らず。劇薬や利刀は、非常の時や瀕死の瀬戸際にのみ用ゆべく、否此時にこそ絶大の效驗を呈するも、去りとして無暗みに濫用すべきものでもなく。又適時に使用するも其用法や分量が適當でないと、最良のものも最悪の結果に墮するかも知れぬ。此邊は、主權者や、爲政者、軍事關係者は勿論、一般國民の誰れでもが、克く克く呑み込み、平素の心懸けとせねばならぬこと、余の言を俟たぬ所である、而も良心は、そが強き理想の光明に照らさるゝとき、從來の戦争を以て最早其必要なきに到らしめんとし、是迄永く人類の自然的組織を分離せる幾多の對敵部分に代ふるに、道德的精神的組織を以てせんことを、吾人に命令し希望する。而て斯の如き組織は、其本源を人類の自然に存在せしめ、絶對善に對して心から遵據し、世界史の意義と過程とを通じて、其完全なる實現を企圖せなければならぬが、這は不敏乍ら余が拙著「昭和の新理想と世界美化」中に詳述せし所である。斯くて、此絶大なる見地に基き、茲にどうしても、文武一如の至大なる理想が存在せねばならぬ譯であり、そこに我國國是の絶對なる尊嚴性が躍動せること言ふ迄もない。(第一章参照)。斯くて余は終に臨

戦争の價值批判

み最近私に響き來りたる宇宙「ラジオ」の二三を述べて本章の局を結び度いと惟ふ。

「生物界に於て戦争の絶滅さるゝ事なかるべし、唯時代により其の方法と形式と精神とを異にするのみなりとす。」

「人生は「生」なるが故に波あり、而てそこに戦ひが存在する。」

「平和を欲する宗教も既に戦ひなり」、「理屈の窮極する所は力を明にするに在る」を知らなければならぬ。

斯くて將來戦争若し吾人に許さる可しとせば「そは必ずや我國の國是に基くものでなければならず、人類を活かし、世界の平和と世界文化の進展とに貢献するの眞大義に依るものでなければならぬ」ことを俟たぬ。

而て是即ち、言ふ迄もなく、戦争其のもの、「まこと」に外ならぬ。以下戦争の要素たる武力に付、考究しよう。

第七章 武力、軍紀及統御

國家に武力あるは尙身體にそを保護する衣服を用ひ、時に、要すれば、特別なる防護の要具を必須とするが如くである。國家が本來人間存立の必要上「のつびきならぬ」要求により創造されしものなる以上、そを守護するものが、どうしても之を組立つる全成員でなければならぬこと、固より論を待たぬ。是、正義と仁愛とは人生無上の真理たるも、そが實現には力の存在を必要とし、開闢以來不斷に發展し累積せる文化の擁護又正當なる武力の儼存に俟たねばならず、而て斯る武力たる、國家的に統制せられ訓練せらるゝに於て、始めて其効力を發揮し得可きことを俟たざる所たるを以てある。治に居て亂を忘れざるは、東洋古來の名言となさるゝ所、斯くてこそ、物騒なる此世に於て、永き泰平も樂み得るなれ、然らずんば、そは全く基礎なき砂上の樓閣に等しきものと云はなければならぬ。

斯くて、國家は自己自らの存立を保つ爲、並に世界全體の平和に貢獻する所あらんが爲にも、常に正當なる武力を持つことを必須とし、そは、其時勢と國家の進運とに應じ、必要にして且充分なる程度にあらねばならず、這は、又實に、國民全部の武的

武力の必要

精神即ち武徳の基礎上に建設せられねばならぬ。是即ち真正なる國家護持の力であり、軍備である。無論軍備は時により伸縮があり得可きであるが、國家の急變に應じて遺憾のないだけの精銳にして健實なる軍備を必要とする。

軍備は其中に種々の要素を有するも、其主重なるものが軍隊艦隊及び空軍(今や、空軍が將來尤も主要なるものたらんとする傾向が如實に顯現しつつある)なること言ふ迄もない。而て之等は人的交戦主體として左の如き必須の諸條件を具備せねばならぬこと多言を要せぬ。

一、必要なる體力

二、必要なる智的能力

三、情及意的訓練

實に戰爭に任ずべき各員は、上下を通じて之等の諸條件を必要とし、而て、そは個人的及團體的の兩方面を具へねばならぬが、其完成せる曉には、茲に所謂軍紀が成立する譯である。以下本書の見地より軍紀、其他に就き、必要の諸件を概述しよう。

抑も軍隊は、出身地及素養と經歷とを異にする國民壯丁の集團なるが故に、須らく先

づ此等特質を有する異分子を結合し、之を鍛錬して一體となし、以て強固なる一大勢力を形成することを要すること、尙大小各種の樹枝を集束して靱鞏なる束柴を製作する如くでなければならぬ。束柴の結束に尤も必要なるものは緊締用綱繩にして、軍隊の結合上切要なるものは所謂軍紀である。彼の軍隊内務書綱領に掲載せられたる「軍紀は軍隊成立の大本なり、故に軍隊は常に軍紀を振作するを要す。時と所とを論ぜず、上下齊しく、法規を恪守し、熱誠以て軍務に努力し、命令必ず行はる。是を軍紀振作の實證と爲す。云々」は、克く軍紀の軍隊に於ける關係を説述して餘蘊なさものと云ふ可く。而てそは一に培養によりてのみ之を慣習たらしむることが出来る。蓋し年月の経過と共に漸次之に慣熟せしめ、以て第二の天性たらしむるに非ざれば、之を全ふし得可からざるは識者を待て知らざる所である。

將官「マルモン」Marmou 氏曰く、「軍紀は隊長の正當なる意思及規則に服従せしむるを云ふ」と。又將軍「モルトケ」Moltke 氏は軍紀に關し、「之を上よりせば命令なり之を下よりせば服従なり、服従と命令とは軍紀なり。軍紀は軍隊の精神なり、軍隊に

軍紀なき、軍隊なきなり。」と言つて居るが。此の「命令」を以て軍紀の主重なる要素となせし點は、元、當然の事ではあるが、同將軍の慧眼を窺ふに足るものがある。而も其所謂命令や之を哲學的に云へば、具體的であり、絶體的でなければならず、之を通俗的に云へば、そは彼我や四圍の全狀況に最も善く適應し、且つ夫れに關し、必要な諸要素を盡く包含網羅せるものでなければならぬこと、言を待たぬ。而てそこに將帥や長上者の絶大なる修養と心懸とを必須とする。

夫れ然り、而て克く居常軍紀を振作し、之を培養維持し、軍をして所要に際し遺憾なく其全能力を發揮せしむる所以の者、是即ち軍隊に於る武徳鍛錬の主要なる目的に外ならず。而てそを實現せしむる所に、武道が存在する。そは即ち統率者より見た統御道であり、被統率者よりする服従の道に別でない。但し茲には、慣習上「服従」の字を用ゐたが、我國民精神の上より云ふときは、軍人として上官の命を奉ずること、實は、天皇の御仰を承るに異ならず。斯くて下級者の長上者に對する關係は、服従丈では、未だ當を得ず、實に補翼でなければならぬ。古語に所謂「まつらう」が是であり、

這は我國家の成立及我軍隊統率の根本原理なるが、此事は前拙者「昭和の新理想」中眞尊王論の部に詳しく述べて置いたから、茲には省略する。そこで如上の見地より之を見れば、苟も命令たる以上、そこに確固不動の根據と必須性、換言すれば其尊嚴性がなければならぬのであつて、此處に各階級を通じ、上長者としての重大なる責任が存在する。以下引續き統御に就き、説述しよう。

統御とは

統御（ここでは統率と殆んど同義なりと見て可ならん）とは、元、統御者が被統御者に對し、服從（本來より云へば「補翼」なるも、暫く慣習に従ふ）の眞正なる履行を要求する所以の要道たり。而て良好なる統御状態の成立する爲には、統御者の統御力（力主義の力にあらず、純眞なる精神力を云ふ）と被統御者の統御者推戴に關する心的服従とを必須の條件とし、此兩者の結合により、軍は、軍紀を具へ鞏固にして活動力を有する一大勢力を包藏するに至るものとす。孫子曰く「人既專一則勇者不_レ得_二獨進。怯者不_レ得_二獨退。此用_レ衆之法也。」と、是れ此謂に外ならぬ。

統御力

抑も統御力や是れ統御者の精神力にして、別言せば統御者人格の力と光とに異ら

其内容

ず、而てそは常に被統御者に對し命と光とを與へ得るものでなければならぬ。そは統御者個我の力に非ず、そは實に、長くも叡聖文武に渡らせ給ふ我 天皇の大御力であり、國家の力であり、宇宙の力であり、被統御者が無意識ながらも其要求しある根本的のものに乗入つたる力即ち被統御者全體の力であり、而て又之等の全般に即して統御者の統御力たるものである。斯てそは又眞に通じ、全に達するを以て要件とする。何となれば克く斯くの如くなるに非ずんば、絶對性を有す可き軍隊の統御を成立せしむるの力と光とを有せざる可きを以てある。而て這は云ふ迄もなく、之を古今に通じて謬らず之を中外に施して悖らざる「余の所謂「まごころ」に別ならぬ。斯くてそは又此點に於て後述する統帥力と同一なるが、そは二者が畢竟人間生命の神祕的靈力の發現に外ならざるを以てある。

斯くて心的服従を得るの道如何。之が爲には、先づ、何を措いても、如上の純一なる統御力に基く、上長者の誠心と慈愛とを推さねばならぬ。語に曰く、「誠而不動者、未之有也、不誠而未_レ有能動者也」と。是此謂である。但し、長上者の慈愛は統御道の

心的服従如何
にして得らる
可きや

尤も要求する所なりと雖、徒らに歡心を求めんとして、部下の意思に迎合するが如き固より不可なり。之が爲め權謀を廻らすが如き、更に不可なり。而て部下の籠絡更に亦不可なるを知らねばならぬ。斯の如きは卑劣なるのみならず、畢竟、必ず部下の觀破を免れざるものである。之を西洋諸國の狀態に徴すると、統御を以て其時々の場合に於る部下操縦の方術なりとなすふしも見ゆるが、這は彼の土に於る歴史的過程に基く自然の成行であり、そが我國に適用すべからざること、言を待たぬ。

尙軍紀の養成及維持の爲め、時に或は威力の必要なに非ず。是即ち統御道中の武とも云ふ可き方面なるが、そは決して、必要以外に使用す可らず。何と云つても、統御道に主として用ゆべきは、仁愛であり。威嚴や威力も、一に「まごころ」より出づるものならざるべからざること、言を待たぬ。そこで如上の仁愛は統御道中の「文」とも云ふ可き方面であり。斯くて統御道そのものにも、之を分くれば文武の二面を有し、其協調融合が是非とも必要なを知ることが出来る。

尙終に特に言はんと欲することがある。そは別ならず、「統率の美化」てふことであ

る。以下之に付一言しよう。余は常に、之を詮ずるき、世界と人生とが「無限の美」なるを確認するものであり。而も此「美」や、獨り「まごころ」によりてのみ自得せられ味識せらるべきものなるを痛感する。斯くて靈的存在物たる人間は、世上の萬般が美化せらるゝ迄其眞味を味得せねばならず、其眞髓を體得せなければならず、尙又凡ての行動や運爲にも充分なる餘裕を存し、落附を有せねばならぬが、斯かる時、始めて其の人の能力や行爲の凡てが神に通じ、そこに自在無限の靈力を發揮することが出来る。是抑も統御道の極致にして、その眞諦ではないか。而も這は畏くも、神隨ら我皇室に傳へさせ給ふ「しらす」の政治の要諦に別ならず。而てそこに又、我國に獨特なる「うるはしき」統率道の、酌めども盡きぬ清澄なる源泉が嚴存すること、言ふ迄もなし。

尙最後に統御道の修養に付説述しよう。

前述せる如く、余は統御、統率道の眞髓を以て「まごころ」に歸着せしむるものなるが、さて「まごころ」は何かと問はるゝと、中々直に明確には答へ得る譯に行かぬ。這

は前編にも述べし如く畢竟各人の工夫に依る體得に待つ可きものなるも、余は之が準備的基礎的條件として、先づ「虚己」を推稱したい。「虚己」に就ては後文に詳述するが、之を一言にせば、私心なき、純一無雜なる自己本來の面目に還歸せる「我」の態度であり。彼の古人の一日三省の如き、畢竟如上の態度を捕捉せんとするものに外ならぬ。而も上長者の徳や、其至るに及んでは、自から克く部下を感化し、善導し、彼をして不知不識の裡盡く皆「己を虚ふし」、一意、公と長上とに奉ぜざるを得ざるに至らしむ。斯くて下従者の理想的奉仕の態度たる亦「虚己」にありと云ふことが出来る。

そこで、一度び斯かる、状態が自他共に湧き來るに於ては、換言せば、即ち上下が共に上述せる純眞の我に立返り、其胸奥の「まこと」が固有の力一杯に活躍する時、茲に統一するものも統一せらるゝものも皆同一の働に向ひある譯にして、其極致は之等兩者が「統御する」、「統御せらるゝ」てふ對立の境域を超越し、二者同一體となり、本來共同的なる使命任務に「いそしむ」てふことにならざるを得ぬのであつて、いやでも全體の統一が完全に出來ざるを得ぬことになるのである。之を哲學的に云へば兩

者の止揚である。而て此邊の消息を悟り得ねば、我躬らによる「我」の統御すら完全には出來ざる可く、況んや、面の違ふ人心の統御が美く出來る筈はないのである。

彼の近世自然科学の元祖と稱せらるゝ「フランシス・ベーコン」Francis Baconは其著 True Suggestion for the Interpretation of Nature「自然の説明に關する眞の暗示」に於て、「自然は服従によりてのみ歸服せしめらるゝものなり」と述べて居るが、是、自然は、我先づ自然に服従してこそ、初て征服し得べきものなるを述べしものにして、這は彼の一大卓見なりと惟ふ。即ち彼の所謂服従とは勿論自然に盲従するの謂ならずして、先づ能く其性質を闡明したる後、其各の特性に従ひて遺憾なく其固有の本性を發揮せしむることにより、初めて人生に於る自然の利用てふ目的を達成し得るものなるを道破せるものである。尙換言すれば、吾人類たるもの宜しく先づ心眼を開きて大宇宙大自然の神祕を達觀し、我を出さず無理をせず、勿論自然を向ふに廻はし之と相争ふ態度でなく（統率も悪くすると部下と相争ふ態度になる）、自ら自然の眞只中に乗り入りて、之を自由に駕御するの態度を採らざる可からざるを喝破せるものにして、

「鞍上人なく
鞍下馬なし」

恰も名馬手が馬の氣質を呑み込み、馬と一體たるに到り、初めて「鞍上人なく鞍下馬なし」の妙技を發揮し得るに異ならず。茲に最も適切なる物の利用や、馬の眞の駕御が成立するわけである。否な此境界まで行けば、前述の通り、駕御とか、統御とか、使用とか云ふ境界は已に通じ抜け、それを超越して一段高き所へ上りたるものにして、是即ち止揚 *anfliegen* である。茲迄行かねば幾億萬の士卒を手足の如く動かし能はざること云ふ迄もない。

更に以上を推言するとき、統御に關する限り、余は優秀な將軍や、軍司令官は、必ず良輔佐官より出づべきものなるを斷言したい。換言すれば、輔佐官として身命を厭はず、己を捧げ力を竭して（己を虚ふして）、上長を輔佐するもの、即ち以上の「まこと」と「まごころ」に就いての修養を積めるものに非ざれば、決して人の上に立ち衆を統率して其宜しきを得る能はざるべきこと、言を待たぬ。下の位置にある時、此實地の修養で鍛錬されぬものが上級者になると、口先や理屈丈は何と云つても、其言の底や行やに力がない。馬鹿者や諂諛者や「ふらつき者」は誤魔かし得ても、具眼者か

優秀の將軍は
良輔佐官に出
づ

らは忽ち觀破せらるべく、否な假令間違つて一時は世間を瞞着し得ても、天下萬世と宇宙とは欺けぬ。神様が御照覽になる。充分なる美はしき統率の決して爲し能はざる可きこと論を要せぬ。

可謂「椽の下
の力持」の絶
大なる價値

尙念の爲め老婆心迄に附言するが、何々隊長、何々司令官と云ふやうな華々しき位置に比べて、隊附とか、參謀、副官と云ふ如き比較的じみの位置（俗に所謂椽の下の力持的なる）に居つて、循々として倦まず、弛まず、上長の心（天下の心）（民の心）（衆の心）を以て心となし、鞠躬の節を盡し、我身の利害を顧みざる心掛行動を採ること、中々容易でなく、大なる勇猛心を要するのである。佛教に所謂勇猛精進が之である。然し此修業に及第せぬものには、到底長官たるの適任證は與へられぬ。尙這は決して軍人に限ることならざるも、最も慎重に行動す可き高級司令部又は官衛等の樞要なる輔佐官等にして、時に或は（知らず／＼ではあるが）自己の才を恃み、學に矜り、甚きは虎の威を藉り傍若無人の振舞を爲すものあるやの世評を耳にすること、往時は絶無ならざりしも、如斯は自己の修養を害し、品位を損するは固より、其長、延ひて

は帝徳を傷くるものであり、其罪輕からずと云はねばならぬ。此邊は將來の將軍や軍司令官や長上者を以て任ずるもの並に之が養成者を以て任ずるもの、修養上深く省みなければならぬ點と惟ふ。

余は曾て十八史略を讀んだことがあるが、其中、夏向氏禹の部に次の要旨のことがある。

禹の治道

「出で、罪人を見れば、車を降りて問ふて、而て泣いて曰く、堯舜の民は堯舜の心を以て心と爲す、寡人君となりてより、百姓各、其心を以て心と爲す、寡人之を傷む」と。而て禹王が此點に覺醒せしは、是れ彼の統治に於る眞髓の獲得なりと思考する。曩きに表示せし通り、孔子は「仁」を唱道し、我道「仁」を以て一貫すと説て居る。而て其内容として他人に對する道につき忠恕を説て居る。是れ英國の「アダム、スミス」Adam Smith が道德の基礎條項として説きし同情 Sympathy と同一である。這は即ち云ふ迄もなく、吾を他人の位置に置きて考へ及び行動することである。そこで余は以上所述の結言として此「忠恕」を長者の道として推稱したい。之を統率道に當て

忠恕

嵌むれば、云ふ迄もなく、上のものが下のもの、身になり、彼等のことを思ひやることにして、左すれば無理がなく、何等其處に問題が起りやうなきわけである。而て是亦先づ己を虚ふせざれば出來ぬこと論を俟たぬ。彼の所謂才子や、敏腕家など、云はるゝ人が、兎もすれば好んで用ゐたがり勝ちの權謀術數や、威壓や、其他各種の手段等は是寧ろ末のものである。余は之等は必ずしも絶對不必要なりとするにあらず、事物を爲すには手段方法が要るし、又前述の如く時には正しき威壓も必要なるが、之等は何れも以上説述せし基礎的諸條件を確立せる後、其鞏固なる根柢の上に築かれてこそ、始めて其價值を發揮し得べきものなりと思惟する。

斯くて余は結局、面の異なる如く盡く其身心を異にし而も放置せば自由に勝手に行動すべき幾億萬より成る多衆の統制も、詮じ詰むれば、是全く一に個人腦裡の問題に歸着せしめ得るものと惟ふ。斯くて多衆の統制と個人腦裡の統制とは其間頗る密接なる關係を有するものにして、是即ち彼の儒教の根本生命なりとせらるゝ（大學に所謂修身齊家治國平天下の思想と其歸を一にするものである）。

統御も個人腦裡の問題に歸着する

長くも 今上陛下は朝見式の勅語に於て、左の如く「中道」の尊ぶべきを宣らせ給へり。

朝見式の御勅語

今や世局は正に會通の運に際し人文は恰も更張の期に膺る則ち我國の國是は日に進むに在り日に新にするに在り而して博く内外の史に徴し審に得失の迹に鑒み進むや其の序に循ひ新にするや其の中を執る是れ深く心を用ゆべき所なり

是即ち「中道」を以て此一句を結ばれある譯にして、之を拜讀するとき、特に「中道」を重んじ給へることが克く分かる。此「中」は古來東西共に重んぜられし倫理上の概念にして、殊に君道（統治統率道も此中に包含せらる）即ち君主の遵由すべき道として、又君主の具ふべき徳として尤も重んぜられしものである。是れ支那にては書經にも、論語堯曰篇にもある。即ち「嗚呼爾舜、天之曆數爾の躬に在り、允に其中を執れ、四海困窮せば天祿永く終へん」が之である。又書經大禹謨には、「人心惟危し、道心惟微なり、惟精、惟一、允に其中を執れ」の語がある。又中庸には、「孔子曰、舜は其れ大知なるか、舜問を好んで邇言を察す、惡を隱し、善を揚ぐ、其兩端を執り其中を民に用ふ……」の辭がある。其他書經の洪範にも有名なる「皇其有極を建つ」の語がある。是天子躬を以て萬民の模範となり、萬民之を體するの狀を云へるものにして、此場合君民の理想標準が即ち中なのである。

中心X

而も此理想標準即ち「中」は前編に於て説述せる如く、決して外部に固定的に存在せる死物ではなく、實に各自の衷心に生き生きと躍動する尊嚴なる中心Xであり、自己中心の止み難き要求の源泉にして「カント」の所謂 Postulate であり、組織せられたる經驗の純化であり、のつびきならぬ、所謂已むに已まれぬ大和魂の正體そのものである。此統體だに確かなれば、是れ神佛の御力を頂きたる我である。吾人にして小我を捨て大我に覺醒し、之を純化し洗練し Purify すればする程、此力は益々増大し、曾ては卑しき醜き我（我情、我欲、我見に捉はれ勝ちの）も一歩々々神佛に接近し、其極限に於ては、人即神であり、佛であるのである、是即ち何物にも拘泥せず、何れにも偏頗ならざる、別言せば「カント」の所謂自由なる「我」にして、余の所謂「まこと」の體得者であり、又佛教に所謂無我の極致なるが、斯くてこそ、初めて萬

事を尤も適切に處理し得て、肯綮に中らしめ得るわけである。何となれば、そこには何等毫末の「わだかまり」も「いさくさ」も無きを以て、自他の角附合ひや衝突は一切止揚され、萬我萬物が圓融相即の状態となるべきを以てある。

去れば、此徳が君主にとり一層切要なるべきは論を待たざる所にして、斯くてこそ君主と臣民とは融合歸一して一體となり、そこには所謂理想的國家が現前せられ、臣民の全部が盡く君主の懷に抱かるゝに到る可く、此際此時何れの民にも不平不満のあらう道理はないのである。尙西洋諸國にても「中」Moderation は大に尊重せられし所にして、例ば「アリストテレス」の如きは「道徳を以てあらゆる事項につき中庸を意志し且之を實行するに在り」となせし程である。

斯く「中」は古來尤も重要な帝徳の一として尊重せられしものなるが、這も亦「虚己」てふ準備的態度の上に建設せらるべき「我」の状態に外ならぬ。而て熟々前に掲述し奉れる勅語を拜すれば、是即ち 陛下躬ら長くも「まこと」を實現する所以の御道を御即位の劈頭に御示し遊ばされたるものに外ならざるを知る事が出来る。茲に私

Moderation

哲人の所期

は 聖旨の優渥なるを惟ひ感慨無量禁じ能はざるものがある。仰ぎ願はくば 聖天子様を頂きて、千載一遇の更始一新せる昭和成辰を迎へ、而て今正に世界の大轉換期に乗り込みつゝある御互同胞は、此際垢があれば之を洗ひ之を淨め、是非一度びは己を虚ふし、純真なる生一本の「我」に立返り、「大日本帝國の使命 陛下の大御心」を以て我心となし、此生一本を忘ることなく、此統一の下に常に我を律し、此優渥なる聖旨を奉體し、日に進み日に新にし、舉國一致、以て日本國を美化し、淨化し御互同胞兄弟の住む所を住み良きようにし、延ひては、此大義を世界に及ぼし、萬世に互りて世界の文化と、眞の世界の開発に貢献したいと惟ふ。豈獨り統率の問題のみならんやと言ひ度いのである。

第八章 統帥

軍は統帥によりて成る、統帥の軍に於る夫れ尙精神の身體に於るが如きか。抑も身體や、之を外にしては耳、目、口、鼻、四肢、毛髮あり、之を内にしては五臟六腑を有

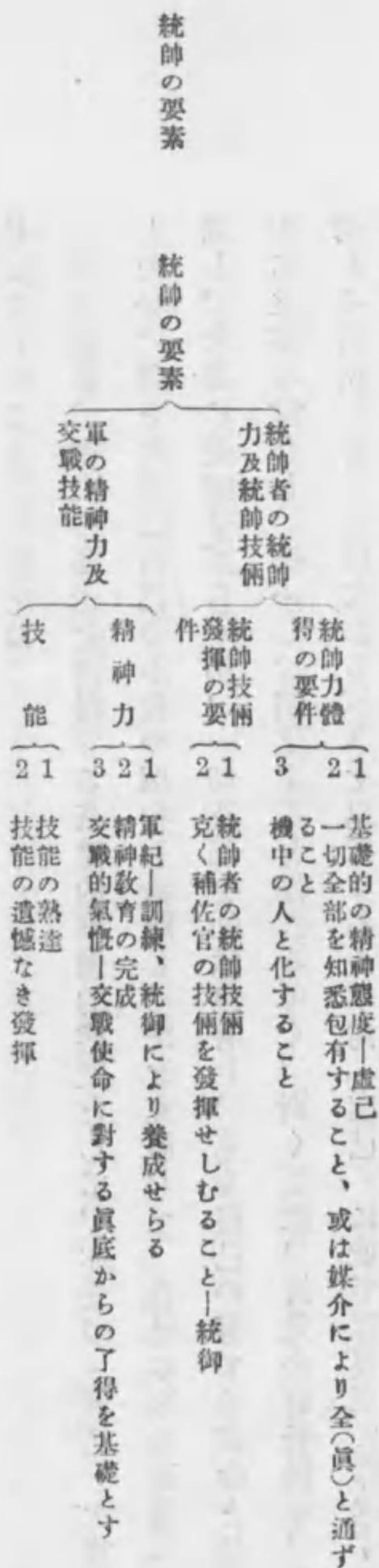
す。而て之等内外の諸機關は各其特性を有し、所要に随つて、其固有する性能を發揮す。是即ち生活現象に外ならずと雖、若し苟も此等機關にして、各自己の欲する所に従ひ、自由の行動を取り、只管其希求する所點に向ひ無暗みに邁進せんか。其活力や諸方面に分散し、或は其行動彼此互に衝突し、遂には身體亦其立場を失ひて、自ら崩壊せざるを得ざる可し。而て克く、斯かる患を除き、身體諸機關をして協調せしめ、相互に相助け相濟さしめ、以て順調なる生活を營ましむる所以のもの、是嚴乎たる精神による統整の存在するに由るに非ずや。夫れ軍の兵員は其數多大にして、艦船、兵器亦複雑夥多なり。而も之等は皆狀況の變化極りなき敵軍に應じ千變萬化せざる可らず。統帥なくんば、いづくんぞ其目的を達せんやと云ひ度いのである。

統帥とは

統帥とは戦争又は戦闘の目的を以てする、軍、艦隊、及戦時諸機關の運用を云ふ。そは畢竟詮ずるに、統帥者運用の力に待つ可きものにして、渾然たる團體的所作であり、運営である。

今假りに、之を分析的に研究せば（元來分析す可きものならざるも）、左の如く觀る

を得やう。



統帥力は統帥者により發現するものなりと雖、そは言ふ迄も無く、統帥者個我の力に非ず。そは實に全國軍統帥力の一部にして、而も又同時に、該被統帥軍そのもの、統帥力であり、而て之等に即して、統帥者の統帥力たるものである。此意味に於て、そは統帥者一個の主觀にあらず、そは實に、統帥者により綜合統一せられたる、統帥者自己と使用し得可き一切の軍精神力及技能、並に全外力（假りに外力と名附く、統帥者所屬上級者の意圖、精神力、方略、其他萬般の外的關係等一切を網羅す）の總體

より脱化せる、渾然たる一新力に外ならぬ。(以上は主として最高統帥以外の統帥に就き述べしものなるも、最高統帥亦之と其軌を一にすること論を俟たぬ。帝王の武徳参照) 斯くて、そは常に、全軍の統帥系統中に在つて、克く其適當なる所位を保持し、之と杆格することなく、能く之と協調し、而て克く適切に部下全軍を區處し、運用し、之をして遺憾なく其全能力を發揚し得しむるものでなければならぬ。天下は天下の天下であり、軍は天下の軍であり、軍の軍であり、而も此故に又統帥者の軍である。眞の統治者、眞の統帥者を以て任ずる者、須らく先づ如上の要諦を體得せなければならぬこと言を待たぬ。

而も余は、如上の要諦を體得する基礎的準備的態度として、亦先づ「虚己」を推稱したい。何となれば自己の小我や個我を捨離し、之を克服して、自己本來の面目に還歸し、大我に覺醒せざらんか、一切全部を知悉包有し、克く自己の有する使命と任務中に之等を綜合し、統一し、消化するを得ざる可く。斯くては、折角の好資料も、適切たる用所を得るに由なかるべきを以てある。尙「虚己」に就ては後章に詳述する積りである。

立法と自證

斯くて、此準備的態度の上に、始めて一切全部を知悉し、能く全と眞とに通ずるを得可く、そこに生起せらるゝもの、是即ち、統帥力である。是れ統帥力が其本質上絶對的のものたる限り、克く如上の如くなるに非ずんば、之を體得するに由なかる可きを以てある。而もそは即ち「まこと」と「まごころ」の獲得に別ならず、立法の Gesetzgebung、自證 Geistesprüfung の二作用を兼備する。之を通俗的に云へば、是即ち其時の「眞の誠」、「生ける誠」、「滾々として汲めども盡さざる眞の力」を獲得し、必然的の勢に乗り込み、之と融合せし状態に別ならぬが。其體得や、一に各自の工夫と、不斷の修養と、鍛錬とに待たざる可からざること言ふ迄もない。

而も如上に云へる、「一切全部の知悉包有」によりて全に達し眞に通ずることや、是れ統帥力體得の理想的條件ではあるが、人の天賦により、性格により、乃至修養の度によりては、此境域に達し得ぬものもある可く、或は此條件に依るを以て適當ならずと爲すものもあるべきが故に、此場合統帥力體得の道を別途の方法に求めねばならぬが、そは「媒介に依る」を可とすることである。例へば之を「孝」に取り、「身を立て、

可
媒介に依るも

名を掲げ、父母を顯はす」を以て、其唯一の信條と爲す場合に於て、それが實に眞劍となり、全生命たるにも到らんか、此「孝」中に宇宙も萬物も、萬我も包容せらるゝに到るべく、「孝」を通じて全に達し眞に通じ得可きが如くである。其他、之を「名譽」に取り、或は「祖名を辱めざる」てふことに取るも、亦將に斯くの如くなる可きは、疑なき所である。尙之を佛教に就き見ると、彼の禪宗に於て、坐禪、靜觀により、全に達し、眞に通じ、妙機を體得し。悟道徹底せんとするに對し、眞宗に於ては唯一向の念佛により同一境地に到達し得可しと爲すが如くであり。唯、之等の媒介的信條が專念され、信奉され、之に對して全精神が打込まるゝを必須とする。

統帥力や學により養はるゝも、而も學により達し得可きにあらず。そは統帥者としての精神の純化であり、淨化であり、「ヘーゲル」哲學に所謂自己意識の純化にして、口之を説き難し。其體得や、一に各自の努力に俟つべきものなること、上述せる通りであり、這は實に、全に達し、眞(神)に通ずる人間精神の體得に別ならぬ。(次章「機論」参照)是れ、世に無學の親分あり、棟領ある所以にして、三軍の統帥亦必ずし

世上何故に無
や學の親分あり

も學に拘泥す可きものならざること、多言を要せぬ。

(學は少くも統帥に關する知識を増長するが故に統帥力を養ふ所以ではある。

誤解なき)中庸に曰く、「君子之道費而隱。夫婦之愚可アツカリ以與知焉。及ニ其至一也。雖ニ聖人一

亦有レ所レ不知焉。夫婦之不肖可ニ以能行ニ焉。及ニ其至一也。雖ニ聖人一亦有レ所レ不能焉。天地之大也。人猶有レ所レ憾。故君子語レ大天下莫ニ能載ニ焉。語レ小天下莫ニ能破ニ焉」と。此「費〇〇〇にして隱〇〇〇なる道」の體得、是即ち所謂「全に達し眞に通ずる」所以の要道に外ならず、而し這は即ち又「まこと」と「まごころ」との眞の體得に別ならぬ。そは、近代人の須らく、虚心坦懷深く味はねばならぬ人生の眞味であり、事業遂行の要諦であり、而て又世渡りの眞祕術でもある。

而も又、如上の精神的態度や是實に「機」の體得に別ならぬ。換言せば、克く如上の精神を自得し、能く全に達し眞に通ずるを得んか。茲に初めて一切と圓融無礙なるを得、自己自ら「機中の人」と化するに至る可く、斯くて克く機を御し、機に乗じ、機と共に與こにするを得ん。而て是即ち統帥の神であり、深であり、信であり、心であり、眞であり、其自由であり、其極致である。(機論参照)

統帥は力を以て主とし、而もそは、首將により表現せられ、一切を包容する絶大な精神力である。そは首將の包括力であり、運用力であり、而て又交戦力でもある。而も此力や、其實現に際し、統帥術を生まざるを得ず。そこに統帥上の術策があり、方法が存するが、這は又一に、所謂統帥の技倆に俟つ可きものである。

統帥の技倆を分けると、之を統帥者自己の技倆と、補佐官の有する全技能の遺憾なき發揮とに、別ち得るが、兎に角、現時に於る複雑なる大軍の統帥に於て、之等が極めて緊要なること、固より言を待たざる所である。而も補佐官をして克く其蘊蓄を傾倒せしむる所以の者や、是れ首將其人の徳に待つ可きものにして、そは主として、統帥の範圍なりとも云ひ得やう。這は統帥と統御との極めて密接なる關係を有する一適例である。

尙最後に謂ふ可き極めて必要なる一事がある。そは所謂統帥の要素として、軍の精神力と其技能とが、重要な位置を占むるを發見する事である。卑近の例なるも、千兩役者をして其入神の技倆を彌やが上に發揮せしむるものは、彼をして遺憾なく其妙

統帥術と統帥
の技倆

軍の精神力と
其技倆

技を振はしむ可く仕向くる其周圍や外部の熱誠なる協力と援助とであり、尙又満場に溢るゝ全觀客の信頼であり、最負であり、聲援であり。講演者をして、些の淀みなく益々其力ある雄辯を吐かしむる者、是亦實に全聽衆の熱誠なる傾聽であり、其尊信である。然らば則ち、統帥が、獨り統帥者や幕僚の精神力、手腕にのみ據るものでなく、又實に該全軍士氣の振否と其の確信と不撓の勇氣とに繋つて存すること、識者を待て知らざる所である。而てそこに必須なるもの、是れ軍紀であり、精神教育の完備であり、而て、又交戦目的に對する心からの理解であり、及び必要なる技能の熟達にして之等が一に教育と統御との領域に俟つ可きものなること、亦言を俟たぬ。是抑も苟も軍統帥の重任を負ぶる各級幹部の、必ずや、指揮官と教育者とを兼ねざる可からざる所以である。古の武士は交戦目的の如何を問はず、唯、君の馬前に討死するを以て無上の名譽とした。近代の軍隊又其命令に對し違反を許さずと雖、現代の兵卒や、盡く教育を有し、國家と自己とに多少とも覺醒せるものである。去れば之をして自ら進んで戰場に馳驅せしめ、劍電彈雨の裡、尙克く安んじて命を鴻毛の輕きに比せしむる所

以の者、是實に交戦目的に對する心からの理解であり、戰眞に止むを得ずとなす徹底的自覺であらねばならぬ。是れ余が、將來の戰爭を以て、最非とも國是に據り、正義に基かしめざる可からずと爲す所以である。而も首將の徳望と力量とは、其熾なるに迫んでや、克く全軍將卒をして、非理尙甘んじて之に殉せしむ。古往今來其例に乏しからず、是れ抑も人が感情的の存在物にして、單に理智のみにより左右し得可からざるを立證するものにして、そこに各級統帥者により開拓せらるべき重要なる方面の存在すること又論を待たぬ。

之を要するに、上述せる統帥力は所謂東洋流殊に日本流とも謂ふ可きものにして、我國古來名將の眞の正體が是である。之に對し所謂技倆の方面は、西洋流とも、稱し得可きも、之を近代的に云へば科學的統帥である。這是換言せば、凡てを條件的分析的に研究し、之を綜合して、所望の成果に到達せんと期するものにして、今日の複雑なる大軍の統帥上、其要度の絶大なる言を待たぬ。但し西洋に在ても、特に東洋流の精神力を重視するもの尠からず。例へば「クラウゼウキッツ」 Clausewitz 將軍の如き

是である。そこで余は、將來に於る眞の統帥は、是非共、如上兩要素（兩流）を打つて、一丸とし、之を一身に體得し、所謂運用の妙域に到達するものならざる可からざるを、絶叫せんと欲するものにして、是れ抑も神隨ら皇國に繼紹せらるゝ、畏くも叡聖文武に渡らせ給ふ我國 天皇の御武徳に別ならぬ。

以上、統帥に關する基本的事項に付其要綱を研究したが以下更に我國軍の統帥に就き考察しよう。

茲に詳述するの暇を有せざるも、之を歴史的に考察すると、我國はどうしても、理想的君主國なりと稱せねばならぬ。而て其神隨たる。畏くも御歴代の 天皇により彌や繼ぎ／＼に繼紹せられ、恐れ多くも臣民と同身一體觀に立たせ給ふ、聖天子により彌や榮かに實現せらるゝ、尊嚴にして洪大なる 天皇道の存在することにして。そこに我國の、仁國にして武國たる所以のものが儼存する。而てそは又實に、理想的統帥道の胚胎に導かざるを得ざるべきこと、察知に難くない。

我國軍の統帥や、之を歴史的に考察し、之を哲學的に探討すると、どうしても其根

源を、畏くも神隨ら如上統帥の眞奥儀を深く體得せさせ給ひ、畏くも叡聖文武に渡らせ給ふ我 大元帥陛下の御武徳に、基づかしめねばならぬこと、固より論を要せぬ所である、そは即ち、幾々億萬年の鍛錬による我國の國是に基くものにして、時と共に進展し、世と共に發展し、無始にして又無窮であり。茲に我國武徳の絶大なる崇嚴性が、永劫に亘りて存在する。去れば我國の臣民たらんもの、上元帥より下一卒に到る迄、苟も統帥者たるの榮位を辱しむるものに在ては、常に先づ「個我」を去り、自己を捨て、上述の趣旨に本づき、一に皆是 陛下御武徳の發揚を以て其任とし、我國神聖なる武徳の發揮を以て念とせねばならぬこと言を待たぬ。茲に我國武人の本分があり、何物にも代へ難き安心立命の大天地が存在する。而てそこに又、絶大なる責任の存在すること云ふ迄もない。若し我國の軍隊に強ひて「デモクラシー」Democracyなる名字を冠せんと欲する者あらば、余は直に之を賛し、而て之に教ゆるに如上の大義を以てせんと欲す去れば我國軍隊の心隨や、是れ實に、其上下を通じて一貫する、元來我日本帝國てふ大家族の家長にましまし、而も神隨ら神聖なる すめらみかどに渡

我國の軍隊と
「デモクラシー」

らせ給ふ、我 大元帥陛下の御心を以て、己のが心となす」てふ一點に、歸一せられ、統一せらるゝが。這は云ふ迄もなく、我國軍統帥に關する無二の信條であり、無上の信念たらねばならぬ。而て最實に我國國皆兵精神の存する所であり、這は畏くも軍人に賜りたる難有御勅諭の根本的眞髓に外ならぬ。而も如上や、勿論武人にのみ限らるべきに非ず、苟も我國の臣民たらん限り、皆盡く然らざるものなかる可きも、天皇統率の下に在る我帝國軍人に於て、一層の切要を感ずること多言を要せぬ。

而も上述せる如く、吾人の職責や、決して之を以て足れりとするものにあらず。言ふ迄もなく、各級の職責に應じ、終始、身體、智識、精神(通常的區分による)のあらん限りを捧げ奉り、換言すれば、方法の出來得る限りを盡して、以て如上 大元帥陛下の御武徳を補翼し奉らざる可からざること、亦言を待たぬ。是即ち近世西洋流に所謂方法論 Methodologie の問題であり。そこに戰略戰術と技術とに對する不斷にして深奥なる研鑽と、實兵の運用、指揮に就いての熱烈なる訓練とが、最も重要となるのであつて、上級者たるもの、常に深く先づ自ら修養を積むと共に、此點に關する部下の教育を以て

自己の修養と
部下教育

念とせなければならぬこと亦前述せる通りである。

尙念の爲め附言するが、如上の見地より之を観ると、統帥が、明治以來我國軍教育の傳統に所謂敵狀、任務及地理と地形とにより其宜きを制せざる可からざること、固より論なき所なるも、而も之等三者に對する考察や批判は、唯、空に客觀的にのみ爲さるゝのでなく、必ずや是迄に説述した、覺醒せる純眞の自己意識に基かじめねばならぬこと、云ふ迄もない、卑近の例を取らんか、敵狀頗る優勢にして、地形亦險惡なりとするも、我にして眞に之等を壓倒し得可き大力量あるの確信を有せんか、そは寧ろ我に取り與みし易き劣敵たるに異らざるが如くである。

之を要するに統帥をして常に良況を保持せしめんと欲せば、間斷なき自己に對する修養と部下の教育とにより、向上せられねばならず。而もそは常に外的條件に對應せしむるを要するも、而もそこには常に一貫せる「我」の眞の自覺が存在せねばならぬのであつて、余は此見地に基き別言せば、統帥や、先以てそを純眞なる自己反省による自我價值（力）の認識に本づかしめざる可からざるものなりと提唱したい。而て這

自我價值の認識

も亦余の所謂「まごころ」による「まこと」の獲得に外ならぬこと、云ふ迄もない。

第九章 機 論

第一款 序 言

機とは何ぞや、曰く云ひ難し。人あり、之を捉んとするや、已に去つて在らず。之を追ふも得ず。之を迎ふるも、獲るに難し。然らば機や、存在せざるの假名なりや。否々決して然らざるなり。機克く物を生じ、能く物を滅す。機や人を和らげ、人をして戦はしむ。機在つて、家榮え、國富み、文化益々隆昌なり。而も隆昌の中自ら衰頽の兆を孕む所以のもの、亦機の與る所に非ずや。機や、機や、汝何すれぞ夫れ人生を支配するの爾く深酷なる。斯くて余は、自然と人生との萬般が盡く機の關與する所ならざるなきを痛感するものにして、戦争亦固より終始其支配を脱するものに非るを切思する。

夫れ兵は危道にして、國家の安危、國民存亡の依て繫る所たり、而し其戦ふと、戦

はざると、將又其戰ふに方り、そが適切なる遂行に對し之を規正する所以のもの、亦一に之を機に依らしめざるを得ず。機の戰に於る、其要緊、之を爾他の事項に比し、一層の深酷を呈す可きこと、亦論を待たざる所である。上、和戰の決定、軍の統帥より、下、分隊の統帥、一艇の運用に到る迄、凡百の事、一に皆、戰爭てふ特殊の活動中に動きつゝある活機に待たざるものはない。人克く之を省み、之を推し、之を察し、能く之に乗じ、之と共に偕にするに於て、其絶大なる理想も綿密なる計畫も、始めて實現し得可きこと、論を待たぬ。而てそは實に、人生の奧祕であり、幽玄なるものであり、而もそは又深く人生の妙諦に接觸するものである。宜なる哉、古來の名將と稱せらるゝもの、何れも皆、這次活機の捕捉に關し、天才的にか、修養的にか、其堂に入らざるもの無き事や。而も是れ實に、余の所謂「まこと」そのものゝ進展であり、其の活躍であり、而て又其の眞髓の繼續的發現にして、宇宙の祕奧に別ならぬ。是れ余が特に本章を詳述し、這般活機に就き、比較的徹底せる研究を重ねんと欲する所以である。

第二款 活動的人生觀

機や、元、宇宙其者の神祕であり、宇宙をして宇宙たらしむる所以の樞紐であり。而て人生をして人生たらしむる所以の關鍵も亦茲に包藏せられる。其活動や、是れ即ち人生の進行であり、世界の進展に外ならぬ。之をしも覺らずんば、以て宇宙と人生と尙又「我」をだに知悉するものと云ひ得まい。以下此見地に基き、「機」考究の前提として、故大西博士の所述に藉り、機的人生觀とも稱す可き活動的人生觀に就き、説述しよう。

「大思想ある者、之を偉人と云ふ。手足の動く、感情の發する、是れ既に第二等の事なり。奮起飛動の源頭は常に天地と人生とに關する大思想にあり。此大思想の決定され難きの故を以て、冷然之を顧ざらんとするか。酸素と水素との比量、其化合の規律の決定せるの故を以て、吾人の知識と信仰とを此境界に限らんと欲するか。人は麵麩のみを以て生き得るとするも、酸素の比量を以て重力の規則を以て蓄電器、蒸汽罐を以て銀行を以て植民開墾を以て權利義務の定義を以て生き得るとするも、斯の如きの

食物を以て生きる人は到底するに人類の歴史を震動する飛躍を爲し得る者に非ず、又その如き矮人を以て組織せる國家は矮國たらざるを得ず、世界の歴史の片隅に蟄居せざるを得ず、遂に歴史の鐵脚に觸れられて亡びざるを得ざるべし。一大國の起るや、必ず一大世界觀の之を振起奮勵せしむるあり、萬世の師表と仰がる者、固より人生に關する大思想なくんば非ず。看よ、釋迦牟尼の世界觀と耶蘇基督の世界觀とは其趣を異にする決して少なりとせず、而かも共に特殊偉大の趣あるに非ずや。若し天地と人生とに關する吾人の觀念は改造して更に改造するを要する者ならば、何ぞ無窮に改造するを厭はん。吾人は宜しく無窮に改造されつゝある大世界觀によりて活動すべきなり。昔時の世界觀は今日の世界觀に其所を譲り、今日の世界觀は又將來の世界觀に其所を譲るべき者なるが故に、皆いづれも無價值なりと云はんか、虚妄なりと云はんか。看るべし、斯る無窮の改造に進化に唯一不二の眞理實相の現るゝを。限りなく變ずる者はその變ずるの故を以て、之を虚妄なりと云はんか。是れ事物の實相は變化を離れたる處にあらざりて變化の中にあることを悟らざる迷誤の見なり。變化雜多を離

「吾人は活動
進化の大潮流
に立てり」

れたる不變不動常住無差別は眞實の相にあらず、寧ろその如き常住無差別をこそ假妄と云ふべけれ。不變と眞實、轉變と虚妄とを同一視するは大謬見たらざるを得んや。吾人は活動進化の大潮流の中に立てり。好むも好まざるも、此進化の大海に船を浮べざるを得ず。進んで倦むこと勿れ、徒らに後を顧る者よ、徒らに安息を貪らんと欲する者よ、進化の波浪は汝が船を覆さん。烟は昇り、水は流る、流れて倦むことを知らず。吾のみ豈に獨り活動の世界に倦み果つべけんや。豈に獨り枯死寂靜を慕ふべけんや。止水は腐る。何故に無窮の活動、不息の進化、永久の生長に倦み疲るゝか。是れ他なし、此活動に此進化に此生長に無限絶對の價值あることを見ず、圓滿の眞理が只だ此進化の相に現ずることを知らざるが故のみ。此進化の道行此生長の段階に吾人の一身を捧ぐべき妙趣あることを見ば、何ぞ活動の世界に倦み果て、枯死靜寂を慕はんや。但だ此妙趣を看取し得ざるは、天地自然の大道に、其大道の運行に、我身を投ずること、を爲し得ざる小我心の致す所のみ、天地の大道に合して其機關となることに、わが眞我を發見せざる迷誤の致す所のみ、是れ眞に迷誤なり。此迷誤を轉ずることそれ

自身が無上の價值ある進化の一段階なり、迷誤を轉ずるの活動それ自身に代ふ可らざる價值あるなり、眞理は這般活動を離れて悟得すべきものにあらざればなり。眞理なるものは遂に達す可らざる天上界に獨り超然として棲む者にあらず、迷誤を轉じつゝ、行く、進歩の道行の中に現ずるなり。此進歩の道行それ自身に絶對の價值あることを知るに於てはよく無常の中に常住を觀じ、不満足の中に満足を覺え、流轉の中に安立し、活動の中に寂靜なるを得べし。吾人は息まざるの進化を扶くることを以てわが目的とす、一段階に停りて安んずることを爲さず。故に進歩の精神革新の元氣は勃々として胸裡に湧き來るべし。百難を排しても社會の改良人類の進歩を企圖して已まざるべし、此精神を懷く者は常に益つることを知らざるべし、常に不平たるべし、不平なるが故に活動して止まざるべし。而かも此活動に絶對無上の價值を認め、不息の進化を扶くることにわが最大の光榮わが天職を觀るが故に、其心事は明月の如く明かなるべし、天空の如く靜かなるべし地根の如く安かるべし、何すれぞ天地を怨みん、何すれぞ人間を怨みん。是に於てか一瞬時によく永久を味ふ者たるを得べし。眞個の永生

は斯る生活を謂ふ、徒に日月を重ねるの謂ひにあらず。朝に道を開いて夕に死すとも怨みざる、此れ眞個の永生に入れる者なり。眞個の安立、眞個の寂靜こゝにあり。此一介の身を以て尙ほ克く無限の進化を扶くるの天職を帶ぶると思ふ。故に我心靈の根柢に於て無限者に觸るゝを覺ゆ。故に一刻一瞬もわれに取りて無限の意味を有せざるはなし。「この兄弟のいと微さき者の一人に行へること」も亦無限の價值を含めりと見ずんはあらず、豈に謹嚴ならざるを得んや。無限は遠く離れて天外にあらず、近く有限の中にあり、丹花も落葉も共に無限の妙義を語らずや。

天地を住家となしてますものを

遠しとのみはなど思ひけん

無窮の進化、無限の活動、こゝに常住の相あるを看よ。進化てふことそれ自身は不變、活動てふことそれ自身は不動なり。無常と常住、有限と無限、不足と満足、辛苦と安樂とが進化の道行に於て妙に相融會せらるゝなり。生死の隔てが毀たるゝなり。此生滅苦樂の全體が意味ある者となるなり。此意味ある全體の爲に我一身を献ずるこ

とを肯ぜざるが故に、淺薄なる厭世主義も生ずるなり、不健全なる寂靜主義、隱遯主義、頑陋主義も生ずるなり。眞の生きた活動が爲されぬのである。

不健全なる寂靜主義、固定主義、頑陋主義は我東洋の社會には有り餘れり、東洋の文明をして澁滯せしめし一大原因はこゝにあらざして何處ぞ。我日本國を根柢より振起せんには大世界觀なかるべからず。而して進化の歴史、世界の動きに見捨てられざらんと欲せば、活動主義の世界觀を取らざる可からず。我國民は久しく寂靜主義の安眠を貪りぬ。今にして我社會を救ひ、吾人の生に活を與ふる者は無窮活動主義の大世界觀にあらずして何ぞ。寂靜主義はよろしく之を退治せざる可らず。然れども此寂靜主義と共に、否な此にまさりて排斥すべきはかの凡俗主義なり。己れ理想の何物たるを解し得ざるが故に之を空想と同一視し、神と云はれ佛と聞き禪と見れば恰も蛇蝎の如くに嫌惡し、わが狹隘なる一宗旨の外には眞理なしと獨斷し居れるかの淺薄なる無風流なる俗論者の如きに與せんよりは、吾れは寧ろかの禪味を語る者を友とせん。然れども最も唱ふべきは無窮活動の主義である。

活動主義の要諦夫れ斯の如し。而て「機」や、實に活動の樞機にして段階たり。其依據する所にして其過程たり。換言せば活動そのもの、實現に外ならぬ。人は此主義によりてこそ、常に生に緊張あらしめ、そをして生甲斐あり力ある人生たらしめ得、否な無窮の生命たらしめ得やう。此眞義に覺醒するとき、我能く事物の眞を悉くし、克く事物に副ひ、事物と共に存し、之と共に生き、之と共に移り、些の無理もなく支障もなく、そを自在に駕御統整し得可く。斯くて自他何れも其全能力を發揮することが出来る。人生萬事は機の支配する所なり。機を離れて人生を談ずる者あらんか。未だ堂に入らざる者である。況んや活動の頂點に立てりとも稱す可き戰爭の指導と實行との如き、一に之を「機」に依らしめねばならぬこと、識者を待つて知らざる所である。此眞義に徹してこそ、始めて其世界が卑俗ならず、腐敗せず、不斷に生氣を發揮し得可く、出世間も亦始めて隱逸の弊なきを得やう。而て又懸軍萬里長年月の奉公に堪へ、克く難戰苦闘に處し、死中自ら活路を求むることが出来る。是即ち眞の大乘主義であり、日本人としての天皇道の實現に外ならず、而て又「まこと」の眞相にし

て其の顯現に別ならぬ。

無窮の進行、機の進展、何の觀念かこれよりも更に宏大無邊崇高莊嚴なる感想を吾人の胸裡に注瀉するものあらんや。無盡藏なる生命の淵源こゝにあり。日夜この至高絶大なる感想に觸るゝ個人は常に壯者たるを得ん。如何なる艱苦にも耐ふるを得ん。此感想に振起せらるれば、古びたる國民も再び若返るを得ん。如何なる悲運に陥るも、決して失望落膽する要もなく。勿論何の彼のと羨望や嫉視や喧嘩にのみ没頭するの要をも見ざるに到る可きこと、疑を挟む餘地を持たぬ。

第三款 辛 苦 觀

前述の如く、吾人は活動的機論的世界觀、人世觀の下に、世界の凡てをして價值あらしめ、そをして理想に貢献する所あらしめ、靈化 Spiritualize することが出来る。而てそこに始めて萬有各其所を得しめ、宇宙の進展に對し參與せしむることが出来る。余は拙著に所謂世界の美化も淨化も純化も亦皆先づ此處より出發せしめねばならぬものと切思する。斯くて世に醜なるもの又必ずしも所謂醜ならず、偽亦必ずしも偽なら

惡亦必ずしも所謂惡ならず、而て辛苦亦辛苦ならざるを觀得可く。そを活かし、そを善導し、收用し、以て吾等の大業に参加せしむることが出来る。茲に始めて、常住、心から愉快にして且勇氣に充てる人生を現出し得るのである。此大悟なくんば、吾人共に治を語るに足らず、兵亦談ずるに足らざること多言を待たぬ。以下此見地に基き、故大西博士の所言に藉り、世人の尤も厭嫌する辛苦其者に就き觀察しよう。

大西博士の所
説

「天地は春風鶯歌の歡樂郷をのみ現せんと努めず、又た悲風暗雨の慘澹たる境界をも吾人に示すことを怠らず。是毫も意味なき事なるか、これを天地の惡意に出でたりと見るべきか。何が故にその如くには見る。是れ只だ世に苦痛ほど忌はしきものなく快樂ほど慕はしきものなしと、思へるが故にあらずや。この如く思ふが、是れ凡べての厭世教の根柢に潜める思想にあらずや、苦痛豈にそれ程にわろきものならんや。吾人の苦痛によりて學ぶべきこと多々あり。此の苦痛の意味を學ばんが爲に吾人は此世界に生れ出でたり。苦痛を受けんが爲にはあらず、苦痛によりて其意味を學ばんが爲なり。苦痛によらずば其意味の學ぶべからざるを奈何せん。此意味とは何ぞや。吾人の

無窮の活動（言ひ換ふれば無限の理想を慕ひ求むる心）の無上の貴さを知ることは是れなり。千萬無量の苦痛も猶ほ此活動の絶対無上の價值には代ふ可らざることを知らんには、先づ苦痛を嘗めざる可らず。苦痛を去らんが爲に活動するにあらず、活動せむが爲に苦痛を去るなり。十字架の價值は十字架上の苦痛を経て始めて知るを得べきなり。高きに到れるの價值は先づ卑きに打勝ちてこそ知らるれ。嗚、苦痛は吾人を警醒するの良師なり。苦痛は事物の改造されざる可らざる状態に陥れることを示すもの、快樂は事物の改造の宜きことを示す者なり。然れども改造の必要の限りなきが如く、快樂と苦痛との相交もすることも亦窮りなかるべし。一旦改造されし物も尙ほ更に改造されざる可らず、而して此無窮の改造が吾人に取りての本來の職分なることを知り、こゝに吾人の光榮と目的と價值のあることを知らば快樂と苦痛とのわが人生に交もする所以を知るに難からじ。

かるが故に吾人の此世に在るや快樂と共に苦痛を歓迎すべきなり。否な吾人は之を歓迎することを肯ぜずとも、天然は吾人に苦痛を降すことを思ひ止まらざるべし。吾

人は顔を背くるも、苦痛は世に其跡を斷たざるべし。寧ろ之を歓迎するの勇壯なるに如かず、苦痛は、逃げ隠れて、顔を背けて、滅せらるべき者にあらず。之を歓迎することによりて始めて之に打勝つを得べし。而て之に打勝つことに於て其意氣に於て其心底に於て其膽力に於て其活動に於て、快樂を享くるにまされる無垢最勝の價值の存するなり。吾人の世界は片目しひたる樂天論者の描くが如き歡樂境にあらず。萬物は産みの苦しみを爲しつゝあるにあらずや。掌中の珠と愛しむ小兒も、哲人の愛兒なる眞理も、回天動地の革新も、耶蘇の救ひも、釋迦の悟りも、皆是れ産みの苦しみを爲して産み出す所にあらずや。生物界の進化が一大歩を進めんとする時には、數限りなき生物の惜し氣もなく踏み潰ぶさるゝにあらずや。進化の一段階は夥しき生物の苦痛を以て買はるゝにあらずや。苦痛を享受するは、是れ卑しきことなるか。否な偉大なる苦痛を受け得るは、是れ其爲人の偉大なるの證にあらずや。小人は、詰問者流は、平然として豚と共に其世を送りて、人類の大悲痛を共にすることを知らず。彼等は大悲痛を感ずるの能なきなり。或女詩人は問うて曰く

Is it so, O Christ in Heaven, that the highest suffer most ?

That the mark of rank in nature is Capacity of Pain,

And the anguish of the singer makes the sweetness of the strain ?

天然は、人生は、偉人の経験は、此間に對して然りと答ふるの外なし。その何故に然るかを異しむ勿れ。吾人が生活の目的の只だ苦痛を避けて快樂を求むるにあらざるを知らば、何ぞ之を異しむことをせん。快樂を享くることを以て吾人の終極の目的と思惟するが故に、種々の迷誤と疑惑と無理なる悟りと病癡的厭世と超然的安樂主義とを生ずるにあらざや。若し安樂を求めば、豚たると「ソクラテス」たると何の擇ぶ所ぞ。若し此世に於て樂しみを享けんが爲に吾人は生れ出でたるならば、予輩は人生の不道理不都合不整頓極まれる者なることをかこたざるを得ず。寂滅爲樂と説くは斯る世界觀の必然の結果なりと思惟す。此結果に到達するの勇氣なきものは念佛唱名もしは贖罪の不思議の功德によりて極樂往生せむことを願ふべし。然れども彼等は遂に極樂往生するを得ざるべし。噫、彼等は神を拜まずして安樂を拜む、安樂は彼等の神なり。

吾人を殺すものは斯の如き片目的安樂主義なり。此の如き安樂教を奉ずる以上、無理にも世相の他の半面を視ることを拒まざる可らず。此の如き安樂教の信仰を以ては人生の問題は決して解し得られざるなり。嗚呼、排斥すべきは此安樂主義なるかな。何ぞ辛苦てふ者の（この人間界と名くる戰場に於ける弱武者の之を忌み嫌ふにも拘らず）頑として存在するの事實を認めざる。看ずや、吾人の住む此地上界は粒々辛苦の世にしあるを、何すれど此粒々辛苦の意味を悟らざる。辛苦よ、汝を忌み嫌ふ者の多きが爲に、吾人の世界に於て實現すべき理想の進歩の斯くも遅々たるにあらざや。

一度び如上の信念にして確立せられんか、辛苦我に於て何かあらん、そは尙ほ甘きこと蜜の如かる可きである。斯くて余は、艱苦身に振り懸る毎に、曾て幼時小學修身書に於て耽讀せる孟子の所言を想起せずには居られぬ。曰く

孟子の獅子吼

天將降大任於是人也。必先苦其心志。勞其筋骨。餓其體膚。空乏其身。行拂亂其所爲。所以動心忍性曾益其所不能。

余は信ず。吾人は如上想念の許に、始めて活動的世界觀と人生觀とに徹し得可しと。

目前輕微なる利害に心動き、僅少なる悲痛と困難とに眼暈らみ、浮薄なる安逸と快樂とに目眩する者、曷んど克く事物の正當なる進展と眞諦とを觀破し、活世界の活機を捉握するを得可き。古より事を成すの雄者巨人にして其一面冷靜ならざるものはない。そは彼等に人間味なく温情なく熱誠なしと云ふに非ず。否な彼等こそ凡俗に絶する甚大なる熱情の持主なのである。然れども彼等や決して目前の小事に眩惑するものにあらず、固より快樂や私利に飲まるゝものならず、而て困苦と缺乏とに屈服するものではない。其目指す所は宇宙の眞理であり、大道であり、事物の眞髓であり、而て又人生の眞諦である。是れ其一面金鐵だも尙熔かさずんば止まざるの情熱を保有し乍ら、其一面極めて冷靜なる所以である。而も此冷靜や其中既に自ら、世界の風雲を捲起す可き絶大なる勢力を包有せるを知らなければならぬ。是れ即ち冷熱一如とも云ふ可きものにして、所謂英雄の英雄たる所以や、一に繋つて以上の自由性に存するものと云ひ得やう。而て斯る勢力の發揮と收藏と而て自由性の發現とが又盡く「機」の消長屈伸及往來に俟たざるものなきは、多言を要せざる所にして、是れ即ちまことそのもの、眞の顯現に外ならぬ

青年よ、發奮せよ、何すれど自ら進んで「自由性」を獲得せざる

第四款 機論 本論

已に動的世界觀と人生觀とを了得せんか、そこに湧出す可きは序言に述べた「機」てふ想念である。「機」の思想は往昔東洋に於て、動的世界觀及動的人世觀を其本旨とする「易」の説く所であり。紀元前西洋に於て既に先哲の説く所であり。而て我國に在ては、武士階級の深く歸依せる禪宗の特に唱道する所である。上述の如く、人間萬事は皆盡く機の支配する所ならざるなきも、就中深刻なる自己意識に目醒め、國家の存亡を略し、生命の取り遣りを眞劍にて行ふ戰爭に於て、一層辛辣なるそが支配を受く可きこと言を待たず。「機」の一蹟と一轉と、直に能く幾萬の生靈を活殺するに足る。去れば武徳と武道との實現に關し、「機」の研究や、眞に一日も忽緒に附す可らざるものがある。而もそは實に、余の所謂「まこと」そのもの、實現に關する韜略と過程とに外ならぬ。希臘古代の哲學者にして *kyros* てふ語の創定者として知られたる「ヘラクライトス」 Herakleitos (紀元前五世紀) が「萬法流轉」を説きたるは、有名なる事實たり。又流轉の内に自性を認得するを以て道徳と見たる禪宗の二十二祖摩訶羅尊者が。二十三祖

「機」と「まこと」

萬物流轉す

摩奴羅尊者の
所説

鷄勒那尊者に、付法の偈として與へたるものと稱せらるる、「心隨萬境轉、轉處自能幽、隨流認得其性、無喜亦憂」の如き、亦如上の精神を説けるものにして。そは主觀的なる自己を脱して大自然の大法に廻入することであり。茲に庶幾くは「機」の存在と其正體とを體得し得やう。學者が、人格を説き、それを以て「有限と無限との間の緊張の現はれ」なりとなせるが如き、亦人格を以て「動的生命」と爲せるものに外ならぬ。

斯くて世の中の一切萬物も人間も、皆常に進み進んで已まざるものである。而て其進むや、「機」に隨ひ、終始之と共に進み之と偕に動いて居る。機や機や、汝以すれぞ若かく神祕にして幽玄なる。何人か夫れ克く汝を説き、汝を拉し、汝を御し以て自家藥籠中のものたらしめ得可き、そは近代流なる一部の受賣的學者に非ず、我利主義に充つる一部の政黨者流に非ず、漁利是事とする一部の事業家に非ず、徒らに大言壯語する法螺吹でもなく、無暗に文化を振り廻はす新しがりやでもなく、而て又昇進欲にのみ没頭する一部の官僚軍人の能する所でもなく。尙又地位と財産と經歷と將又利慾に燃ゆる術策も、燥急なる努力も、能く爲し得る所ではない。そは實に眞面目にして

苦勞人證語

眞正なる努力者であり、宇宙人生の眞髓を獲得せるものであり、眞正なる理想の保持者であり、我執我慾を「しみ」抜きせる眞人間であり。而て其の限り、そは不撓不屈進んで止まざるの苦勞人であり、所謂酸いも甘いも噛み分けた深き同情心の保持者であり、實行的勇者でなければならぬ。

「機」何物ぞ

斯くて次に起る可きは、「機抑も何者ぞ」とふ問題である。余は本問題の *how* の如き、單に所謂學習のみによりて爲し得べき事ならず、如何程耳に聴き目に讀むも唯之のみにより到達し得可き事でなく、どうしても各自の熱誠なる努力と不撓の修養とに依りてのみ、獨り眞我により體得し得可きものなるを確信するも。其資料として、以下少しく右に付、研究しようと思ふ。易に曰く、「夫易、聖人之所以極深而研幾也、唯深也故能通天下之志、唯幾也故能成天下之務、唯神也故不疾而速、不レ行而至」と。朱子之に註して曰く、「幾微也。所以極深者至精也、所以研幾者至變也」(繫辭上傳第十章)又曰く「所以通志而成務者、神之所爲也」と。是れ幾を研き微を極めんか、始めて一切の事業も成し得可く、之を詳にすること至らんか、天下凡百の務も盡

く果し得可きを云へるものにして。而も其一面、幾と深と及び神との密接なる關係を道破し、其肯綮に中つて居る。能く深なり、故に克く幾微に察するを得、是神なり。能く神なり。故に克く深を極め、幾微を詳にし得。能く幾微に通ず、故に克く深に達して而て神なるを得るのである。易又曰く、「子曰、知幾其神乎、君子上交不諂、下交不瀆、其知幾乎、幾者動之微、吉之先見者也、君子見幾而作、不俟終日（繫辭下傳第五章）」と。是れ幾を以て、「事物動かんとして未だ動かざる際、先づ既に現はる可き兆なり」と爲すものに外ならず。斯くて「機」は常に動いて止む時なく、次より次と移行して、極り無きものである（機幾同義なり）。

如上の「機」の思想は西洋哲學でも所々に散見し得るが、其最も濃厚に顯はるゝは「ヘーゲル」Hegelの哲學に含まるゝ思想である。彼は亦世界と人生とを動的に見て居る一人で、世上一切の事物を観るに彼一流の論理に依てし、之を以て、それが進展の過程 Process なりとして居る。彼に依ると、事物は何れも皆契機 Moment たる性質を具ふるもので、現存する事物の盡くは、残らず承前起後の働を爲す可く運命附け

「ヘーゲル」の
説ける契機

らるゝものである。換言すれば、宇宙内の總ては、其生物たると、無生物たると、將又其事物たると、精神たるとに關せず、現在は過去に發し而て將來を孕むものなり。となして居るが、這は一切事物の態様を以て、機の進展に歸する思想である。彼の往時吾人の祖先により必讀の書とされた「大學」の卷首にも、「物有本末、事有終始、知所先後、則近道矣」とあるが、此「本末、終始、先後」の字句には以上と同一の思想が含まれて居り。賢哲の所言、東西符説を合するを知り得。

斯くしてそこに織り成さるゝもの即ち歴史である。去れば世上の萬象は、過去にあらん限りの經驗と事蹟との組織であり。之を徹底的に別言せば、今日迄の宇宙全般の眞歴史を繼紹し包括し之を我物たらしむる結果により、生ずるものにしてそれは即ち全歴史の動きの一過程に外ならぬものと見なければならず。而て此動きに直接參與するもの、是即ち機に外ならぬ。

然らば「機を知る」是奈何。賢明なる讀者は、恐らく此問に對し、既に明答を持たるゝならん。それは他ならず、這は口により云はれ、耳により聽かる可きに非ずして、

「機を知る」の
方法如何

是非とも各自躬らの大行たいこうによる自得に待たざる可らざること、是なりとす。然れども強て其一端を述んか。我等にして苟も虚心坦懐、自己の目指す目的と其關心する事項に對し、克く一切の過去を其内部に組織し、其進展の全般を詳悉し得んか、そこにどうしても、吾人靈府の明鏡に映出されねばならぬものがあるが、是即ち相繼で顯現すべき歴史的過程の次後の一步であり。而て之と共に體得せらるゝもの、是即ち亦機の動きに別ならぬ。斯くて余は「知機」の基礎的條件として「虛己」を進言したい。是れ雜草耘らずんば花木育たず、惡友退けずんば身心を正うするに由なく、「諸惡莫作」ならざれば「衆善奉行」を現ずるを得ず、而て克く主觀的の個我を脱却し天地の大法に乗り込むに非ずんば、所謂深と神とは之を了得するに由なきを以てある。余は嘗て某學校に於て、統御に關する基礎條項として、如上の「虛己」に就き、述べた事があるが、是亦上述と全く其趣旨を同ふするものである。

之を戦争に觀んか、敵を知り己を知り、一切の戰略的戰術的情況を知悉し、我の達すべき目的に對し之等の全部を盡く我に組織するとき、そこに必然的に湧出せらるゝ

もの、是れ將帥により獲得せらるゝ「機」其ものに非ずや。斯くして、戰に當り、將帥も、軍も皆盡く「機」に乗り入り、之に乗せねばならぬ、否な己れ自ら機中のものたらねばならぬこと、智者を待たずして知り得やう。

「機」や、上述の如く深且神であり、宇宙の神祕にして其の謎である。而もそは又如上の意味に於て、經驗の組織であり、而てそれを組織する者や實に「我」そのものである。組織に就ては茲に縷述するの暇を有せぬが、此作用に於て最も必須なるは「組織のみよく組織する力を有する」ことである。

之を譬んに、吾人身心の組織にして一度び其常を失せんか、涵養ある良味も之を自己に組織し得ざる可く、病魔は身心の違和に起因し組織の異常を意味す、而も此組織にして、完全ならんか、そは部分に對する光明であり、外界に對する力であり、而て又深であり、神であり、明であり、機を知るの力でもある。而も斯くの如く其組織を完全ならしめ、之を誠にし、之を純化し淨化するもの、亦固より人にして、そが、とらしても、「我」の明哲なる自覺と眞摯なる修養とに待たねばならぬこと、從來所々で

説述せし通りである。それは一切を盡く取込まねばならぬが、而も之に拘泥してはならず、そこに不斷激湍たる創造が準備されねばならぬのであつて、茲に絶大なる研鑽と眞摯なる工夫とが必要になるのである。斯くて之を軍に觀んか。精銳なる軍隊の練成と名將の輩出とが決して容易ならざること、亦多言を要せざる所であらう。

易に曰く、「易无^レ思也、无^レ爲也、寂然不動、感而遂通^三天之至神、其孰能與^二於此^一」と。此域や、組織せられたる「我」の理想境である。それは動中の靜にして、其中、「動」機を包藏し、眞の生ける「我」の本體其のものであり、而て又機の把握に關し最も有力なる「我」の態勢に外ならぬ。莊子則ち逍遙遊第一に於て謂て曰く。「若夫乘^二天地之正^一、而御^二六氣之辨^一、以遊^二無窮^一者。彼且惡乎待哉。故曰。至人無^レ己。神人無^レ功。聖人無^レ名」と。是即ち如上を道破せるものにして、千古の偉觀であり、至言である。

機や、實に宇宙の秘奥であり、人生の幽玄である。而も其捕捉や、敢て至難に非ず、そは一に「我」の體勢に依存する。然らば其體勢奈何。之を獲得する所以の道や、亦洪大にして無邊である。然れども之を收めんか、一心に歸着し、左の一語に盡くる。

まごころ

而てそが又實に文武一如の思想を徹底的に論證するものなること、贅言を要せざる所である。

第十章 戦争藝術觀

藝術^{Art}とは何ぞや。吾人の美的心情を唆るもの、是れ藝術であり。而て「カント」によれば、そは眞、善、美と離る可らざるものである。美と藝術とに關しては種々の學説を有するも、余は眞善美の極致を以て莊美なりとし、藝術の理想を以て人生の「まごころ」に歸せしめんと欲する者である。「まごころ」に就いては、前編に縷説したが、兎も角、そが絶對絶命眞劍なる「我」の發見なる以上、「まごころ」はどうしても窮極に於る人世救済の任務を持たねばならず。疲勞や悲哀に懊惱する時、其彼岸に於る救ひの光明は、亦實に「まごころ」に輝く藝術でなければならぬこと云ふ迄もない。されば藝術の本領とする所は、其種類を問はず、常に「まごころ」を以て其理想と爲す可きである。其の事實に即するは可なるも、理想を外にせば、既に其存在の意義を失ふもので

ある。是元來人間に凡俗と神聖との交錯する限り、吾人は常に神聖に憧れ之に縋り之に救はるゝことにより、始めて眞誠の生を味ひ、永遠の生命に生き得可きを以てある。

而て戦争の理想が、人間の止むに止まれぬ「まこと」の發現せるものたる限り、苟も戦にして正しく戦はれんか、そは實に一種の莊嚴なる藝術たらずとせぬ。否、眞の意味に於る藝術的戦争にして、始めて正當なる戦たるを得可きである。看よ、古代の戦争は著しく藝術的なりしに非ずや。之を衣川の戦鬪に於る、義家と貞任との和歌に依る應酬に見、之を信玄、謙信兩雄連年の交戦に觀んか、誰か之を藝術的ならずと云ひ得よう。假りに斯の如き記述の多くは、後世史家の藝術化せるものなりとするも、之を藝術化せる點こそ、是既に戦争が藝術味を有する確證たらずとせぬ。

近代の戦争は、そが次第に功利的となり、帝國主義 Imperiarism (日本の天皇道とは固より雲泥の差あり、故に原語を用ゆ) 的となり、而て又科學的となりし爲め、古代の如き優雅に富む藝術味を有せざるも、而も尙藝術味無しとせぬ。否、藝術化されんとする其自然的傾向あることを否定し得ぬ。其尤も著しき一面は、軍隊に於る儀式

の必要であり。例へば出征時に於る儀式、命令下達、報告に際する儀禮の如き、入城式の如き、是である。而て之等は固より其形式的たるを嫌ひ、其精神的なるを尊ぶものにして、是亦一般的藝術に於る主張と其歸を一にするものである。

人或は如上の戦争藝術觀を以て謂れ無き戯言なりとし、擯斥するものあらん。余も一應は斯く思考す。而も敢てそを茲に掲ぐる所のもの抑も亦説あり。夫れ吾人の所作たる、其當初に際しては、概ね皆心思を費し肢體を勞し、始めて僅に自得し得るものたり、未だ極めて武骨の域を脱し得ざるものなるも。そが心身の純化と鍛鍊とにより、久々純熟し、遂に第二の天性たるに到らんか、そこに心なく思なく、肢體勞するも之を身に覺へざるに到るべく、遂には我我を忘るゝの境域にも達すべし、這は已に其技神に入り、妙に通ずるものである。是即ち所作の藝術化せるものにあらざして何ぞや、而も此藝術化に於て根元的生命をなす者は、云ふ迄もなく、實に「まこと」である。而て戦争の中心を爲すものが又「まこと」なる以上、戦争の精神的肉體的高潮の極致に達するとき、そが漸次藝術味を帶ぶるに到る可きは想察に難からず。否、斯くてこ

「ヘーゲル」の
卓見
そ、始めて戦争が堂に入れ、ものなりとなすべきである。「ヘーゲル」則ち之を説て曰く、「戦争の極致は其遊戯化にあり」と。是れ其の妄りに遊戯化す可きを稱するに非ず、そをして遊戯化せしめ得る程に、習熟せしむるを以て、其理想たらしむ可しと爲す者なるが、茲に彼の所見の一頭地を抜ける者がある。這は我國古來武道の理想とする所にして、所謂「無我」の境地に到達せるものである。然らば近代戦争に於る遊戯化の方法奈何、他なし、上下一致による「まこと」の覺醒であり、其保持であり、而て又其不斷の實行に外ならぬ。而て是亦「まこと」に基く文武一如の眞摯なる實現に待たねばならぬこと、言ふ迄もない。

第十一章 帝王の武徳

帝王の武徳は帝王懿徳の實現を以て其本質とす。詳言せば、斯徳の本質たる、帝王の具ふ可き本然の懿徳其れ自らに内在する實現力にして其光たらねばならぬ。そは元來渾然たる帝徳に固有する絶大なる内力であり、發して其伸展力となり、活動力となり、而て又抵抗力ともなるものである。更に別言せば、帝王の懿徳たる、本來、國家と國民とが、之によりて、命と光とを享有し、其が本然の使命を實現し、人格の光輝を顯現し得るものでなければならぬ。這は、個我としての帝王に存在するものでなく、國家と國民との全體に即する帝王本然の斯徳でなければならぬこと云ふ迄もない。以下、此懿徳に就き概述しよう。

帝王の懿徳

帝王は、元來、國民精神の結晶せる統體にして、全民人が之によりて命と光とを獲得せんとするものでなければならぬ。随つて帝王、帝徳を有せざれば一日も其位に在ること難し。抑も帝王が一國に君臨するに當りて、其恃む所ものは絶大の威力に非ず、拔群の智力に非ず、將た又異常の聰明のみにも非ず。唯、其唯一の力として恃むを得可き所のもの他なし、躬ら體得し得たる徳惟れのみ。語に曰く「上の好む所下之より甚しきはなし」と、眞に然り。其位高ければ高き程萬人曉望の程度及び範圍を増大し、從て其一舉一動が國民全般の心理上に對し、不知不識の裡、至大の影響を與ふべきは、實例擧げて數ふべからず、此點よりするも帝王責任の絶大なることが克く分

かる。

斯くて帝王は王者としての崇高なる高德を具足せざるべからず、加ふるにそれは同時に國家人民の具ふべき諸徳の模範たるべきを理想とするが故に。其徳たる日月と其光を共にし、至公、至平、惟神、惟精、健行倦まず、不善を化して善たらしむべく、内は一切のものに光明を與へて救済主たり、外は徳の發露に依る嚇々たる盛威あり、以て不逞を制するに足るものあるを必要とす。否な斯徳無くんば、以て帝位に位る能はざるものと云はなければならぬ。以下更にその内容に就き、少しく考究の歩を進めよう。

帝王懿徳の内
容

抑も君主は全國民を包容し、之を美化し、善化し、淨化して各々其所を得しむべきものなるが故に、之が爲、特別に深奥なる諸徳を具へざる可らざること明にして、所謂「皇極」が是である。余は之を左の各項に分ちて、論究しやうと惟ふ。

人の知悉

(一) 「人」に付深く知悉すること。

君主の任務は「人」の統治にあり、斯くて人を美化し、善化し、其所を得しむるには先づ對手たる「人」につき充分知悉しあるに非れば、之を取扱ひ得ざるべきこと察知に

難からぬ。此「人を知る」にも種々の方面を有するが、君主にとり尤も切要なるものは、人の本性にして、主として人情、心持、心の動きの方面であり、別言せば、此世に於る人間の實生活を動す根本的の原動力が何なるやを突き留むること、之である。

古來、名君、賢將の事蹟を觀察すると、彼等が、克く人心を觀破し、其の赴く所を洞察し得たる爲め、豫め其害惡と憂患とを除去し、善行美事を助長し得たるを知ることが出来る。斯くて君主は其身尊嚴なる帝王として、莊麗無比なる宮殿に起臥し乍らも其の心は常に賤が伏屋の翁媪や陋ぶせき茅屋の老若やの胸奥に出入し。又遍く一般民衆の温かなる懷に抱かれてこそ、茲に始めて真正なる王者としての生存の意義を有するものと云ふべきである。

真正なる王者

畏くも 明治聖帝は、國歩艱難の際御幼少より御即位になり、具さに各種の御經驗を積ませ給ひし爲、夙に下情に通じ給ひしを拜察す。彼の數々の御製を拜讀して、誠に感激措く能はざるものがある。余は 聖帝御聖徳の中心を爲すものは、實に此點に外ならぬものと拜思する。

(二) 私心を包藏す可らず。

前述せる如く、君主の心は、大なる普遍我たらねばならず、國民全部の心を以て其眞髓と爲さねばならぬ。隨て勿論、私心を包藏す可らず、否な苟も自己の地位を自覺する眞君主ならんか、其念頭に浮ぶものは造次にも顛沛にも「全一」にして、私心の擡頭する餘地無かる可きこと、言ふ迄もない。

然れども人が一面肉體的存在物にして個我の方面を有する以上、此點で、全く私心を發生せしめざることは能はざる可く、這は必ずしも必要ならざるも、只常に「私心より自由たり得可き」心的態度の保持を必須とする。理性の所命に隨ひて私心を捨離すること、蟻の甘きに赴く如くなり得んか、私心又何ぞ我使命を壞らんや、要は我克く私心を制し、其奴隸たらざるにある。而も這は凡人にとり、言ひ易くして行ふに難く彼等一度び何物かに拘泥せば、そこに忽ち私心を發生しそを増長せしむるに到ると雖獨り君主（俗事に捉るゝことなき）にして始めて克く斯る修養を積むことが出来る。去れば君主は常に全一を惟ひ萬有を身に體せねばならぬが、而も又何物にも拘泥すべ

(三) 一切全部を知悉して、之を包容すること。

這は君主の使命上より觀て自ら明かなる事である。元來此事たる人心の止むに止まれぬ要求たりと雖、君主としては、一層、人は勿論、萬有の一切全部を知悉して、之を包容せねばならぬ。何物たりとも、其特質を知り、之を活用するの道を知るに於ては、之をして盡く人生の要求を充さしめ得可く、是即ち萬物の善美化にして、そは君主の一大至徳であり、又其至重なる使命の一なりと稱せねばならぬ。

一切を知悉して包容することになれば、一切萬物の此世に現存する使命を尊重し、

之を龜末にせぬことになるが。是れ獨り人との間のみならず、一切萬物との間に人格的關係を附くることになり、之により萬物と我との親みが附いて來ることになり。茲に初めて吾人は一切萬物をして吾人の崇高なる美化、淨化、慈化の目的たらしめ得ることになるのである。

這是獨り君主のみに限らざることなるも、統治者たる君主にとりては、其使命上絶對の重要を感ぜしむる。尙之を精神上より見れば、人の統治にして良好ならんか、其德は期せずして一切萬物に及ぶべく。又一切萬物を尊重するの精神は、聽て一切の臣民や人類を慈愛するの心持に進展すべし。即ち斯かる精神を有すること、夫自身が君主の精神修養上極めて必要になるのであり。往昔支那に於て王者の德禽獸に及ぶを以て理想とし、聖代に瑞祥ありと爲せるが如き、亦這般の消息を物語るものと見ることが出来る。

以上の諸德は君主にとり根本的のものなりと思惟す、尙之と關聯して左の諸德を擧ぐる事が出来る。

君民一德

(一) 君民一德の精神を有すること。

此德の必要にして、又其如何に廣大なるかは、君主固有の性質上多言を要せざる所である。畏くも 明治聖帝は教育勅語の末尾に於て、「朕爾臣民と共に眷々服膺して威其德を一にせんことを庶幾ふ」と宣らせ給ひき。則ち此一句により教育勅語は絶對の價值と、尊嚴性と、實行性とを得たるものにして。勅語の眞價は、そを生かす點より云へば、此「一德」にありと云ふも敢て不可なしと信ず。而て是全く 聖帝全一的なる御盛德の發露に外ならず、世を擧げて 聖帝を追慕するの情歳を追ふて彌々盛なるもの、字に因ありと云はなければならぬ。

(二) 敬神の念を保持すること。

神とは普遍なり、無限なり、絶對なり、宇宙の最高者にして眞善美愛の結晶である。而もそは心、信、深と、眞とに通ず、斯くて余は又、神即ち「まこと」なりと爲すものである。本來神も人の心により認められ、人により有らしめられしものなるも、勿論我のみのものならず、個我的のものではない。故に吾心より之を取り出せば客觀的の

存在となり、吾人は之に對して絶対の服従と憧憬と信仰の念とを感ぜざるを得ぬ。吾人は常に此神を敬することにより、個我を抑へ、邪念を離れ、此普遍を我に宿し、所謂「之を古今に通じて、謬らず之を中外に施して、悖らざる」ことが出来る。故に人は一瞬時と雖、此一念を離れてはならぬ。

而て此事たる、君主にとり、特に必要である。何となれば君主は、其本質上此普遍を敬することが元々絶対の要求なるのみならず、其使命が極めて重大なる爲め一層此神に頼るの切實なる念願を生ぜねばならず、之を消極的方面より見るも、其の最高權力を有し統治を總攬する點より、時に或は慢心を發する恐なきを保せず、又或は不知不識の裡に我儘にもなり、延いては自己内部の普遍神をも閑却するに到るの虞なきを保し難しとする修養上の顧慮より、躬ら絶えず神に縋ることによりて、我純眞を保つことに力むるを要するからである。

神は確に存在するが、之を在らしむるものは人の信仰である。結局此點より云へば神は我があらしめたもの、我心の所産なりとも云へる。而も吾人の斯心は元來宇宙の

神とは

大生命に歸一するものである。別言せば、其の分れにして、其中には此大生命普遍を宿して居り、而て斯る大生命普遍即ち神なるが故に、敬神は一面より云へば、此自己心内の普遍を信仰し、尊重し、之に頼ることであり。佛教の如きは、他力門を除き、大體此種に屬するものである。

此神に對する主客二様の見方は、往古より東西共に存在するが、余は結局心の持方の違ひに因るものにして、強て一方に拘泥するの必要なきものと惟ふ。結局どの道を通つても、終りの歸着點は大普遍になるのであるし、又此兩者は相待つて發展することになるのである。心内の神を尊信すること篤ければ、之を取り出せば、外部の神は益々尊く見え。尊き外の神に向へば、自己内部の神も一層力を得ることになるのである。畢竟此二種の見解は我心の持ち様、信仰の仕方により、何れにもなるものにしてその時の心持に従へば宜いと惟ふ。

尙斯かる大生命を完全に有するものとして人格者を神に祭れる本邦の如き立て前の處に在ては。國民の模範たらせ給ふ點より見るも、敬神の御徳に就きては、特に其切